都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調查報告書 第三冊

新田本村遺跡

2006年3月

高松市教育委員会

例

- 1. 本報告書は、都市計画道路室町新田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第三冊であり、高 松市新田町に所在する新田本村遺跡(しんでんほんむらいせき)の調査報告を収録した。
- 2. 発掘調査地ならびに調査期間は、次のとおりである。

調查地 高松市新田町

本調查 平成8年12月2日~平成9年4月11日

平成9年10月22日~平成9年12月12日

- 3. 発掘調査および本報告書作成は、高松市教育委員会が実施した。
- 4. 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々のご指導とご協力を得た。記して 謝意を表したい。

香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財センター 太田 儔

- 5. 調査は、文化振興課文化財専門員山本英之(当時)と讃岐文化遺産研究会中西克也が担当した。
- 6. 本報告書の執筆は,第1章第1節・第2章を文化振興課文化財専門員 大嶋和則,その他は中 西が行った。編集は大嶋・中西が行った。
- 7. 本報告書の遺物写真撮影は、西大寺フォトに委託した。
- 8. 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 9. 本報告書における表記および記述に関する凡例は、以下のとおりである。
 - (1) 使用した遺構略号は次のとおりである。

 S A 柱列
 S B 掘立柱建物跡
 S D 溝
 S E 井戸
 S K 土坑

 S P 柱穴
 S X 性格不明遺構

- (2) 遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。
 - a. 法量の中で()を付けているのは土器の残存値であり、〈 〉を付けているのは土器 以外の遺物の長さ・幅・厚さである。
 - b. 調整と色調が内外面とも同じ場合には内外面と表記している。
 - c. 土器胎土の粒土表記の基準

微砂:非常に細かい 細砂:0.5 mm以下 粗砂:0.5~1 mm 細礫:1 mm以上

- (3) 挿図と附図の座標は国土座標第Ⅳ座標系(日本測地系)である。
- (4) 方位の北は、国土座標第IV座標系(日本測地系)の北であり、標高は東京湾平均海面からのプラス値である。
- (5) 土壌及び土器観察の色調表現は、『新版 標準土色帖』(農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修)による。
- (6) 挿図の一部に国土地理院地形図「高松北部」「高松南部」(平成 12 年度修正測量)と高松都市 計画図「新田 1 」を一部改変して使用した。

本 文 目 次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2節 調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2章 地理的・歴史的環境	
第 1 節 地理的環境 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	2
第 2 節 歴史的環境 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	2
第3章 調査の成果	
第1節 調査区の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
第2節 遺構・遺物	5
1.1工区	5
1 古代 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	5
2 江戸時代 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	67
1) 第 3 面 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	68
2) 第 2 面 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	71
3) 第 1 面 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	73
3 近代	73
4 第1~3面出土遺物	73
2.2工区	76
1 弥生時代	76
2 古代	78
3 江戸時代 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	98
4 2工区包含層出土遺物 ······	108
3.3工区	108
1 古代	110
2 江戸時代 ······	125
3 3工区包含層出土遺物	125
4.4 工区	131
1 古代	132
5.5工区	134
1 古代	135
2 江戸時代 ·····	145
3 5工区包含層出土遺物	145
6.6工区	146
	146
2 古代	148
3 6工区包含層出土遺物	154
第4章 まとめ	
第1節 遺構の変遷	157
第2節 SD 1006・SD 3002 と条里地割 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	162
第 3 節 出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	163
第4節 新田本村遺跡の性格と歴史的位置づけ	172

挿 図 目 次

第	1	図	遺跡位置図	1	第	41	図	SD1006 下層出土遺物実測図(13)	35
第	2	図	調査区設定図	1	第	42	図	SD1006 下層出土遺物実測図(14)	36
第	3	図	周辺主要遺跡位置図	3	第	43	図	SD1006 下層出土遺物実測図(15)	37
第	4	図	調査区位置図	4	第	44	図	SD1007 出土遺物実測図	37
第	5	図	1 工区遺構配置図	6	第	45	図	SD1008 断面図	38
第	6	図	1 工区北壁土層図	6	第	46	図	SD1009 断面図	38
第	7	図	SB1001 平・断面図及び出土遺物実測図	7	第	47	図	SD1009 出土遺物実測図(1)	38
第	8	図	SB1002 平・断面図及び出土遺物実測図	8	第	48	図	SD1009 出土遺物実測図(2)	39
第	9	図	SB1003 平・断面図及び出土遺物実測図	9	第	49	\mathbb{X}	SD1009 出土遺物実測図(3)	40
第	10	図	SB1004 平·断面図	11	第	50	図	SD1009 出土遺物実測図(4)	41
第	11	図	SB1005 平・断面図	11	第	51	図	SD1010 断面図及び出土遺物実測図	42
第	12	図	SB1006 平・断面図	12	第	52	図	SD1011 出土遺物実測図	42
第	13	図	SB1007 平・断面図	12	第	53	図	SD1012・1013 出土遺物実測図	43
第	14	図	SB1008 平・断面図	13	第	54	図	SD1014 断面図及び出土遺物実測図	45
第	15	図	SB1009 平・断面図	13	第	55	図	SD1016 断面図及び出土遺物実測図	46
第	16	図	SD1001 断面図及び出土遺物実測図	14	第	56	図	SD1017 断面図及び出土遺物実測図	46
第	17	図	SD1002 断面図及び出土遺物実測図	15	第	57	図	SD1018 出土遺物実測図	47
第	18	図	SK1039・SD1004・1007 平・断面図	15	第	58	図	SD1019 断面図及び出土遺物実測図	47
第	19	図	SD1004 出土遺物実測図	15	第	59	図	SD1020 ~ 1022・1024 出土遺物実測図	48
第	20	図	SD1005 断面図及び出土遺物実測図	16	第	60	図	SE1002 平・断面図及び出土遺物実測図	49
第	21	図	SD1006 平・断面図	17	第	61	図	SE1003 平・断面図	50
第	22	図	SD1006 上層出土遺物実測図(1)	18	第	62	図	SE1003 出土遺物実測図	51
第	23	図	SD1006 上層出土遺物実測図(2)	19	第	63	図	SK1001 平・断面図及び出土遺物実測図	52
第	24	図	SD1006 上層出土遺物実測図(3)	20	第	64	図	SK1002 平・断面図及び出土遺物実測図	52
第	25	図	SD1006 上層出土遺物実測図(4)	20	第	65	図	SK1003 平・断面図	52
第	26	図	SD1006 上層出土遺物実測図(5)	21	第	66	図	SK1004 平・断面図及び出土遺物実測図	53
第	27	図	SD1006 上層出土遺物実測図(6)	22	第	67	図	SK1005・1006 平・断面図	53
第	28	図	SD1006 上層出土遺物実測図(7)	23	第	68	図	SK1008 平・断面図	53
第	29	図	SD1006 下層出土遺物実測図(1)	24	第	69	図	S D 1003, SK1010・1011 平・断面図及び	
第	30	図	SD1006 下層出土遺物実測図(2)	25				出土遺物実測図	55
第	31	図	SD1006 下層出土遺物実測図(3)	26	第	70	図	SK1012・1013 平・断面図及び出土遺物実測図	56
第	32	図	SD1006 下層出土遺物実測図(4)	27	第	71	図	SK1014・1016・1018 平・断面図	56
第	33	図	SD1006 下層出土遺物実測図(5)	28	第	72	図	SK1019 平・断面図及び出土遺物実測図	56
第	34	図	SD1006 下層出土遺物実測図(6)	29	第	73	図	SK1020・1022・1024 平・断面図	57
第	35	図	SD1006 下層出土遺物実測図(7)	30	第	74	図	SK1025 平・断面図及び出土遺物実測図	57
第	36	図	SD1006 下層出土遺物実測図(8)	31	第	75	図	SK1028 平・断面図	57
第	37	図	SD1006 下層出土遺物実測図(9)	32	第	76	図	SK1029・1030 平・断面図及び出土遺物実測図	58
第	38	図	SD1006 下層出土遺物実測図(10)	32	第	77	図	SK1031 \sim 1034 平・断面図	58
第	39	図	SD1006 下層出土遺物実測図(11)	33	第	78	図	SK1036 平・断面図	59
第	40	図	SD1006 下層出土遺物実測図(12)	34	笙	70	図	SK1037・1038 平・断面図及び出土遺物実測図	59

55	00 100	CV1000 川上連州中央河南	00	# 100 W		0.1
	81 図	SK1039 出土遺物実測図 SK1048 ~ 1050 平・断面図	60		SD2038 断面図及び出土遺物実測図 SD2040 断面図及び出土遺物実測図	91
		SX1001 出土遺物実測図	61 61	第 123 図		92
	83 🗵	1 工区 SP 出土遺物実測図	62	第 124 図第 125 図	SD2042 断面図及び出土遺物実測図 SK2006 平・断面図及び出土遺物実測図	92 93
		1 工区第 4 面出土遺物実測図(1)	63	第 125 図	SK2000 平・断面図及び出土遺物実測図 SK2012 平・断面図及び出土遺物実測図	93
	85 図	1 工区第 4 面出土遺物実測図 (2)				
		1 工区第 4 面出土遺物夫側図 (2) 1 工区第 4 面出土遺物実測図 (3)	64	第 127 図	SK2021 平・断面図 SR2070 2070 平 W 手図	93
			65	第 128 図	SP2078・2079 平・断面図	94
		1工区第4面出土遺物実測図(4)	66	第 129 図	2 工区 SP 出土遺物実測図(1)	94
	88 🗵	第1~3面遺構平面図	67	第 130 図	2 工区 SP 出土遺物実測図(2)	95
	89 ⊠	SA01 平·断面図 SE01 平·断面図	68		2 工区 SP 出土遺物実測図(3)	96
	90 🗵	SE01 平・断面図及び出土遺物実測図	68	第 132 図	SP2163 平・断面図及び出土遺物実測図	97
	91 🗵	SK01 平・断面図及び出土遺物実測図	69	第 133 図	SB2005 平・断面図及び出土遺物実測図	98
	92 🗵	SD10・15 断面図及び出土遺物実測図	69	第 134 図	SB2006 平・断面図及び出土遺物実測図	100
	93 🗵	SD11 断面図	69	第 135 図	SB2007 平・断面図及び出土遺物実測図	101
	94 🗵	SD16・17・犂跡断面図及び出土遺物実測図	70	第 136 図	2 工区 SD 断面図及び出土遺物実測図	102
	95 図	SD18・19・21 断面図	70		SE2001 平・断面図及び出土遺物実測図	104
	96 図	SX01 出土遺物実測図	71	第 138 図	SK2004 · SE2002 平 · 断面図	105
	97 図	型跡出土遺物実測図	71		SE2002 出土遺物実測図	105
	98 図	SD04 断面図及び出土遺物実測図	72	第 140 図	SK2001 平・断面図及び出土遺物実測図	106
	99 🗵	SD05 断面図及び出土遺物実測図	72	第 141 図	SK2002・2003 平・断面図	106
	100図		72	第 142 図	SK2004 出土遺物実測図	106
	101 図	SD08 断面図及び出土遺物実測図	72		SK2010 平・断面図及び出土遺物実測図	107
		SD03 出土遺物実測図	74	第 144 凶	SK2014・2015・2017 平・断面図及び	
		第1~3面出土遺物実測図	74		出土遺物実測図	107
	104 図	2工区遺構配置図	75	第 145 図	SK2020 平・断面図及び出土遺物実測図	108
		2 工区北壁土層図	75		2 工区 SP 出土遺物実測図	108
		SD2016 平・断面図	76	第 147 図	2 工区包含層出土遺物実測図	109
		SD2016 出土遺物実測図	77		3 工区遺構配置図	109
第 1	108 図	SB2001 平・断面図及び出土遺物実測図	79	第 149 図	3 工区南壁土層図	110
第 1	109 図	SB2002 平・断面図及び出土遺物実測図	80	第 150 図	SB3001 検出平面図	111
第 1	110 図	SB2003 平・断面図及び出土遺物実測図	81	第 151 図	S B3001 平・断面図及び出土遺物実測図	111
第 1	111 図	SB2004 平・断面図及び出土遺物実測図	82	第 152 図	S B3002 平・断面図	112
第 1	112 図	SB2008 平・断面図及び出土遺物実測図	83	第 153 図	SD3001 平・断面図及び出土遺物実測図	113
第 1	113 図	SB2009 平・断面図及び出土遺物実測図	83	第 154 図	SD3002・3023 平・断面図	114
第 1	114 図	SB2010 平・断面図及び出土遺物実測図	85	第 155 図	SD3002 出土遺物実測図(1)	115
第 1	115 図	SB2011 平・断面図及び出土遺物実測図	85	第 156 図	SD3002 出土遺物実測図(2)	116
第 1	116 図	SD2014 断面図及び出土遺物実測図	86	第 157 図	SD3002 出土遺物実測図(3)	117
第 1	117 図	SD2015 断面図及び出土遺物実測図(1)	86	第 158 図	SD3002 出土遺物実測図(4)	118
第 1	18 図	SD2015 出土遺物実測図(2)	87	第 159 図	SD3003~3007・3009~3020 平・断面図	119
第 1	19 図	SD2018 ~ 2020 断面図及び出土遺物実測図	88	第 160 図	SD3003~3007・3009~3019 出土遺物実測图	₹120
第 1	20 図	SD2021 断面図及び出土遺物実測図	89	第 161 図	SD3008・3021・6001・6002 平・断面図	121
第 1	21 図	SD2022・2024・2026 断面図及び		第 162 図	SD3008 断面図及び出土遺物実測図	122
		出土遺物実測図	89	第 163 図	SD3021 出土遺物実測図	123

第 164 図	SD3022 断面図及び出土遺物実測図	123	第 192 図	SK5003 ~ 5005 平・断面図及び	
第 165 図	3工区 SK 平・断面図及び出土遺物実測図	124		出土遺物実測図	144
第 166 図	犂跡出土遺物実測図	125	第 193 図	5 工区 SP 出土遺物実測図	144
第 167 図	3工区包含層出土遺物実測図(1)	126	第 194 図	SK5001 平・断面図	144
第 168 図	3工区包含層出土遺物実測図(2)	127	第 195 図	SP5039 平・断面図	145
第 169 図	3工区包含層出土遺物実測図(3)	128	第 196 図	5工区SP平面図	145
第 170 図	3工区包含層出土遺物実測図(4)	129	第 197 図	5工区包含層出土遺物実測図	145
第 171 図	3工区包含層出土遺物実測図(5)	130	第 198 図	6工区遺構配置図	146
第 172 図	4工区遺構配置図	131	第 199 図	6工区南壁土層図	146
第 173 図	4工区南壁土層図	131	第 200 図	SD6021 平・断面図及び出土遺物実測図	147
第 174 図	SD4001 断面図及び出土遺物実測図	132	第 201 図	SK6001 平・断面図及び出土遺物実測図	147
第 175 図	SD4002 出土遺物実測図	133	第 202 図	SB6001 平・断面図及び出土遺物実測図	149
第 176 図	SD4003 断面図及び出土遺物実測図	134	第 203 図	SD6001 出土遺物実測図	150
第 177 図	5工区遺構配置図	134	第 204 図	SD6002 出土遺物実測図(1)	151
第 178 図	5工区北壁土層図	135	第 205 図	SD6002 出土遺物実測図(2)	152
第 179 図	SB5001 平・断面図及び出土遺物実測図	135	第 206 図	SD6003 断面図及び出土遺物実測図	153
第 180 図	SB5002 平・断面図	135	第 207 図	6 工区 SD 断面図及び出土遺物実測図	153
第 181 図	SB5003 平・断面図及び出土遺物実測図	136	第 208 図	6 工区 SP 出土遺物実測図	154
第 182 図	SB5004 平・断面図及び出土遺物実測図	137	第 209 図	6工区包含層出土遺物実測図(1)	155
第 183 図	SB5006 平・断面図及び出土遺物実測図	138	第 210 図	6工区包含層出土遺物実測図(2)	156
第 184 図	SA5001 平・断面図	138	第 211 図	遺構変遷図(1)	158
第 185 図	SD5001 断面図及び出土遺物実測図	139	第 212 図	遺構変遷図(2)	159
第 186 図	SD5002 断面図	139	第 213 図	遺構変遷図(3)	160
第 187 図	SD5002 出土遺物実測図(1)	139	第 214 図	周辺条里地割	162
第 188 図	SD5002 出土遺物実測図(2)	140	第 215 図	硯集成図(1)	165
第 189 図	SD5003・5005 断面図及び出土遺物実測図	141	第 216 図	硯集成図(2)	166
第 190 図	$\mathrm{SD5006}\sim5010$ 断面図及び出土遺物実測図	142	第 217 図	土馬集成図(1)	169
第 191 図	SK5002 出土遺物実測図	143	第 218 図	土馬集成図(2)	170

図 版 目 次

図版 1 - 1	遺跡全景
-2	1工区全景
-3	2 工区全景
図版 2-1	3工区全景
-2	5・6 工区全景
-3	1 工区第 4 面完掘状況 (東から)
-4	1 工区第 4 面完掘状況 (東から)
図版3-1	1 工区第 4 面完掘状況 (西から)
-2	1 工区第 4 面完掘状況 (東から)
-3	S B1001(西から)
-4	S B1002(北から)
- 5	S B1003(北から)
- 6	SB 1002~1006(東から)
- 7	S D 1006(西から)
-8	S D 1006 遺物出土状況
図版 4 - 1	S E 1002(東から)
-2	SK 1139(東から)
-3	1 工区第3 面完掘状況(東から)
-4	S E 01(北から)
— 5	1 工区第2面完掘状況(東から)
- 6	1 工区第 1 面完掘状況 (東から)
-7	2 工区完掘状況 (東から)
-8	2 工区完掘状況 (東から)
図版 5 - 1	2 工区完掘状況 (西から)
-2	SB 2001(南から)
-3	SB2001 P-3柱材
-4	SB 2002(南から)
- 5	SB 2003(南から)
- 6	SB 2004(南から)
- 7	S P 2079 柱材
-8	SP 2163 遺物出土状況 (東から)
図版 6 - 1	SB 2005(南から)
-2	SB 2006(西から)
-3	S E 2002(東から)
- 4	S K 2004 石臼
- 5	3 工区完掘状況 (西から)
-6	3 工区完掘状況 (西から)

-7 SB3001検出状況(南から)

-8 SB3001(西から)

```
図版 7-1 SB 3002(西から)
    -2 SD 3002 土層断面
    -3 SD 3003 \sim 3022(西から)
    -4 SD 3008(西から)
    -5 4工区完掘状況(東から)
    -6 SD 4001(北から)
    -7 5工区完掘状況(東から)
    -8 SB 5003(東から)
図版8-1 SB 5006(南から)
    -2 SB 5004(東から)
    -3 SD 5002 \sim 5005(西から)
    -4 5工区SP(東から)
    -5 6工区完掘状況(東から)
    -6 SK 6001(南から)
    -7 SB6001(西から)
    -8 SD 6002(南から)
図版 9
        出土遺物(1)
図版 10
        出土遺物(2)
図版 11
        出土遺物(3)
図版 12
        出土遺物(4)
図版 13
        出土遺物(5)
図版 14
        出土遺物(6)
図版 15
        出土遺物(7)
図版 16
        出土遺物(8)
図版 17
        出土遺物(9)
図版 18
        出土遺物(10)
図版 19
        出土遺物(11)
図版 20
        出土遺物(12)
図版 21
        出土遺物(13)
図版 22
        出土遺物(14)
図版 23
        出土遺物(15)
図版 24
        出土遺物(16)
図版 25
        出土遺物(17)
```

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

都市計画道路室町新田線街路事業に伴い,事業主体である都市開発部都市計画課より道路予定地における埋蔵文化財の照会があった。当該地には周知の埋蔵文化財は確認されていないが,建設予定地面積が広大であること,隣接する県道高松志度線建設工事に先立ち香川県教育委員会が試掘調査を行なった



第1図 遺跡位置図

結果,縄文時代から鎌倉時代にかけての小山・南谷遺跡を確認しており,周辺部に遺跡が埋没している可能性があることなどから,事前に道路予定地内について埋蔵文化財の有無を確認する必要があった。このような状況から平成7年3月に試掘調査を実施し,道路予定地内の3地区において埋蔵文化財を確認した。西側より川南・西遺跡,川南・東遺跡,新田本村遺跡の3遺跡である。都市計画課と協議を行った結果,道路建設前に発掘調査を実施し,記録保存を行うことで合意した。これにより平成8年度に川南・西遺跡及び川南・東遺跡,平成8・9年度に新田本村遺跡の発掘調査を行なうことで合意した。

本報告書掲載の新田本村遺跡は,古代から中世の集落跡を確認したことから,平成8年度に約3,600 m, 平成9年度に約1,300 mの範囲について本調査を実施した。

第2節 調査の経過

本遺跡は南北幅約22 m, 東西約250mの細長い調査のため, 国土地理院国土座標には準拠しないで, 現状の道路や水路を利用して6区の調査区設定を行った。その区画は調査年度ごとに西側より仮称を付けた(第2図)。平成8年度は $1\sim3$ 工区,平成9年度は $4\sim6$ 工区の調査を実施した。

平成8年度の調査期間は、平成8年12月2日~平成9年4月11日であり、1工区・3工区・2工区の順に調査を実施した。1工区の調査は平成8年12月2日~平成9年2月24日であり、江戸時代の溝・土坑・井戸・3面の水田、古代の掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑等を検出した。3工区の調査は平成9年2月14日~3月19日であり、江戸時代の溝・土坑・犂跡、古代の掘立柱建物跡・溝等を検出した。2工区の調査は3月14日~4月11日であり、江戸時代の掘立柱建物跡・溝・土坑・井戸、古代の掘立柱建物跡・溝・土坑・弥生時代の溝を検出した。

平成9年度の調査期間は、平成9年10月22日~12月12日であり、6工区・5工区・4工区の順に調査を実施した。10月22日~11月6日は、全工区で重機による排土作業後に遺構検出を行った。6工区の調査は11月7日~11月14日であり、江戸時代の溝・犂跡、古代の掘立柱建物跡・溝、弥生時代の土坑を検出した。SD6001は3工区のSD3008、SD6002は3工区のSD3021と同一の遺構である。5工区の調査は11月13日~12月3日であり、江戸時代の土坑・柱穴群、古代の掘立柱建物跡・溝を検出した。4工区の調査は12月2日~5日であり、平安時代の溝を検出した。12月11日に4~6工区の航空写真測量を行った。



第2章 地理的 · 歷史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央、瀬戸内海に面している。市域の大部分は高松平野によって占められて いる。平野の境界を画する低位山塊及び屋島・紫雲山等の独立山塊は、侵食解析から取り残されて形 成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので、讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。また、 高松平野は讃岐山脈に端を発する中小河川により形成された沖積地であり,西から本津川,香東川, 春日川、新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流している。本調査地の位置する古高松(高松町・ 新田町・春日町)は、春日川、新川にほど近い地域である。両河川は水量に乏しく、平野中央部を流 れる香東川のように大規模な扇状地は見られない。また、古高松の北部は、江戸時代初期の干拓によ り陸地化されたものであり、寛永 10 年(1633 年)の『讃岐国絵図』によると、当時の海岸線はか なり内陸に入り込んでおり、屋島は島として描かれている。北を屋島に面した海岸(旧地形による)、 東を立石山山塊,南を久米山丘陵,西を春日川によって限られた高松平野北東部の一角は,古代・中 世を通じて「高松」(讃岐国山田郡高松郷) と呼ばれたが,天正 16 年 (1588 年) の高松城築城以後は, 城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料とし て『南海通記』がある。その中に天正 10 年(1582 年)頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル,此所 ハ屋島山、石清尾山両受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、遠干潟ナ春日里ト北郷ノ間、 海ノ中道アツテ通用ス。…」と記載している。ここでいう小山とは、現在の高松市新田町小山にあた ると考えられ、この小山近辺まで海岸線が湾状に入り込んでいたと想定できる。

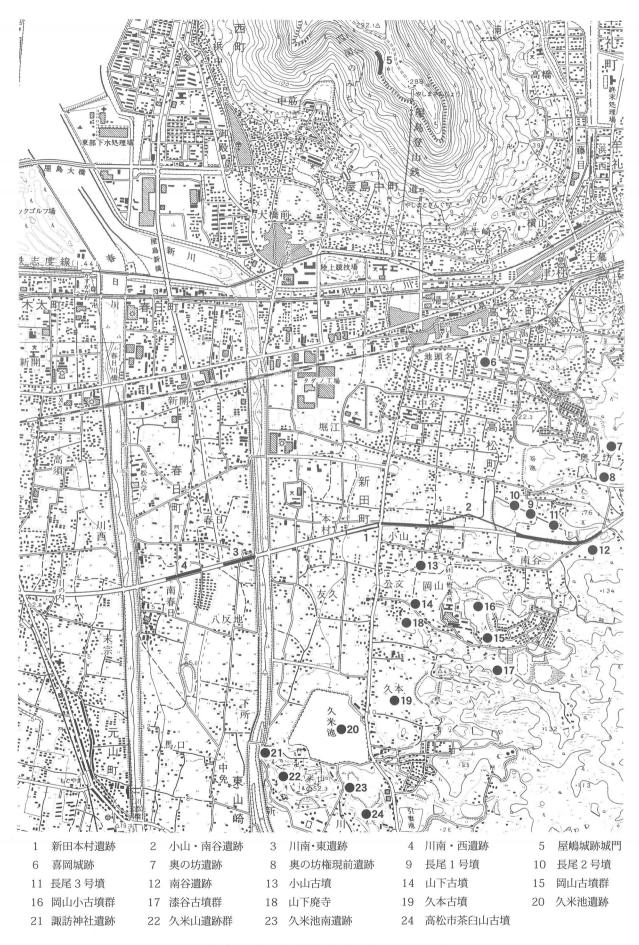
第2節 歷史的環境

本遺跡の周辺には、主に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が存在する。弥生中期前半では奥の 坊遺跡が見られる。多量の土器・石器に伴い分銅形土製品等も出土している。中期後半では久米山東 側丘陵上に立地する高地性集落の久米池南遺跡がある。後期前半では大空遺跡、小山・南谷遺跡、奥 の坊権現前遺跡がある。この中の大空遺跡は、香川県の弥生時代後期前半の標式土器が出土したこと で知られる遺跡である。

古墳時代になると、碧玉製鍬形石等が出土した前期前方後円墳である高松市茶臼山古墳が築造されている。また、石棚を持ち亀甲型陶棺や銅鋺が出土した久本古墳や、小山古墳、山下古墳等の後期古墳の分布が顕著である。

古代の遺跡では、『日本書紀』にも記載されている古代山城屋嶋城の存在が知られている。近年の調査で城門遺構や石垣が検出されている。また隣接する小山・南谷遺跡では高松平野の条里地割に先行し、方向の異なる条里地割が発見されており、今回の調査でも同様の遺構が確認できている。古代寺院としては、瓦を出土している山下廃寺あるが、詳細は不明である。

中世に入ると高松平野でも武士の台頭が目立つ。特に中央政権との関わりも多く,数多くの戦いが 行なわれている。源氏と平氏が屋島に戦い,那須与一や佐藤継信の戦い振りが『平家物語』によって 今日まで伝えられている。南北朝期には讃岐の守護となった高松(舟木)頼重が喜岡城を築城するが, 北朝方の細川定禅の攻撃により落城した。その後,喜岡城は秀吉の四国征伐時にも落城している。中 世の遺跡としては,中世末から近世初頭の溝で区画された屋敷跡が検出された川南・西遺跡があげら れる。近世の遺跡としては,川南・東遺跡等の農村集落が見られる。



第3図 周辺主要遺跡位置図(S:1/25,000)

第3章 調査の成果

第1節 調査区の位置

本遺跡は高松平野の北東部に位置し、調査地は東側の立石山山地からなだらかに下がった傾斜地の 西端に当たり、東方から西方に緩やかな傾斜で低くなっている。本遺跡の調査は、道路建設に伴う発 掘調査であるため東西方向に長い調査区に設定された。第1章第2節で前述したように、調査地は現 有道路等により6区に区画され、1工区~6工区と呼称した。1~3工区は平成8年度、4~6工区 は平成9年度に調査を実施した。

1工区は、本遺跡の西部に位置する調査区であり、西側は用水路を挟んで4工区となっており、東側は畦道により2工区と区画されている。調査以前の状況は水田であり、地表面の標高は3.10 m前後である。

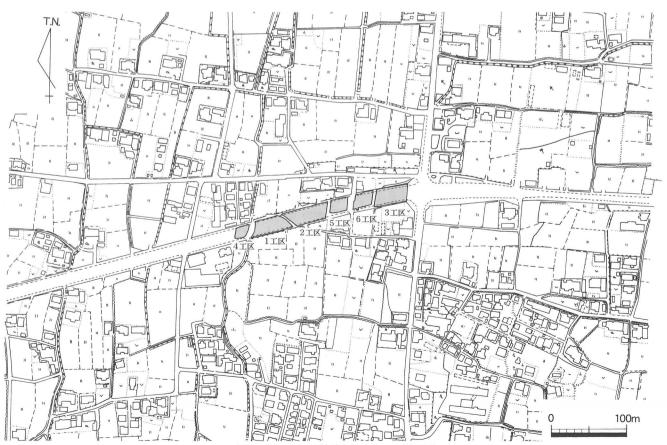
2工区は、本遺跡の中央より西側にあたる調査区であり、東西共に畦道によって区画されている。 調査以前は水田であり、地表面の標高は東端 3.90 m、西端 3.20 mである。

3工区は、東端にあたる調査区であり、西側は宅地により区画されている。調査以前の状況は水田であり、地表面の標高は東端 5.60 m、西端 5.20 m前後である。

4工区は、本遺跡の西端にあたる調査区であり、東側は用水路により1工区と区画される。調査以前の状況は水田であり、地表面の標高は3.00 m前後である。

5工区は、本遺跡の中央より東側にあたる調査区であり、西側は畦道に、東側は現有道路により区画される。調査以前は宅地であった。地表面の標高は 5.10 m前後である。

6工区は、本遺跡の東部にあたる調査区であり、西側は現有道路で区画される。調査以前は宅地であった。地表面の標高は5.20 m前後である。



第4図 調査区位置図 (S:1/5,000)

第2節 遺構・遺物

1.1工区

1工区は本遺跡の西部に位置する。調査区の平面形は台形を呈し、南側の長さは約57.50 m, 北側は28.50 m, 幅は約21.00 mである。調査区中央の南北軸座標値はX=146.770, 東西軸座標値はY=55.710 である。西端は現有のコンクリート水路、東端は細い農道に区画される。遺構面は4面あり、第1~3面は江戸時代、第4面は古代であり、多数の遺構が検出された。

土層の堆積はほぼ水平堆積をなし、上層より現水田と4枚の近世条里型水田の耕作土と床土が交互に堆積している。近世条里型水田の第3層が第1遺構面、第4層が第2遺構面、第5層が第3遺構面である。第4遺構面は地山を検出面としている。

1 古代

(1) 掘立柱建物跡

SB1001 (第7図)

調査区南西隅において検出した掘立柱建物跡である。検出した標高は 2.00 mである。北西側の一部と南側が調査区外に延びているため全容は不明であるが、検出した規模は東西 3 間×南北 4 間以上 $(4.57\,\mathrm{m}\times5.25\,\mathrm{m}$ 以上)である。検出した柱穴は 10 個であり、東西の芯芯間距離は $1.35\,\mathrm{m}$ 、南北は $1.30\,\mathrm{m}$ を測る。建物の主軸方位は $N-18^\circ-E$ である。柱穴の平面形は円形と隅丸方形を呈し、円形の直径は $0.55\sim0.85\,\mathrm{m}$ 、隅丸方形は $0.90\,\mathrm{m}$ 前後を測る。深さは $0.30\sim0.50\,\mathrm{m}$ である。 $P-1\cdot2$ の底面には柱痕の小穴を検出し、 $P-3\,\mathrm{o}$ 掘り方は $3\,\mathrm{f}$ 向に段を有し、土層断面に柱痕が見られる。

遺物は、土師器杯($1\cdot 2$)、同椀(3)、同鉢(4)、同甕($5\sim 7$)、同高杯(8)、須恵器杯蓋(9)、同杯($10\sim 12$)、同壺(13)、飯蛸壺(14)である。

1・2は口縁部内面を内方に屈曲させ、内面を沈線状に作る。2の内面は放射状の暗文が施される。 3の口縁部は細くなり、体部外面にハケが施される。5の口縁部内面と6の体部内面には横方向のハケが施され、7の体部外面には縦方向のハケが施される。

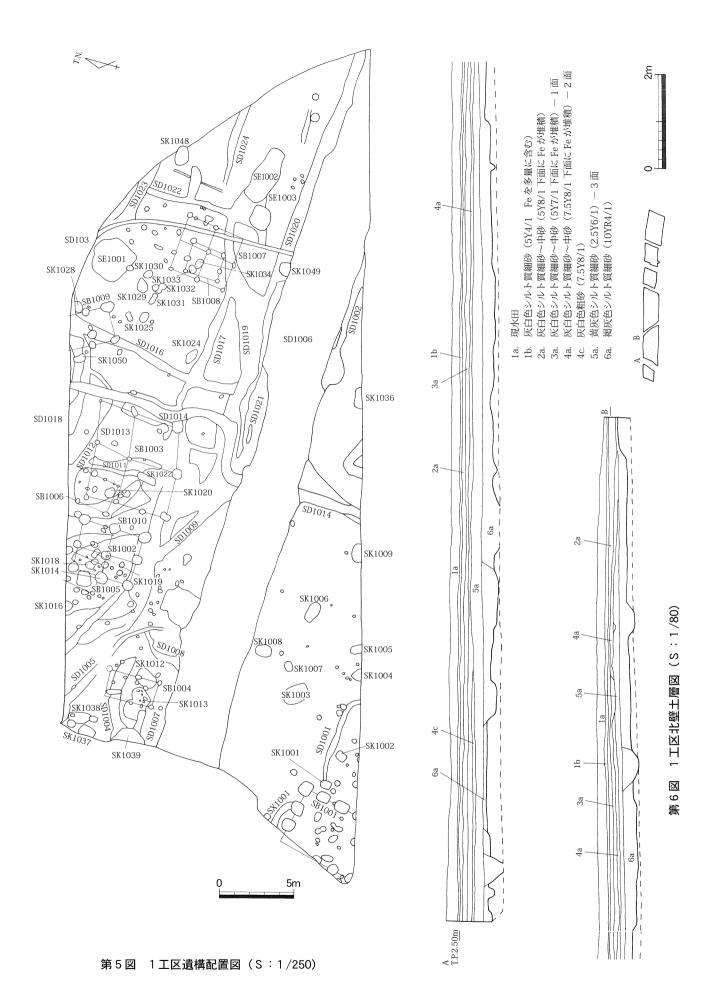
9は器高が低く、口縁部が短く屈曲する。

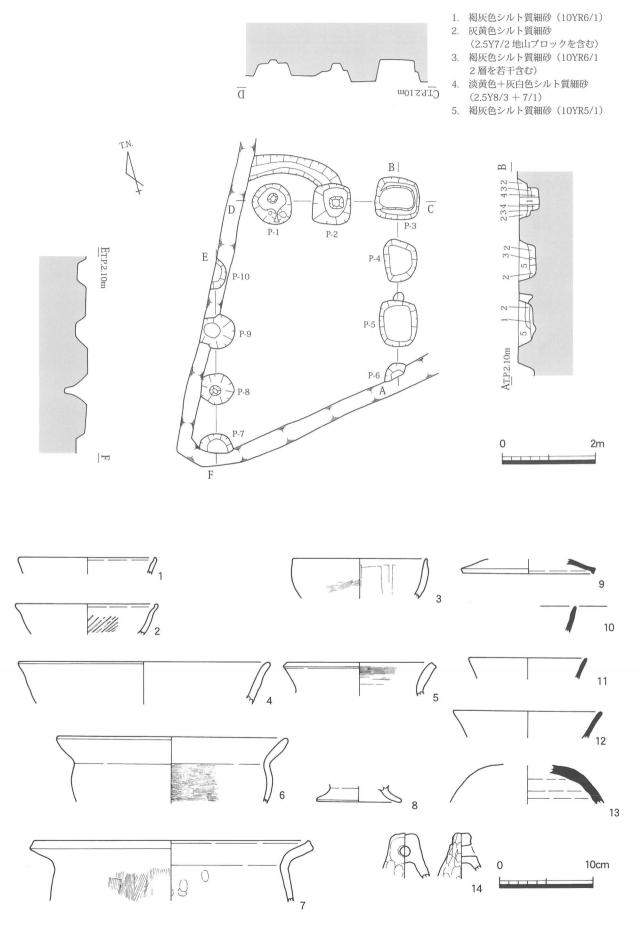
SB1002 (第8図)

調査区北西において検出した総柱の掘立柱建物跡であり、SB1005と重複し、SD1009・1010を切っている。検出した標高は 2.00 m前後である。規模は、東西 2 間×南北 2 間 $(4.10 \times 4.40 \text{ m})$ である。柱穴は 9 個であり、東西の芯芯間距離は $1.50 \sim 1.75 \text{ m}$ 、南北は $1.90 \sim 2.00 \text{ m}$ を測る。建物の主軸方位は N-4° -E である。柱穴の平面形は円形および不整な楕円形を呈し、直径は $0.55 \sim 0.85 \text{ m}$ 、深さは $0.30 \sim 0.44 \text{ m}$ を測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。 $P-6 \cdot 7 \cdot 9$ は底面に柱痕の小穴を検出した。柱穴の埋土は黄灰色シルト質極細砂・灰白色シルト質細砂である。

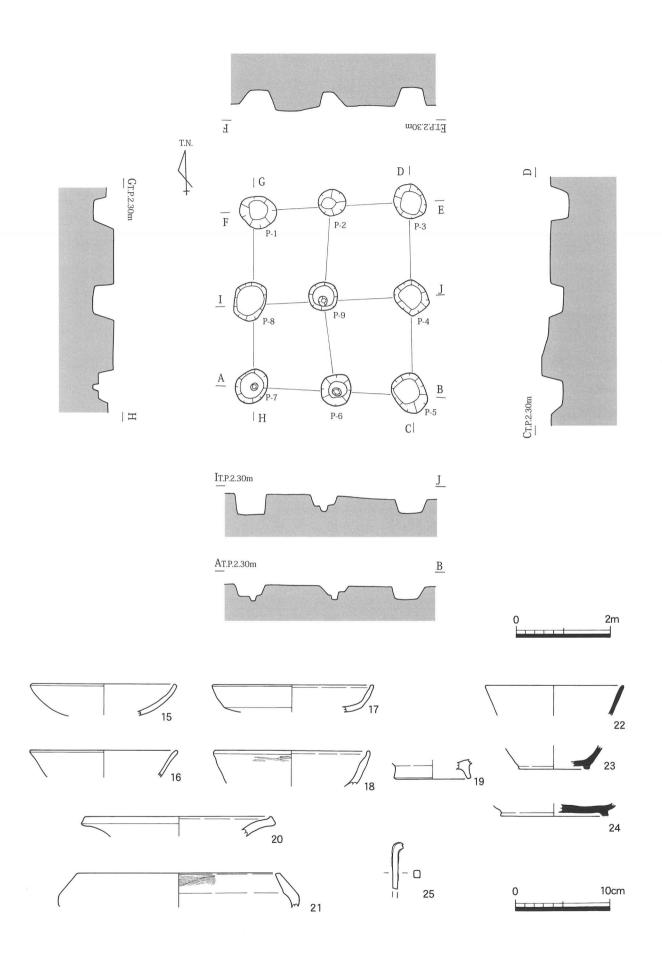
遺物は、土師器杯($15\sim19$)、同甕(20)、同鉢(21)、須恵器杯($22\sim24$)、鉄釘(25)である。 15 は内湾する体部で、外面にわずかな指頭圧痕が施され、黒斑が見られる。16 の口縁部はやや外反する。17 は器高が低く、体部と底部の境に若干の稜を有する。底部外面はハケ後にヘラナデが施される。18 は器高の高い杯で、口縁部内面にわずかな凹みを有する。体部外面の一部にヘラミガキが見られる。19 の高台は長い。

22 は直線的な体部であり、23・24 の高台は断面四角で短い。

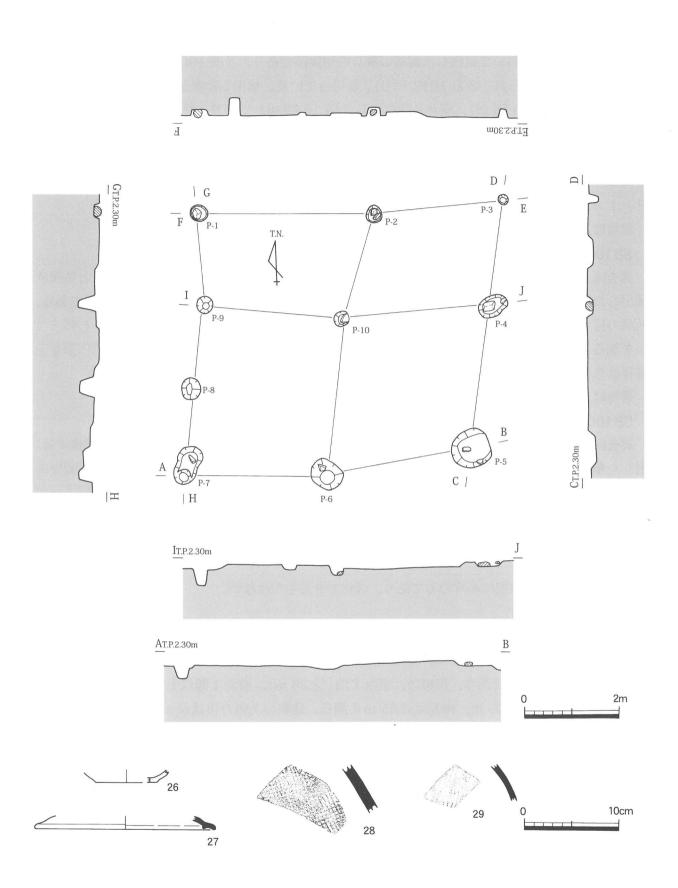




第7図 SB1001 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/80.1/4)



第8図 SB1002 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/80.1/4)



9図 SB1003 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/80.1/4)

SB1003 (第9図)

調査区中央北側において検出した総柱の掘立柱建物跡であり、SB 1002の東側に位置する。本遺構はSB 1006 に切られ、SD 1012・1013 を切っている。検出した標高は $2.10 \sim 2.20$ mである。規模は、東西 2 間 (6.75 m)、南北 2 間ないし 3 間 (6.95 m) であり、柱穴の配置は乱れている。柱穴は 10 個であり、東西の芯芯間距離は $1.50 \sim 1.75$ m、南北は $1.90 \sim 2.00$ mを測る。建物の主軸方位はN-4° -E である。柱穴の平面形は円形および不整な楕円形を呈し、直径は $0.55 \sim 0.85$ mを測る。深さは $0.30 \sim 0.44$ mであり、全体的には浅い柱穴である。P-7 は北側に浅い段を有し、 $P-1 \cdot 2 \cdot 4 \sim 7 \cdot 10$ の底面に 1 ないし 2 個の根石が残存する。

遺物は、土師器杯(26)、須恵器杯蓋(27)、同甕(28・29)である。

SB1004 (第 10 図)

調査区北西隅において検出した掘立柱建物跡であり、SK 1012・1013、SD 1004と重複する。 検出した標高は $1.90\sim2.00$ mである。規模は、東西 1 間×南北 2 間(2.05×3.60 m)である。北 西隅の柱穴は消滅し、検出できた柱穴は 5 個であり、東西の芯芯間距離は 1.70 m、南北は 1.45 と 2.00 mを測る。建物の主軸方位は N-0° -E である。柱穴の平面形は円形および不整な楕円形を呈し、直径は $0.25\sim0.50$ m、深さは $0.14\sim0.27$ mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

遺物は土師器の小片のみである。

SB1005 (第 11 図)

調査区北西において検出した掘立柱建物跡であり、SB1002、SK1014・1018と重複する。検出した標高は 2.10 mである。掘立柱建物跡の大半は調査区外となるため、その全容は不明である。検出できた柱穴は南西隅の 3 個のみであり、規模は、東西 1 間(2.40 m)、南北 1 間以上(3.05 m以上)である。東西の芯芯間距離は 2.05 m、南北は 2.70 mを測る。建物の主軸方位はN-8° -Eである。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は $0.27\sim0.50$ m、深さは $0.25\sim0.40$ mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

遺物は土師器と須恵器の小片のみであり、図化できるものはない。

SB1006 (第 12 図)

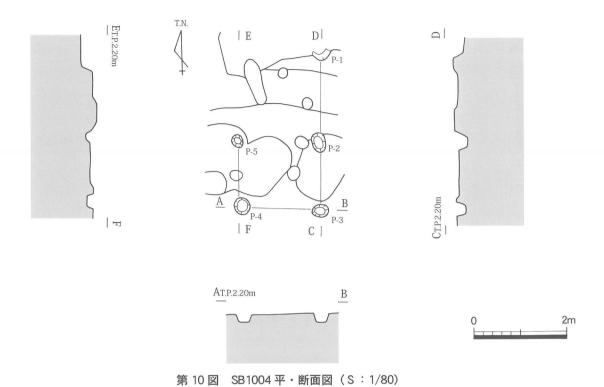
調査区中央北側において検出した掘立柱建物跡であり、SB 1003 を切り、SD 1012 と重複する。 検出した標高は 2.15 mである。掘立柱建物跡の北側は調査区外となるため、その全容は不明である。 検出できた柱穴は 4 個であり、規模は、東西 1 間(2.28 m)、南北 1 間以上(2.40 m以上)である。 東西の芯芯間距離は 2.05 m、南北は 2.05 mを測る。建物の主軸方位は $N-12^\circ-E$ である。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は $0.15\sim0.45$ m、深さは $0.15\sim0.36$ mを測る。

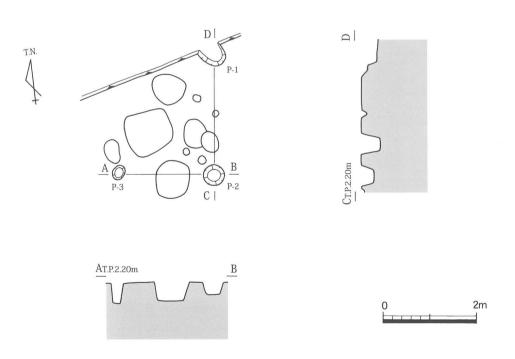
遺物は土師器と須恵器の小片のみであり、図化できるものはない。

SB1007 (第 13 図)

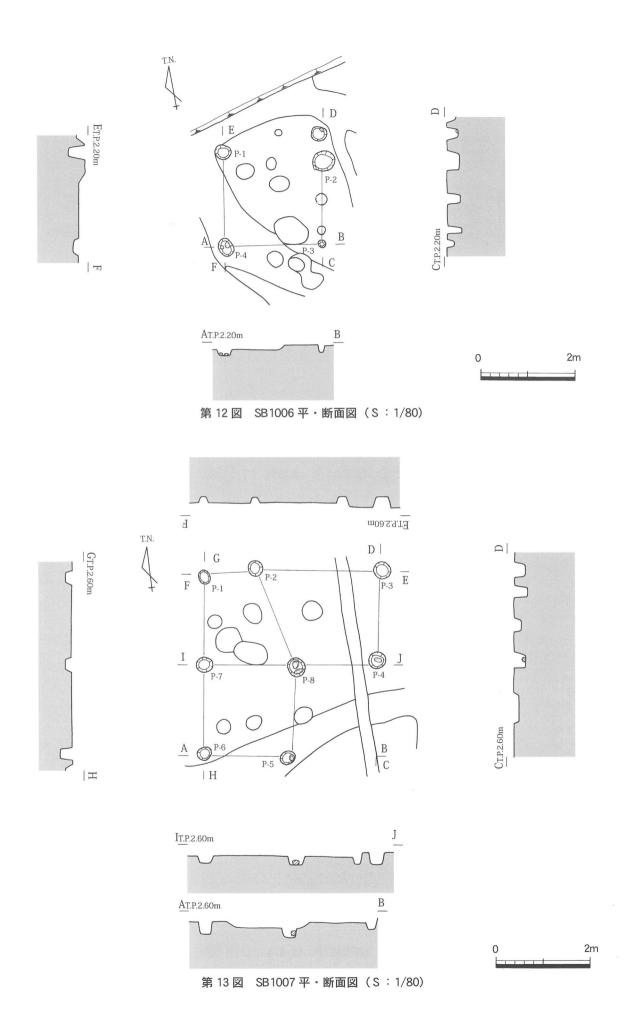
調査区東側において検出した総柱の掘立柱建物跡であり、SB 1008、SD 1017と重複し、SD 03 に切られる。検出した標高は 2.40 mである。南東隅の柱穴を欠損し、検出できた柱穴は 8 個であり、北側側柱の中央に位置する柱穴が西側に片寄る。規模は、東西 2 間×南北 2 間(4.10 m× 4.05 m)である。東西の芯芯間距離は 1.10 mと 2.70 m、南北は 1.90 mを測る。建物の主軸方位は N-7° -E である。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は $0.30\sim0.40$ m、深さは $0.13\sim0.33$ mを測る。P $-4\cdot5\cdot8$ は底面に根石を残存する。

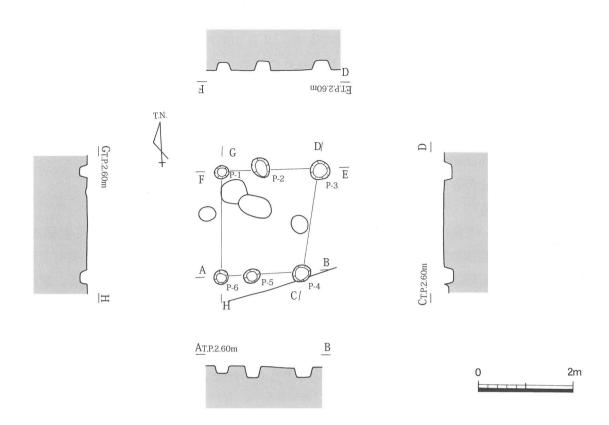
遺物は土師器と須恵器の小片のみであり、図化できるものはない。



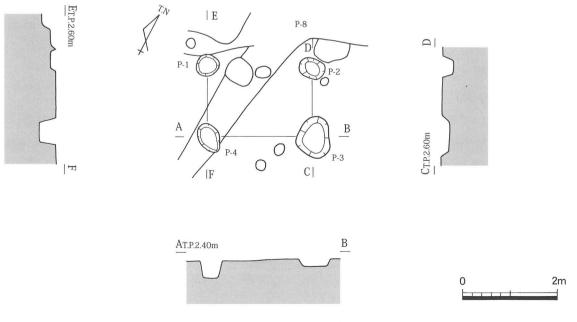


第 11図 SB1005 平・断面図 (S: 1/80)





第 14 図 SB1008 平・断面図 (S: 1/8 0)



第 15 図 SB1009 平・断面図 (S: 1/80)

SB1008 (第14 図)

調査区東側において検出した掘立柱建物跡であり、SB1007、SD1017と重複する。検出した標高は $2.35\,\mathrm{m}$ である。南東隅の柱穴の位置が西寄りのため、平面形は台形である。規模は、東西2間×南北1間($2.45\times2.55\,\mathrm{m}$)である。柱穴は6個であり、北側側柱と南側側柱の中央に位置する柱穴はやや西側に片寄る。東西の芯芯間距離は $0.85\,\mathrm{m}$ と $1.25\,\mathrm{m}$ 、南北は $2.25\,\mathrm{m}$ を測る。建物の主軸方位は $\mathrm{N}-2\,\mathrm{s}$ — E である。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は $0.28\,\mathrm{s}$ $0.40\,\mathrm{m}$ 、深さは $0.15\,\mathrm{s}$ $0.28\,\mathrm{m}$ $0.28\,\mathrm{m$

遺物は土師器の小片のみであり、図化できるものはない。

SB1009 (第15図)

調査区北東隅において検出した掘立柱建物跡であり,SD1016と重複する。検出した標高は2.23 m前後である。掘立柱建物跡の北側は調査区外となるため,その全容は不明である。検出できた柱穴は4個のみであり,規模は,東西1間(2.80 m),南北1間以上(2.15 m以上)である。東西の芯芯間距離は2.25 m,南北は1.65 mを測る。建物の主軸方位はN-27° -Wである。柱穴の平面形は不整な楕円形を呈し,直径は $0.50\sim0.88$ m,深さは $0.17\sim0.36$ mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

遺物は土師器と須恵器の小片のみであり、図化できるものはない。

(2) 溝

SD1001 (第5·16図)

調査区南西隅において検出した溝であり、西端を S K 1001 に切られる。検出した標高は 2.00 m である。溝の方位は N - 90° - E \overline{c} で、東端で南方向に屈曲する。幅は 0.33 m、深さは 0.08 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は, 須恵器杯蓋 (30), 同杯 (31), 土師器甕 (32) である。

30 は口縁部内面に短い返りが付き、天井部外面に回転ヘラケズリが施される。32 は口縁部内面に 横方向のハケが施される。

SD1002 (第5·17図)

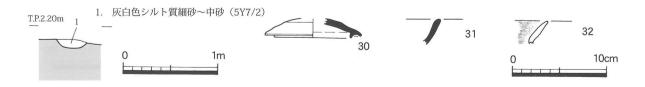
調査区中央南側において検出した溝であり、SD 1006、SK 1001 に切られる。検出した標高は 2.30 m前後である。溝の方位はN-90° -Eである。幅は 0.40 m、深さは 0.06 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は、土師器椀(33)、須恵器杯(34)、同甕(35)である。

SD1003 (第69図)

調査区中央において S D 1006 の上面で検出した溝であり、東端を S K 1010 に切られる。溝の西側は削平される。検出面した標高は 2.10~m前後である。溝の方位は $N-90^\circ-$ E である。幅は 0.37~m、深さは 0.12~mを測る。埋土は灰白色シルト質細砂である。

遺物は土師器と須恵器の小片のみであり、図化できるものはない。



第 16 図 SD1001 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

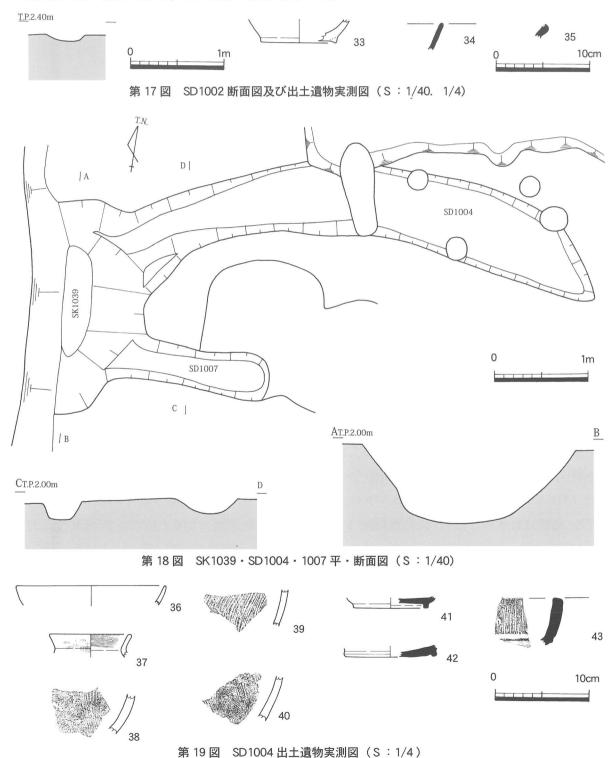
SD1004 (第 18·19 図)

調査区北西隅において検出した溝であり、S K 1039 より派生する。S B 1004 と重複する。検出した標高は 1.95 mである。溝は南側に湾曲しながら東西方向に延び、幅は $0.60\sim0.80$ m、深さは 0.14 mを測る。底面は S K 1039 に向かって低くなる。

遺物は、土師器杯(36)、同甕(37~40)、須恵器杯(41・42)、同甕(43)である。

36 は若干内湾気味の器形である。37 は「く」字状の口縁部で、内外面にハケが施される。38 ~40 の外面はハケが施される。

41 は断面四角の高台を付け、42 は低い高台を有する。



-15-

SD1005 (第5·20図)

調査区北西隅において検出した溝である。検出した標高は 2.00~m前後である。溝の方位は $N-60^\circ$ -Wであるが,東南端付近で緩やかに屈曲し南方向に延びる。幅は $0.20 \sim 0.60~\text{m}$,北端の深さは 0.44~mを測る。底面は北西に向かって低くなる。溝の断面は逆台形を呈する。浅い部分の埋土は単一層であるが,深い所では 2~Eとなる。

遺物は、土師器甕(44·45)であり、44は長胴で、外面は縦方向のハケ、内面へラケズリが施される。 45は球形の体部で、外面上位に細いハケ、下位に太いハケが施される。



第 20 図 SD1005 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

SD1006 (第 21 ~ 43 図)

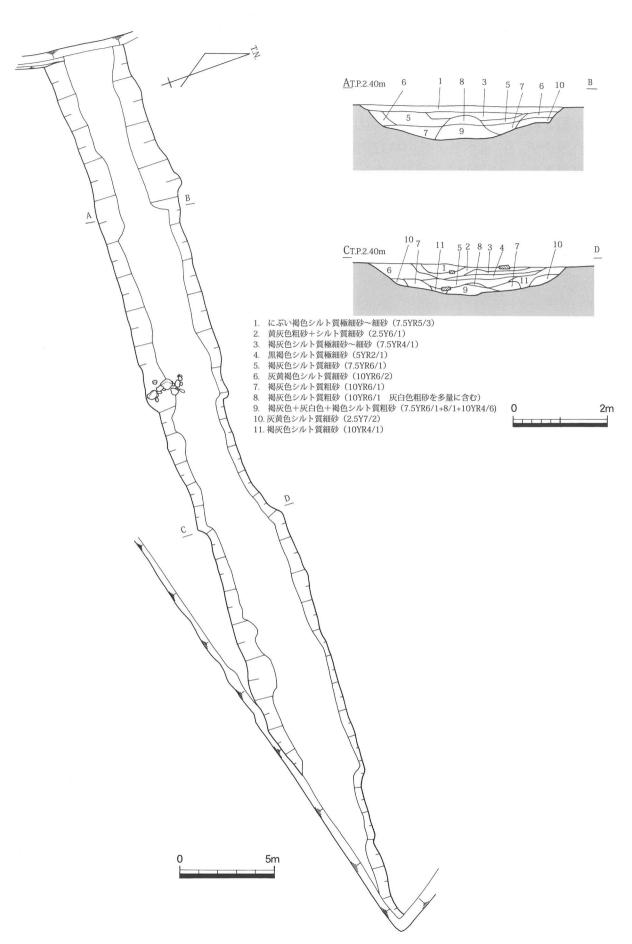
調査区中央において検出した大規模な溝である。検出した標高は $1.95\sim2.30~\mathrm{m}$ である。溝の方位は $N-90^\circ-E$ であり,直線状に東西方向に延びるが, 1 工区の西側に位置する 4 工区では, S D 1006 の延長線上に同様な規模の溝は検出されていない。南北方向に延びる S D 4003 は,本遺構より底面のレベルが低く大規模な溝であり,未調査部分において本遺構は S D 4003 と合流すると考えられる。溝は中央付近でやや狭くなるが,天幅は $3.30\sim4.50~\mathrm{m}$,検出面からの深さは $0.55\sim0.90~\mathrm{m}$ を測る。溝の断面形状はなだらかな傾斜で船底形を呈する。底面の標高は東端で $2.00~\mathrm{m}$,西端で $1.20~\mathrm{m}$ であり, $0.80~\mathrm{m}$ の比高差で東から西に向かって低くなる。本遺構の中央において集石が検出されるが,そのレベルは溝の上面とほぼ同じであり, $2.00~\mathrm{m}$ 0 の位置から $2.00~\mathrm{m}$ 0 に作う集石である可能性も考えられる。

溝内より多量の遺物が出土しており、大別して上層・下層の2つに分けて取り上げた。 $46\sim147$ は上層出土遺物であり(第 $22\sim28$ 図)、 $148\sim351$ は下層出土遺物である(第 $29\sim43$ 図)。

上層出土遺物は、土師器杯($46 \sim 48 \cdot 51 \sim 64$)、同椀($49 \cdot 50 \cdot 65 \sim 67$)、同皿(68)、同高杯(69)、同甕($70 \sim 75$)、須恵器杯蓋($76 \sim 81$)、同杯($82 \sim 101$)、同高杯($102 \cdot 103$)、同壺($104 \sim 107$)、同甕($108 \sim 112$)、灰釉陶器碗($113 \sim 115$)、転用硯($116 \cdot 118$)、円面硯(117)、飯蛸壺($119 \cdot 120$)、土錘($121 \sim 123$)、カマド($124 \cdot 125$)、羽口(126)、砥石(127)、石斧(128)、不明石製品(129)、骨(130)、丸瓦($131 \sim 134$)、平瓦($135 \sim 147$)である。

46 は器高の低い杯で、体部はやや外湾する。47 は直線状の体部であり、48 の口縁部内面はわずかな沈線状の凹みを有する。 $51 \sim 64$ は平底の底部であり、 $51 \cdot 52 \cdot 58$ の底面はナデ、 $54 \cdot 56 \cdot 57 \cdot 63$ の底面は回転へラキリ、60 は回転へラキリ後に板目、61 は回転へラキリ後にナデ、62 は回転へラキリ後に中央を板目、周縁にナデが施される。 $49 \cdot 50 \cdot 65 \cdot 6$ 6 は黒色土器 A 類であり、 $49 \cdot 50 \cdot 66$ は内面にヘラミガキが施され、65 の底部は回転へラキリが施される。

70 は口縁部内面に細かいヨコハケ,71・72 は粗いヨコハケが施される。73・74 の体部外面は縦方向の粗いハケが施される。

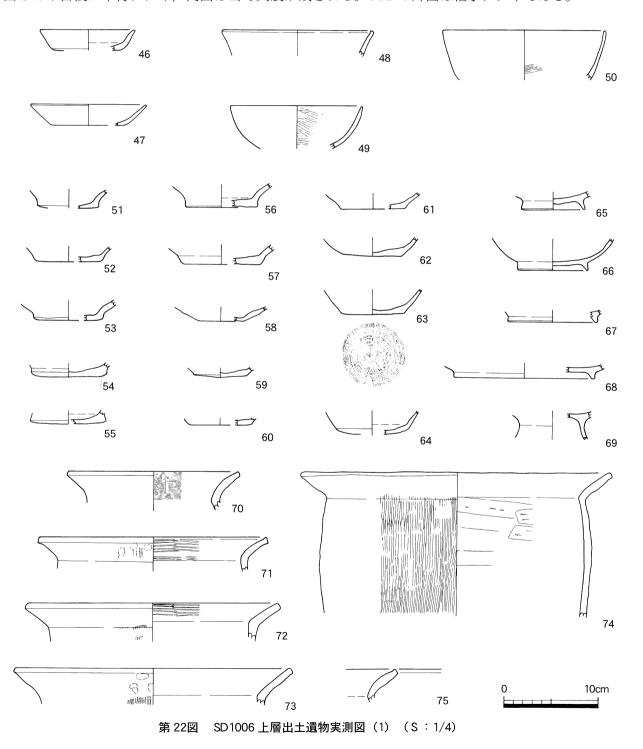


第21図 SD1006平・断面図 (S:1/200.1/80)

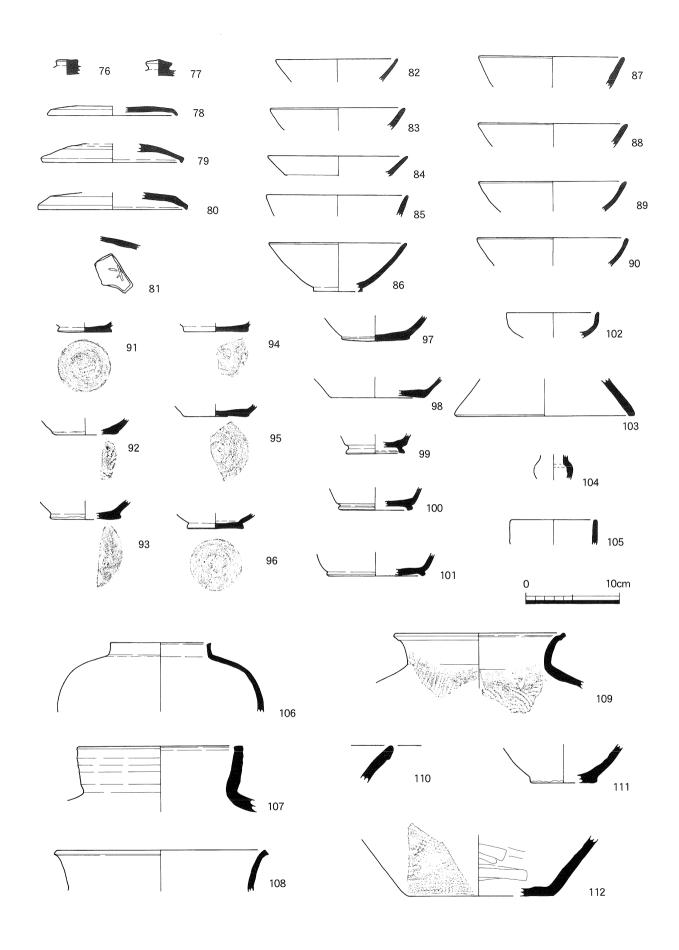
76・77 は宝珠形の摘みである。 $78 \sim 80$ は口縁端部を短く下方に屈曲させる。 $78 \cdot 79$ の天井部外面は回転ヘラケズリが施される。81 の内面に「大」の字状の刻印が見られる。

 $82 \sim 88$ は直線的な体部であり、 $89 \cdot 90$ はわずかに内湾気味の体部である。86 は器高の深い杯である。 $91 \sim 98$ は底部であり、 $91 \cdot 93 \cdot 94$ の底面は回転ヘラキリ後に中央を板目、周縁に回転ヘラケズリが施される。92 の底面は回転糸切り、95 は回転ヘラキリ後にナデ、96 の中央はナデ、周縁に回転ヘラナデ、97 はヘラナデ、98 は回転ヘラキリ後に回転ヘラケズリが施される。 $99 \sim 101$ は高台付杯である。100 の底面は回転ヘラケズリ、101 はナデが施される。

104 は小型の壺であり、106 は短い口縁部が直立する短頸壺である。109 は口縁端部が若干屈曲し、外面はカキ目後に平行タタキ、内面は当て具痕が残される。112 の外面は格子タタキである。



-18-

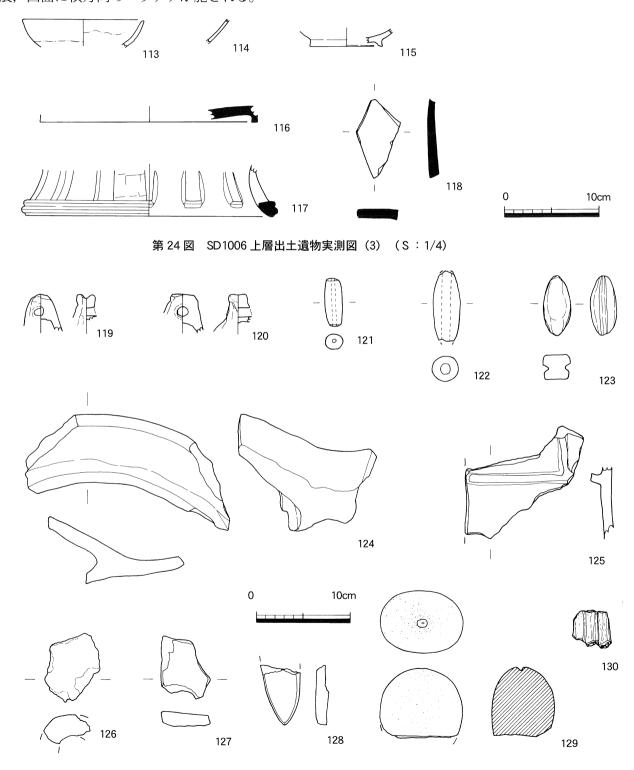


第 23 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (2) (S: 1/4)

- 116・118 は器面が非常に滑らかになっており、転用硯であると考えられる。117 は円面硯の脚台部であり、長方形の透かしを有する。脚台端部は外側に拡張し明確な沈線を巡らす。
 - 119・120 は飯蛸壺の一部, 121・122 は管状の土錘, 123 は側面に溝を有する土錘である。

126 は羽口の破片である。127 は砂岩製の砥石で、1 面を使用する。128 は安山岩製の磨製柱状片 刃石斧である。129 は表面を磨かれ、上端に小さな凹みが穿かれる。

131・132・134 は凹面に布目、凸面にゴザ目の後にナデが施される。133 は凹面の布目上に糸切り痕、凸面に横方向のヘラナデが施される。



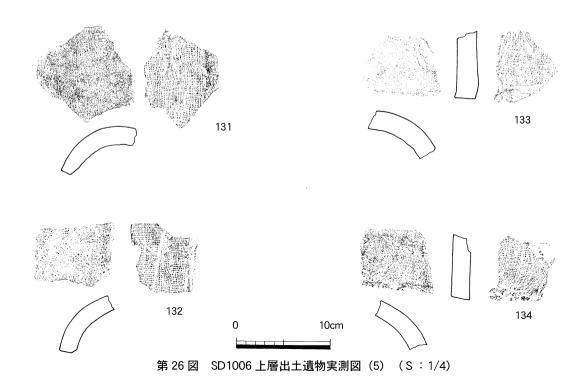
第 25 図 SD1006 上層出土遺物実測図(4)(S:1/4)

135・136・146 は凹面の布目上にヘラナデ、凸面にゴザ目が残り、側面を面取りする。137 は凹面の布目上にヘラナデ、凸面にゴザ目が残り、側面にナデが施される。138 は凹面の布目上に糸切り痕、凸面にゴザ目が残る。139 は凹面の布目上に糸切り痕と指頭圧痕、凸面にゴザ目が残り、側面を面取りする。140~143 は凹面に布目が残り、凸面に横方向のヘラナデが施される。 144 は凹面にナデ、凸面のゴザ目上にヘラケズリ、145 は凹面にヘラナデが施され、凸面にゴザ目、147 は凹面と側面に布目、凸面にゴザ目が残る。

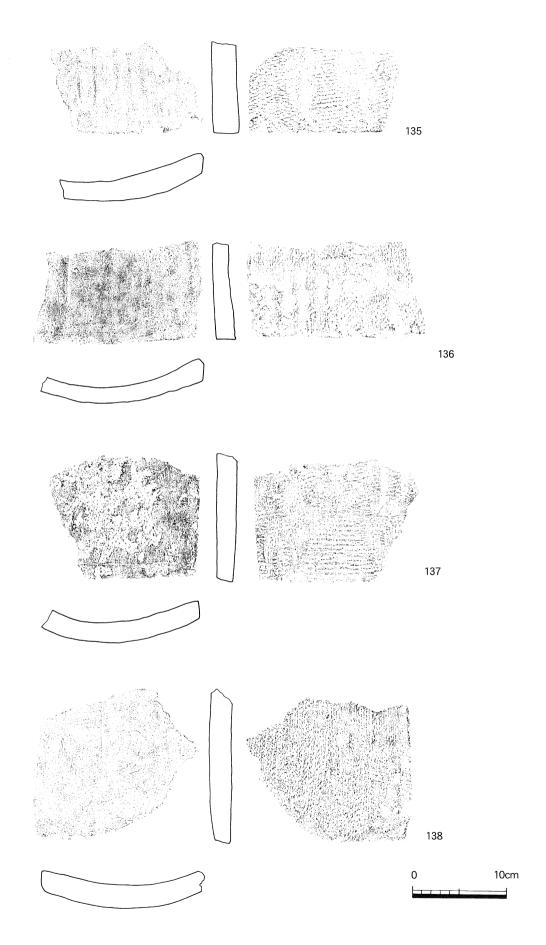
下層出土遺物は、土師器杯($148 \sim 172$)、同杯蓋(173)、同高杯($174 \sim 179$)、同甕($180 \sim 184$)、土師質土器羽釜($185 \sim 193$)、同甑(194)、同甕($195 \sim 198$)、須恵器杯身($199 \cdot 200$)、須恵器杯蓋($201 \sim 215$)、同皿(216)、同杯($217 \sim 235$)、同高杯($236 \sim 239$)、同壺($240 \sim 247 \cdot 269 \sim 275$)、同甕($248 \sim 268 \cdot 276 \sim 281$)、同横瓶(282)、同鉢(283)、灰釉陶器杯(284)、同碗(285)、青磁碗($286 \sim 288$)、緑釉陶器碗($289 \sim 296$)、製塩土器(297)、土錘($298 \sim 305$)、カマド($306 \sim 311$)、銅製蓋(312)、銅製飾り金具($313 \cdot 314$)、鉄斧(315)、刀子(316)、土馬($317 \cdot 318$)、不明土製品(319)、曲物(320)、木製品(321)、スラグ($322 \cdot 323$)、石棒(324)、丸瓦($325 \sim 328$)、軒平瓦(329)、平瓦($330 \sim 351$)である。

148 の体部はわずかに外反する。149 は器厚の厚い杯で、底面は回転へラキリが施される。150 は長い体部の杯で、151・152 は直線的な杯である。153 はやや不整な器形で、底面は回転へラキリ、154 の底面は回転へラキリ後にナデが施される。155 は器高の高い大形の杯である。156・157 の体部は内湾する。158~160 はわずかに外反する口縁部である。162 は内湾する体部を持ち、内外面はハケが施される。163~169 は底部である。163・164 の底部は台のように拡張し、164 は回転へラキリ後に板目が施される。165・166 は回転へラキリが施される。170~172 は高台付杯であり、161・171・172 は黒色土器 A 類であり、161 の内面はヘラミガキが施される。173 は宝珠形の摘みである。

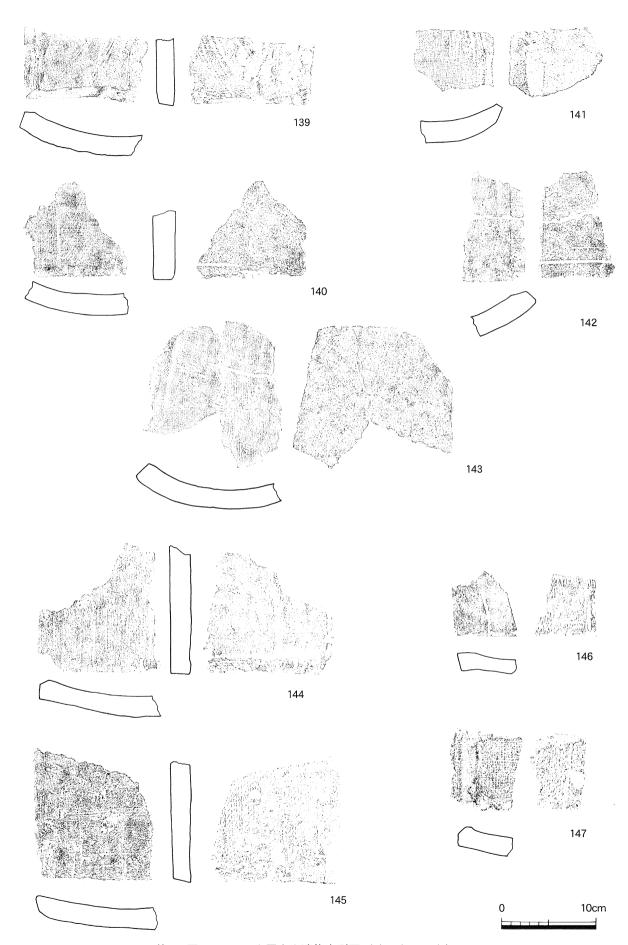
 $174 \sim 179$ は高杯の脚部である。175 の外面に指頭圧痕が施される。176 は面取りされ、やや角張っている。 $177 \cdot 178$ は短く太い脚部であり、177 は接合痕が明瞭に残存し、178 の杯部内面は回転ナデ・



-21-



第 27 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (6) (S: 1/4)

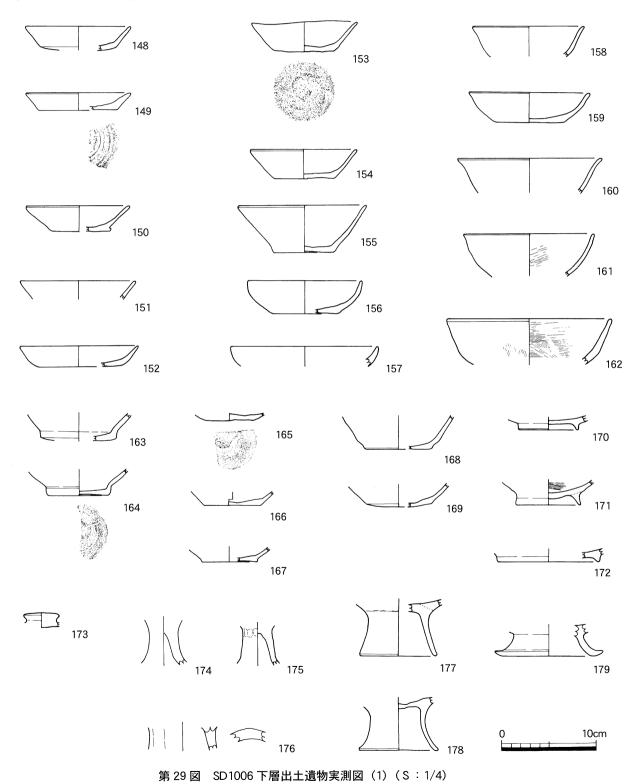


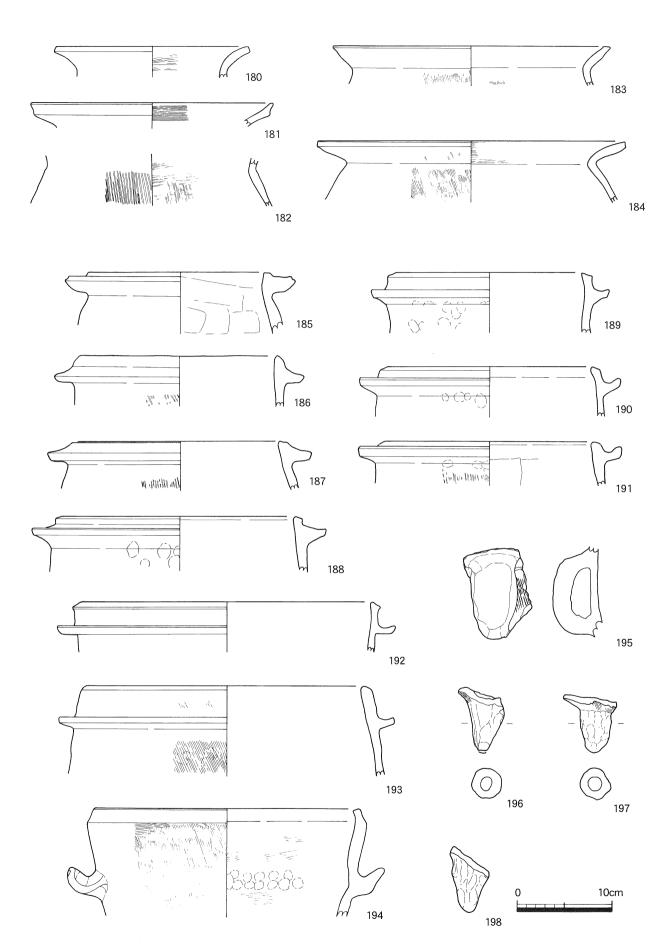
第 28 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (7) (S:1/4)

指ナデが施される。197は大きく外に広がっている。

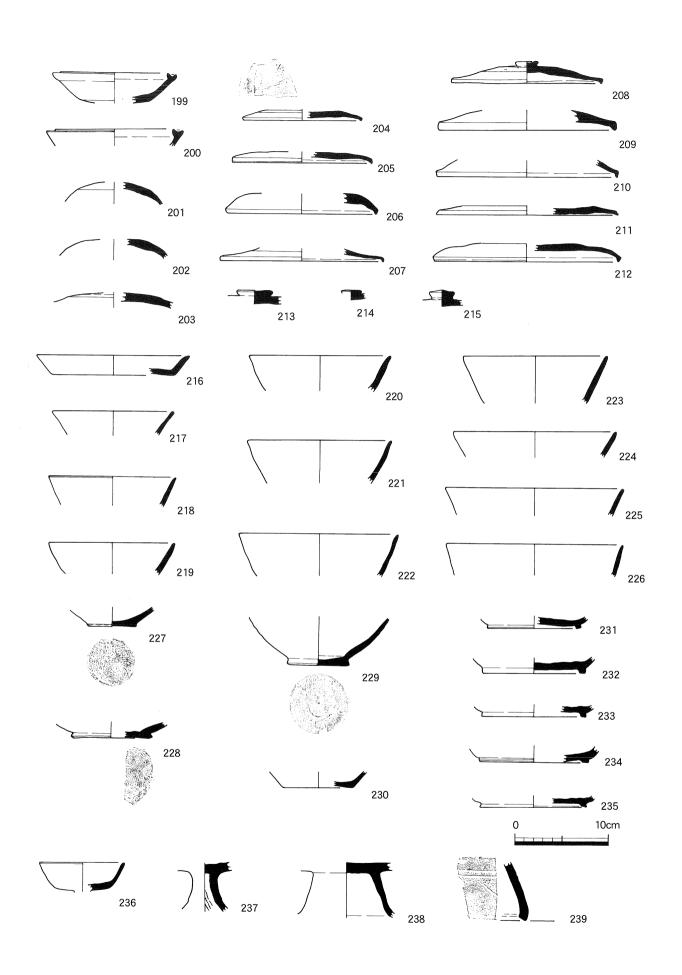
180・183・184 は「く」の字状口縁部で、180の口縁部内面、183の体部、184の口縁部内面と体部外面はハケが施される。181 は口縁端部がわずかに屈曲し、内面にハケが施される。182の内外面は粗いハケが施される。

 $185 \sim 191$ は口縁端部直下に鍔を巡らす羽釜であり、鍔は水平と上方に延びる形態の 2 種類ある。 185 の内面は板ナデ、 $186 \cdot 187 \cdot 191$ の体部外面にハケ、 $188 \sim 190$ は体部外面に指頭圧痕が施される。 $192 \cdot 193$ は口縁端部のやや下に鍔を巡らす。 194 は上に向かって開くバケツ状の器形で、把

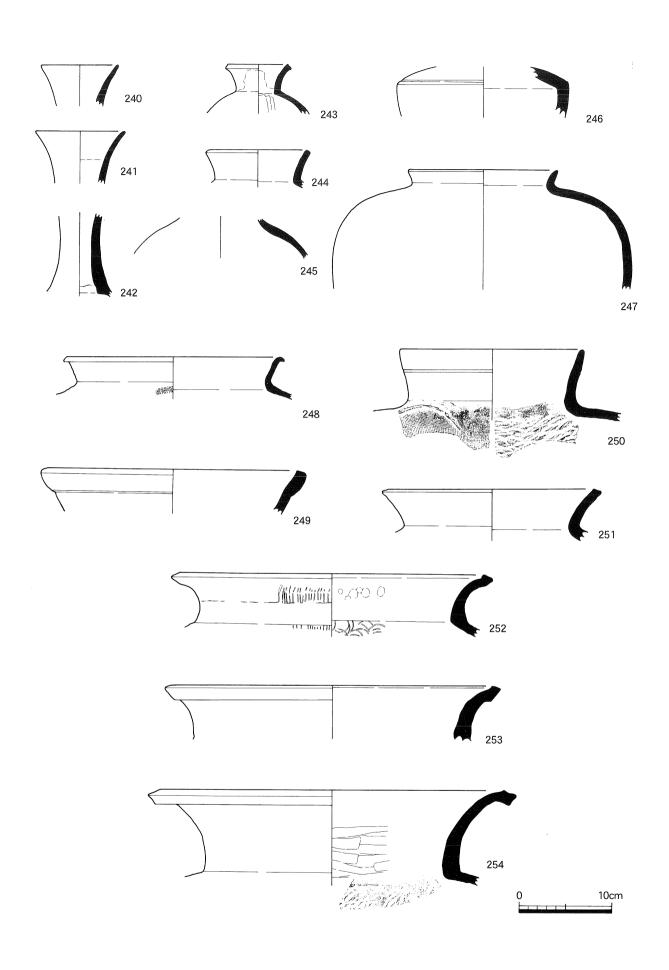




第 30 図 SD1006 下層出土遺物実測図(2)(S:1/4)



第 31 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (3) (S:1/4)



第 32 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (4) (S: 1/4)

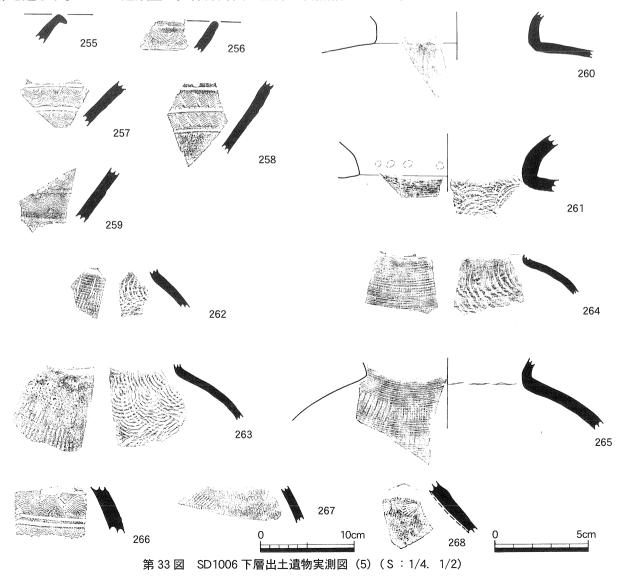
手が二つ付く。196~198は牛角状の把手である。

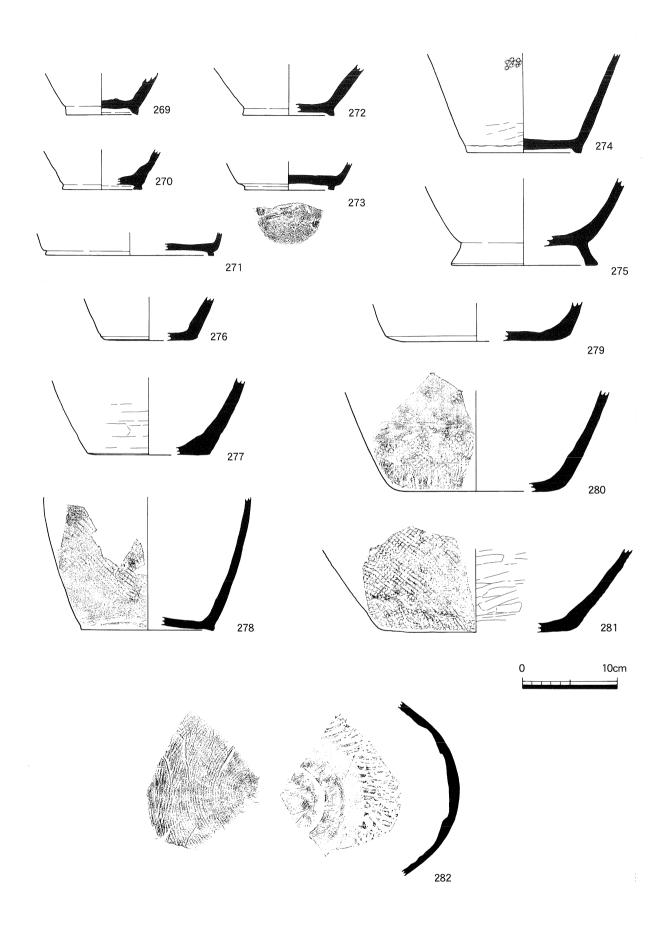
199・200 は口縁部内面に短い受部が付く。201・203 の天井部外面は回転へラケズリが施される。204~212 は器高が低く,口縁端部をわずかに下方に屈曲させる蓋である。204 は天井部外面に窯印が刻まれている。204・205・207・208 の天井部外面は回転へラケズリが施される。206・212 の外面は自然釉がかかる。211 の天井部外面はナデが施され,口縁部に自然釉がかかる。213~215 は宝珠形の摘みである。

216 は底面にナデが施され、体部は短く外上方に延びる。 $217 \sim 226$ は直線的な体部であり、回転ナデが施される。 $227 \sim 230$ は底部であり、 $227 \cdot 228$ の底面は回転糸切り、229 は台のように拡張し、底面は回転へラキリ後に中央を板目、周縁にナデが施される。230 はヘラナデが施される。 $231 \sim 235$ は断面四角形を呈する高台の付く杯であり、 $231 \cdot 233 \sim 235$ の底面は回転ヘラケズリ、232 は回転ヘラナデが施される。

236 は高杯の杯部であり、内面に自然釉がかかる。 $237 \sim 239$ は高杯の脚部、237 は細い脚部で、内面に絞り目が残されている。238 は太い脚部で、杯部底面は回転へラキリが施される。

 $240 \sim 242$ は口縁部が大きく外に広がり、 $240 \cdot 241$ は全面に自然釉がかかる。243 は球形な体部から口縁部が立ち上がり、口縁部内外面に自然釉がかかる。246 は広口壺と思われ、肩が強く張り、沈線を巡らす。247 は短頸壺で、体部外面の上部に自然釉がかかる。





第 34 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (6)(S:1/4)

248・255の口縁端部は下方に屈曲し、体部外面は格子目のタタキが施される。249の口縁部は外側にやや拡張する。250は口縁部外面に沈線を巡らし、体部外面のカキ目後に平行タタキ、内面に当て具痕が残される。251は全面に自然釉がかかる。252~254は口縁端部が上下に拡張し、252の外面は平行目のタタキ、体部内面は当て具痕が残される。253は全面に自然釉がかかる。254の体部外面に格子目のタタキ、内面に当て具痕が残される。256~259は外面に沈線と波状文が施される。260は体部外面に平行目のタタキ後にナデが施され、体部外面と口縁部内面に釉がかかる。261・262は体部外面にカキ目、内面に当て具痕が残され、263の外面は格子目のタタキ、内面に当て具痕が残される。264は外面に格子目のタタキ後にカキ目、内面に当て具痕が残され、265は外面にカキ目・平行目のタタキが施される。266の外面は沈線と波状文、267は格子目のタタキが施される。268は外面に貝殻押圧痕が施される。

 $269 \sim 275$ は高台付壺で、 $269 \sim 274$ の高台は低く、275 は高い。274 の外面は一部に格子目のタタキが施される。 $276 \sim 281$ は平底であり、277 の外面は横方向のヘラナデ、 $278 \cdot 280 \cdot 281$ は格子目のタタキが施される。

282 は横瓶の体部であり、外面に平行目のタタキ後にカキ目、内面に当て具痕・指頭圧痕が施される。内面に接合痕が明瞭に残存する。

283 は篠窯産の鉢であり口縁端部が僅かに肥厚する。 $284 \cdot 285$ は灰釉陶器で,285 の内面に砂目がある。 $286 \sim 288$ は中国越州窯産磁器である。 $289 \sim 296$ は緑釉陶器であり, $289 \sim 293$ は内湾する体部の碗であり, $294 \sim 296$ は高台付底部である。

 $298 \sim 301$ は側面に溝を有する土錘であり、大小の規模のものがある。 $302 \sim 305$ は管状土錘であり、302 は小さな土錘である。

306~311 はカマドの破片であり、308 は炊き口直上の破片である。

312 は銅製蓋であり、口縁端部を下方に屈曲し、口径 12.8cm を測る。313・314 は金メッキした飾り金具であり、314 は鋲が 1 個残存する。

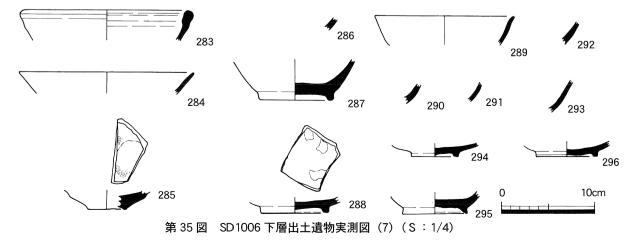
315 は基部に折り返しを有する鉄斧であり、刃の一部が欠損している。

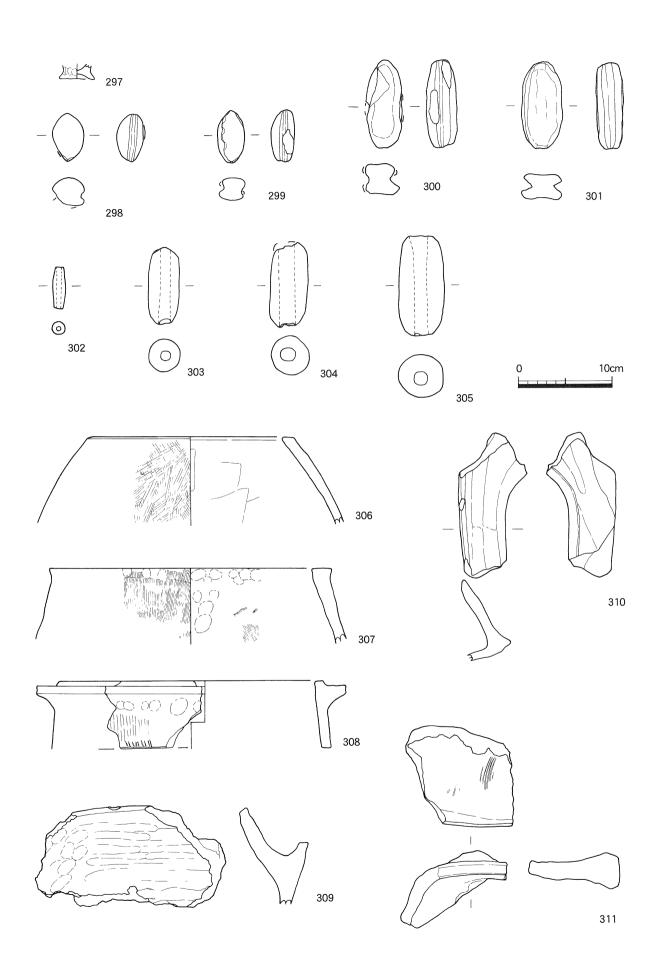
317・318 は土馬の足であると考えられ、317の断面は円形、318 は長方形である。

320 は曲物の底板である。321 はミカン割りの加工材で、先端を 1 方向から加工する。

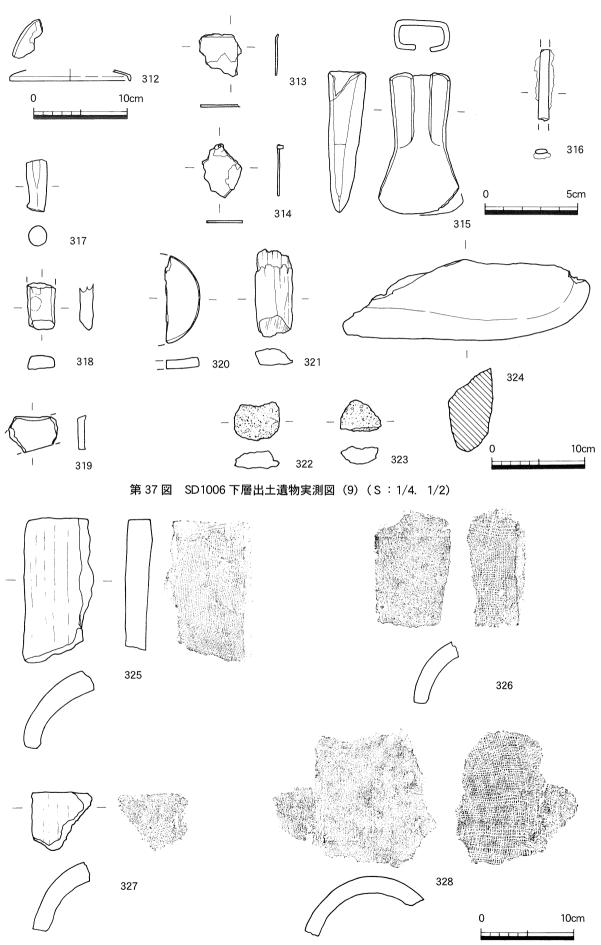
325・327 は凹面に布目が残り、凸面にヘラナデ、326 は凹面に布目・糸切り痕、凸面に横方向のヘラナデが施される。328 は凹面に布目、凸面のゴザ目上にナデが施される。

329 は軒平瓦であり、凹面に布目、凸面にヘラナデが施される。内区に変形した均整唐草文を配し、 上外区に珠文を置いている。善通寺出土の軒平瓦(ZN 207)と道音寺出土の軒平瓦(DO 202)と

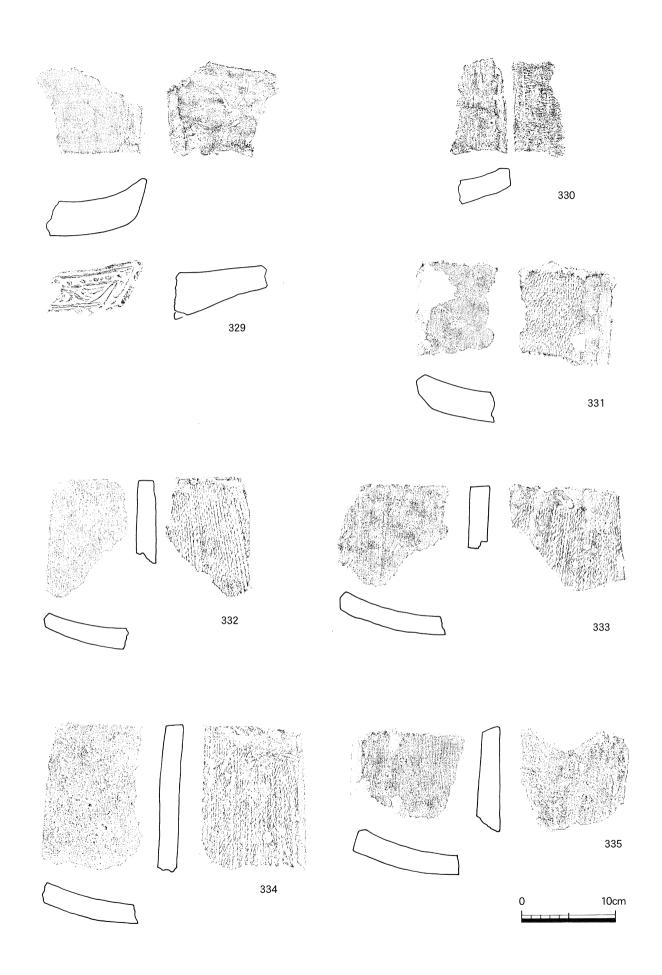




第 36 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (8) (S: 1/4)



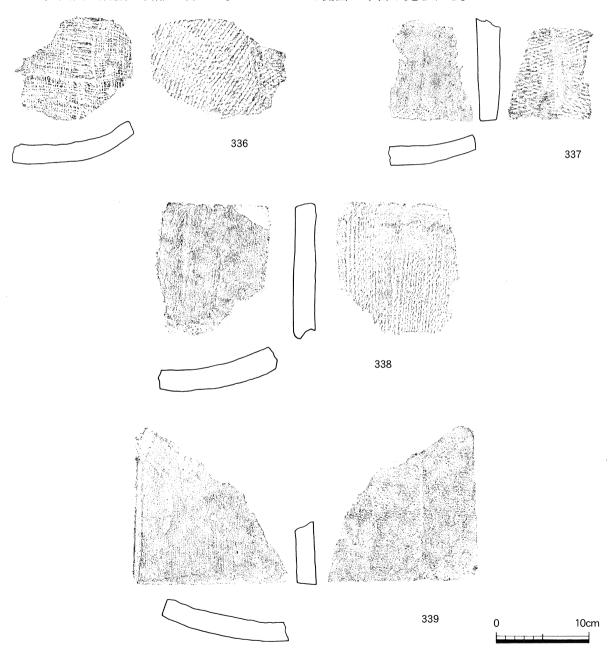
第 38 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (10) (S: 1/4)



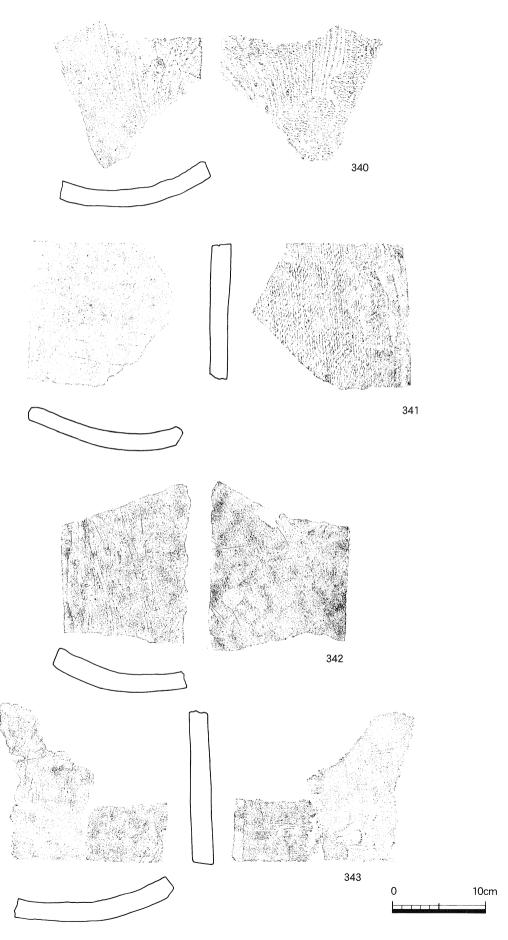
第 39 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (11) (S: 1/4)

同文で、両寺出土瓦の文様の系譜をひく。

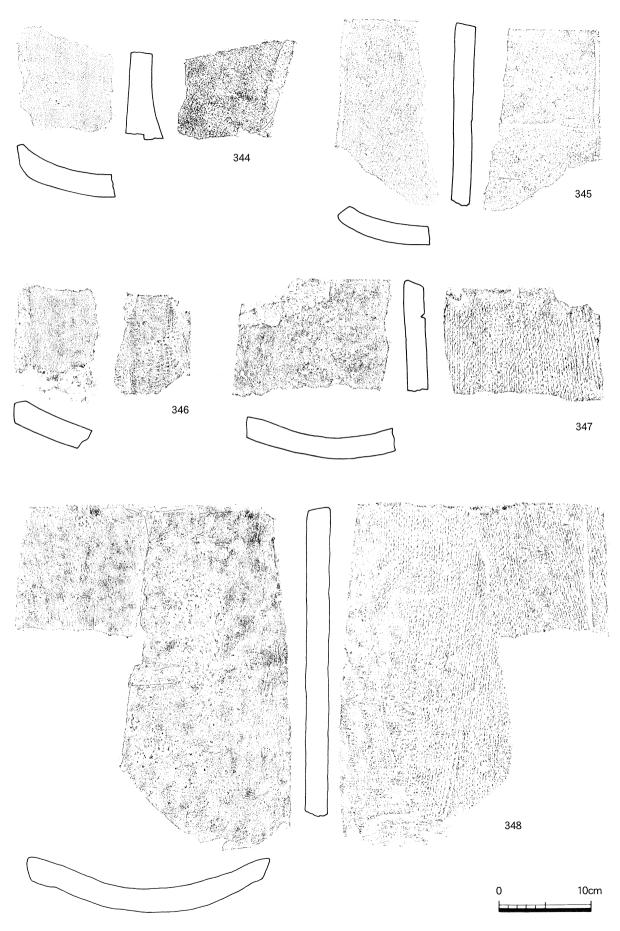
330~351 は平瓦であり、側面に面取りが行われる。348 は、全体の 1/4 を欠損するが、全長と幅が判り、瓦の規模の判明する唯一の平瓦である。330・335 は凹面に布目上にヘラナデ、凸面にゴザ目上にヘラナデ、331・332・334・336 は凹面に布目、凸面にゴザ目、333・337・341・348 は凹面に布目上にヘラナデ、凸面にゴザ目、338 は凹面に布目・糸切り痕、凸面にゴザ目、339 は凹面に布目・糸切り痕、凸面にゴザ目・糸切り痕、342 は凹面に布目後にヘラナデ、凸面にヘラナデ、343 は凹面に布目・糸切り痕、凸面にブザ目・糸切り痕、342 は凹面に布目後にヘラナデ、凸面にヘラナデ、345 は凹面に布目・糸切り痕、凸面にベラナデが残される。344 は凹面に布目、凸面にヘラナデ、345 は凹面に布目、凸面に横方向の板ナデ、346・347 は凹面にヘラナデ、凸面にゴザ目が残される。349 は凹凸面共に板ナデ、350・351 の凹面はヘラナデ、凸面は磨滅・剥離が著しい。334・338 は側面に布目が見られる。



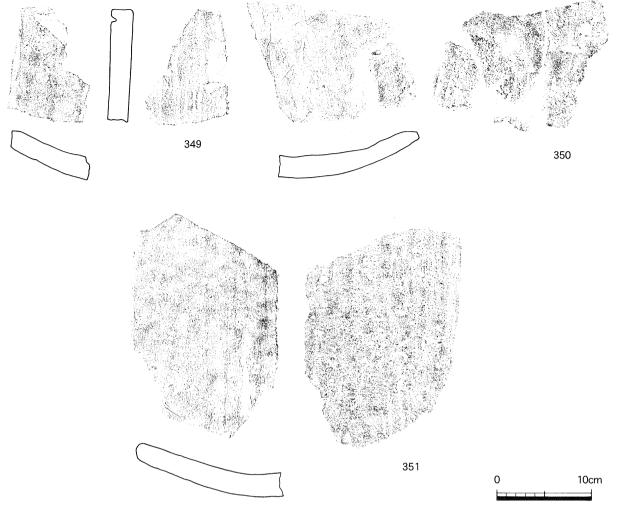
第 40 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (12) (S:1/4)



第 41 図 S D1006 下層出土遺物実測図 (13) (S: 1/4)



第 42 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (14) (S: 1/4)

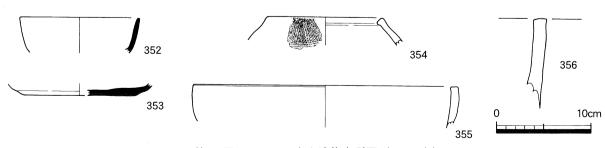


第 43 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (15) (S:1/4)

SD1007 (第18・44図)

調査区南西隅において検出した溝であり、SD 1004 と同様にSK 1039 より派生する。SK 1013 と重複する。検出した標高は 1.90 m前後である。溝の方位はN -90° - E であり、短く直線的に延びる。幅は 0.40 m、深さは 0.18 mを測り、断面は逆台形を呈する。底面のレベルは SK 1039 に向かって低くなる。

遺物は, 須恵器杯(352・353), 土師器鉢(355), 土師質土器甕(356), 弥生土器壺(354) である。 352 は体部の立ち上がりのきつい器形であり, 内面に回転ナデ後にナデが施される。353 の底面は 平底でナデが施される。355 と 356 は口縁部が直立する。



第 44図 SD1007 出土遺物実測図 (S: 1/4)

SD1008 (第5·45図)

調査区北西側において検出した溝であり、SD1005・1006に切られる。検出した標高は2.00 mである。溝は南北方向に延び、中央で東方向に屈曲する。溝の幅は $0.30\sim1.10$



第 45 図 SD1008 断面図 (S:1/4)

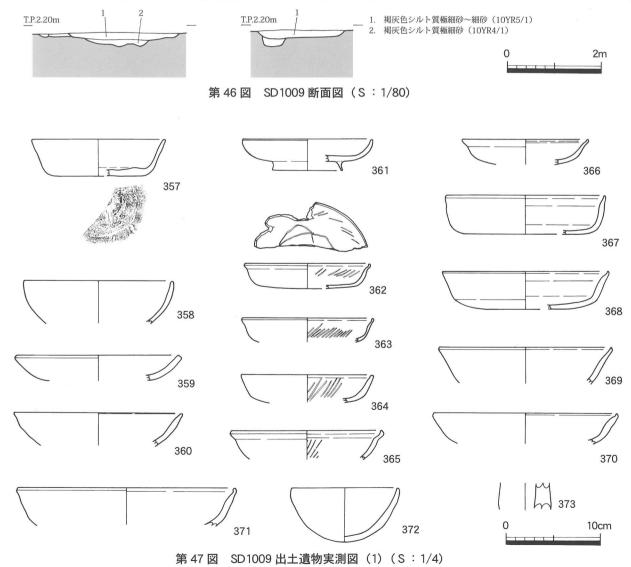
m, 深さは 0.25 mを測り, 底面は南方に緩やかに低くなる。断面は逆台形を呈する。

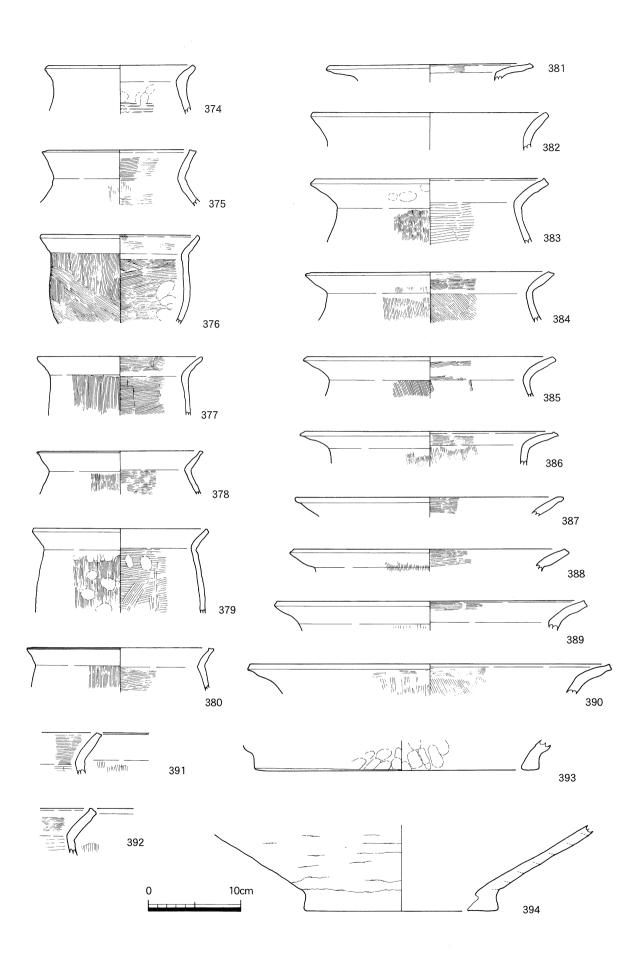
遺物は、土師器と須恵器の小片のみであり、図示できる遺物はない。

SD1009 (第5·46~50 図)

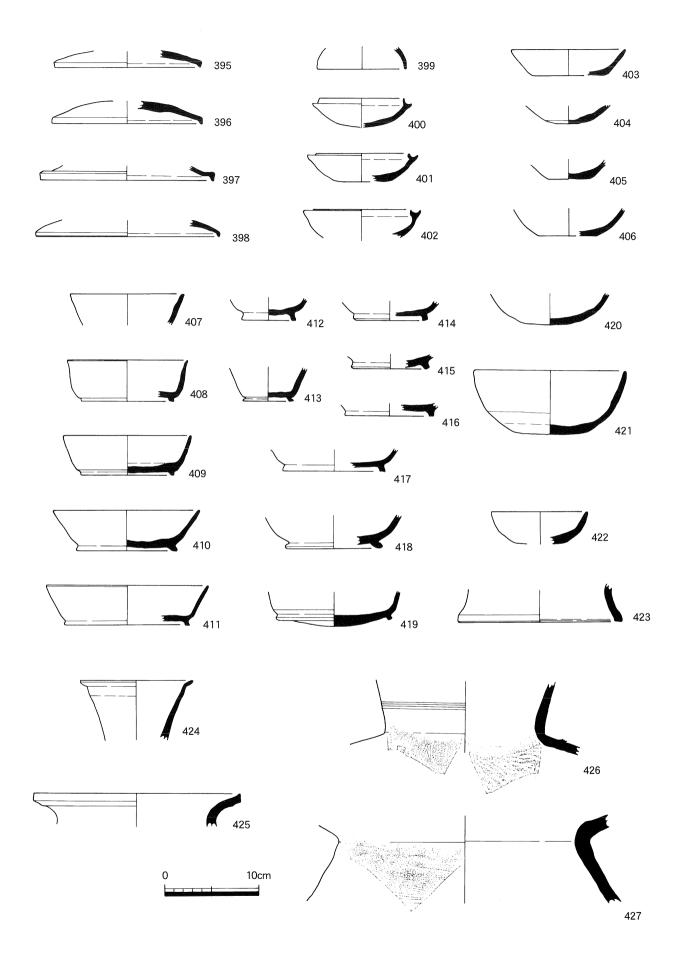
調査区北西側において検出した溝であり、SB1002と重複する。検出した標高は $1.80 \sim 2.10 \,\mathrm{m}$ である。溝の方位はN -63° -Wであり、北西部は直線状に延びるが、SB1002の南側では急激 に幅が広くなり 2方向に分岐し、さらに東に到るとSD1010 \cdot 1019と合流する。溝の幅は $0.35 \sim 2.30 \,\mathrm{m}$ 深さは $0.10 \sim 0.30 \,\mathrm{m}$ を測り、北西部と南東部の断面は逆台形を呈し、中央部では緩やかな船底形を呈する。底面のレベルは南東から北西に向かって低くなる。

遺物は、土師器杯(357~371)、同鉢(372)、同高杯(373)、同甕(374~394)、須恵器杯蓋(395~399)、同杯身(400~402)、同杯(403~420)、同鉢(421)、同高杯(422・423)、同壺(424)、同甕(425~427)、土師器鉢(428)、同鍋(429)、同甕(430)、同甑(431)、カマド(432・433)、蛸壺(434)、飯蛸壺(435~438)、骨(439~444)である。

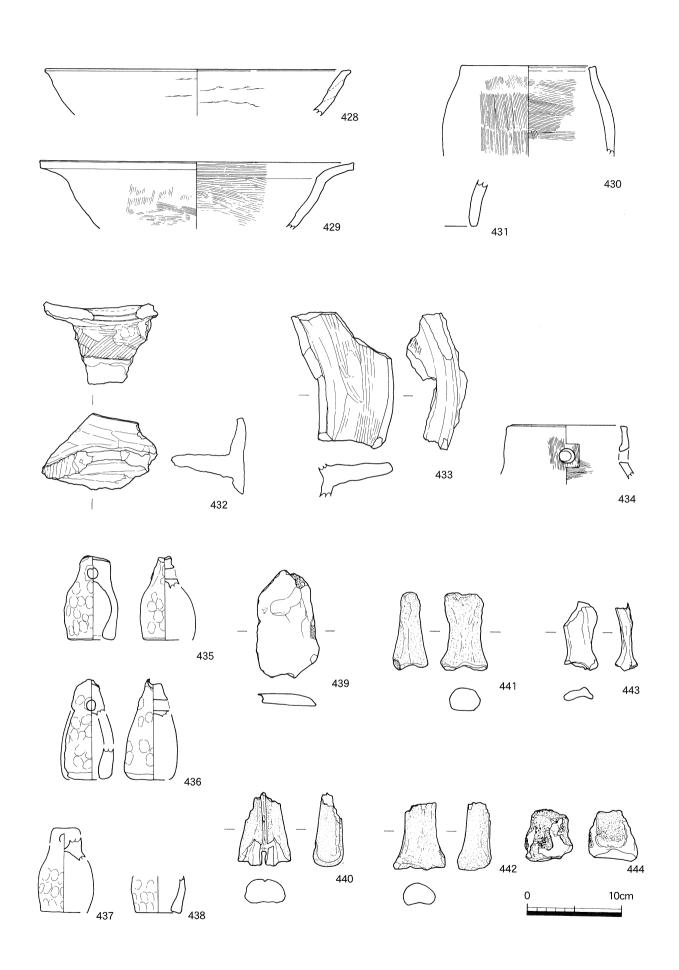




第 48 図 SD1009 出土遺物実測図 (2) (S: 1/4)



第 49 図 SD1009 出土遺物実測図 (3) (S: 1/4)



第 50 図 SD1009 出土遺物実測図(4)(S:1/4)

357の体部は急傾斜で立ち上がり、底面は回転ヘラキリ後にヘラナデが施される。358~360は内湾する体部である。361は低い器高にやや高く細い高台を有する。362~371は口縁端部を屈曲させ、内面に沈線状の凹みを有する。362は体部内面に放射状暗文、底部内面に暗文、363~365は体部内面に放射状暗文が施される。367~371は口径 16 cm以上の大形の杯である。

372 は半球状の器形で、体部外面下半に指頭圧痕、内面にヘラナデが施される。

374~392は「く」の字形口縁部であり、内外面にハケが施される。

 $395\sim398$ は口縁端部を下方に短く屈曲させる。 $400\sim402$ は口縁部内面に短い受部が付く。 $403\cdot405$ の底面は回転ヘラキリ後にナデが施される。 $407\sim419$ は高台付杯であり,丸みを帯びる高台の 418 を除いて断面四角の高台である。409 の底面は回転ヘラキリ後にナデ,410 はナデ・回転ヘラナデ, $411\cdot413\cdot416$ はナデ, $414\cdot415\cdot417$ は回転ヘラナデが施される。419 は高台より底部が下に拡張する。421 は大形品である。

424 は口縁端部が外方に屈曲する。426 は口縁部に沈線を巡らし、体部に把手の一部が残存する。 427 は体部外面にカキ目、内面にヘラナデが施される。

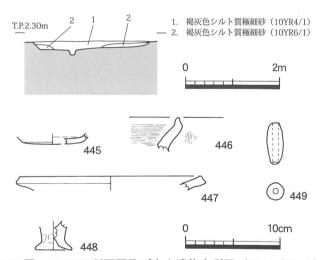
SD1010(第5·51図)

調査区中央北側において検出した溝であり、S B 1002・1003 と重複し、S D 1009・1013・1019 と合流する。検出した標高は $1.95\sim2.10$ mである。溝の方位は $N-17^\circ$ -Wである。溝の幅は $0.95\sim1.55$ m、深さは $0.08\sim0.15$ mを 測る。底面は、南から北に緩やかに低くなる。断面は浅い逆台形を呈する。

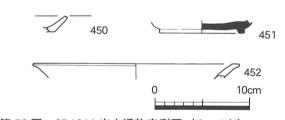
遺物は,土師器杯 (445),同甕 (446),弥生 土器壺 (447),製塩土器 (448),土錘 (449) である。

SD1011 (第5·52 図)

調査区中央北側において検出した溝であり、SB1003, $SD1010 \cdot 1012$, SK1022 と重複する。検出した標高は 2.14 mである。溝の方位はN-0° -Eで、若干蛇行する。幅は 0.25 m、深さは 0.06 mを測り、断面は逆台形である。底面は平坦である。



第 51 図 SD1010 断面図及び出土遺物実測図(S: 1/80. 1/4)



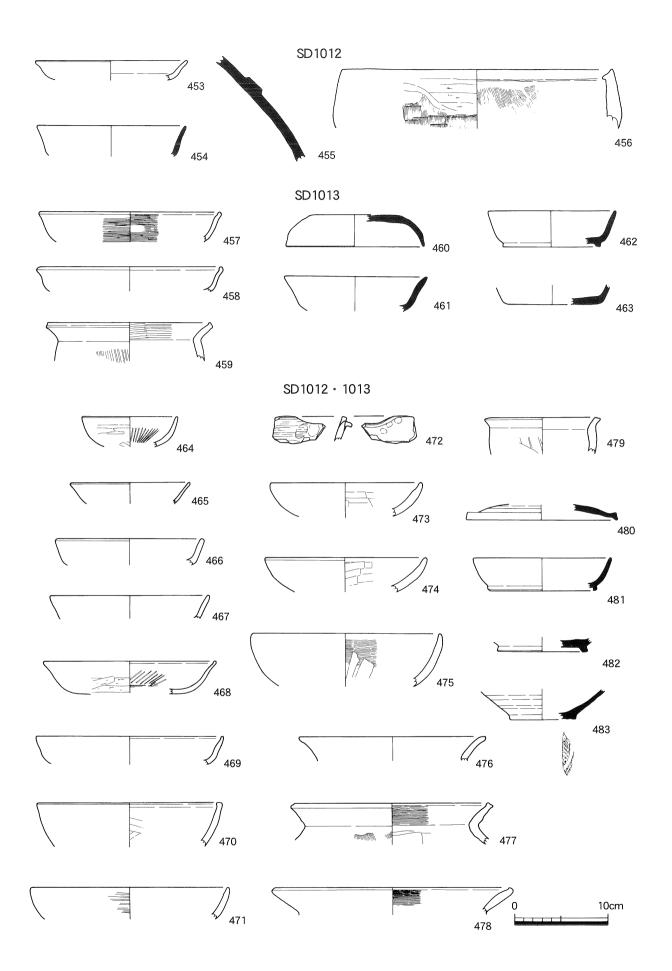
第 52 図 SD1011 出土遺物実測図 (S: 1/4)

遺物は、土師器皿(450)、須恵器杯(451)、土師器甕(452)である。

SD1012 (第5・53図)

調査区中央北側において検出した溝であり、SB1003、SD1011・1013・1014と重複する。検出面のレベルは標高 $2.10\sim2.20\,\mathrm{m}$ である。溝北部での方位はN -80° $-\mathrm{W}$ であるが、SD1014付近でほぼ直角に曲がり、南方に延びてSD1017と合流する。溝の幅は $0.75\,\mathrm{m}$ 、深さは $0.11\,\mathrm{m}$ を測る。断面は逆台形を呈し、底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなる。SD1013との合流付近で遺物が混在して出土した。

遺物は, 土師器皿 (453), 須恵器杯 (454), 同甕 (455), 土師質土器鍋 (456) である。 453 は外反気味の体部である。455 の外面は平行目のタタキ, 内面は当て具痕が残される。



第 53 図 SD1012・1013 出土遺物実測図(S: 1/4)

SD1013(第5·53図)

調査区中央北側において検出した溝であり、SB1003, $SD1009 \cdot 1012 \cdot 1019$ と重複する。検出した標高は、2.15 mである。溝の方位は $N-0^\circ-E$ である。溝の北端はSD1012 と合流し、南端は $SD1009 \cdot 1019$ と合流する。本遺構とSD1012 の合流部分では、検出状況が不明瞭であるため、本遺構とSD1012 の遺物の分別ができなかった。溝の幅は $2.24 \sim 3.50$ m、深さは0.10 mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、底面のレベルは平坦である。

遺物は、土師器杯(457・458)、同甕(459)、須恵器杯蓋(460)、同杯(461~463)である。 457・458 は口縁端部内面に沈線状の僅かな凹みを有し、457 は内外面にヘラミガキが施される。 459 は口縁部内面に横方向の粗いハケ後にナデ、体部外面に粗いハケが施される。

460 の口縁部は短く直立し、天井部外面は切り離し後にヘラナデが施される。461 の体部は僅かに 外反し、463 の底面は回転ヘラキリ後にナデが施される。462 は高台付杯である。

 $464 \sim 483$ は S D 1012 と S D 1013 の合流付近より出土した遺物であり、土師器杯($464 \sim 471$)、同椀($472 \sim 475$)、同甕($476 \sim 479$)、須恵器蓋(480)、同杯($481 \sim 483$)である。

464 は内湾する体部の内面に放射状の暗文が施される。468・469 は口縁端部が僅かに屈曲し、内面に沈線状の凹みを巡らす。468 の体部内面には放射状の暗文、底部内面にヘラミガキ、外面に静止ヘラケズリが施される。473 \sim 475 は内湾する体部である。

476 は丸みのある口縁端部、477 \sim 479 は角張る口縁端部であり、477・478 は口縁部内面に横方向のハケが施される。

480 は口縁端部を下方に短く屈曲させる。481・482 は高台付杯である。483 は外面にロクロ調整痕を明瞭に残し、底部に静止ヘラケズリが施される。

SD1014 (第5・54図)

調査区中央において検出した南北方向に延びる溝であり、SB1003, $SD1006 \cdot 1012 \cdot 1017 \cdot 1018 \cdot 1019 \cdot 1021$ と重複する。調査時にはSD1006 より南側の溝をSD1015 としたが、SD1014 とSD1015 は同一遺構であると後で判明した。検出した標高は $2.15 \sim 2.25$ mである。溝の方位は $N-0^\circ-E$ である。調査区南端から直線的に延びる溝は、SD1006 の北側で直角に屈曲して約3 m東流し、再び直角に屈曲し北方向に延びる。溝の幅は $0.50 \sim 1.10$ m、深さは0.30 mを測り、断面は船底形を呈する。底面は南から北に緩やかに低くなる。

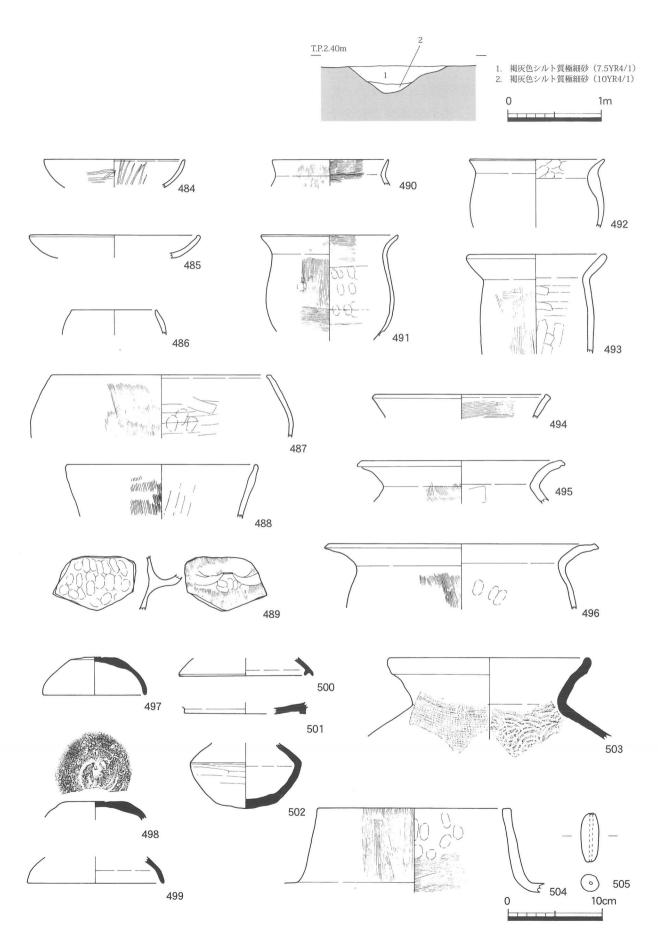
遺物は、土師器杯(484)、同皿(485)、同鉢(486 \sim 488)、同鍋(489)、同甕(490 \sim 496)、須恵器杯蓋(497 \sim 499)、同杯身(500)、同杯(501)、同壺(502)、同甕(503)、カマド(504)、土錘(505)である。

484 は体部外面にヘラミガキ,内面に放射状暗文が施される。485 は器高の低い器形である。486・487 は口縁部が内傾し、487 の外面はハケ,内面は指頭圧痕の後ヘラナデが施される。488 は外面にハケ,内面にヘラケズリが施される。

 $490 \sim 493$ は丸みのある口縁端部で、 $494 \sim 496$ は角張る。490 は内外面にハケ、491 は口縁部と体部外面にハケ、内面に指頭圧痕・ナデ、493 は体部外面に粗いハケ、内面にヘラナデ、494 は口縁部内面にハケ、 $495 \cdot 496$ は体部外面にハケが施される。

497 は口縁部が短く直立し、天井部外面は回転ヘラキリ後にナデが施される。498 の天井部外面は回転ヘラキリが施される。500 は口縁部内面に短い返りが付く。

502 は肩が強く張り、体部下半は回転ヘラケズリが施される。503 は口縁端部が僅かに屈曲し、体部外面に平行目のタタキ・カキ目、内面に当て具痕が残される。



第 54 図 SD1014 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/4 0. 1/4)

SD1016 (第5·55 図)

調査区中央において検出した溝であり、SB1009、SD1017・1019と重複する。検出した標高は $2.25\,\mathrm{m}$ 前後である。溝の方位は $N-14^\circ-\mathrm{E}$ であり、SD1017とほぼ直交する。幅は $0.44\sim0.80\,\mathrm{m}$ 、深さは $0.15\,\mathrm{m}$ を測り、溝の断面は逆台形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに下がる。



SD1017 (第5·56 図)

調査区中央から東側において検出した東西方向に延びる溝であり、SB 1007・1008、SD 1012・1016・1019・1022、SE 1002・1003 と重複する。検出面のレベルは標高 $2.22 \sim 2.44$ m である。溝の方位は $N-98^\circ-E$ であり、西端はSD 1012 と合流し、東端はSE 1002・1003 と合流する。幅は $0.35 \sim 0.90$ m、深さは 0.12 mを測り、断面は船底形を呈する。底面のレベルは東から西に向かって緩やかに下がる。

遺物は、土師器皿(508・509)であり、器高が低く、口縁端部内面に沈線状の凹みを巡らす。508の体部内外面はヘラミガキが施される。



SD1018 (第5·57 図)

調査区中央北端において検出した溝であり、SB1009、SD1014・1016と重複する。検出面のレベルは標高2.12~2.24 mである。溝の方向は東西であるが、若干湾曲するため溝の両端は調査区外に延びる。溝の中央付近で南西方向に細い溝が派生する。溝の幅は1.65 m以上である。掘り方は段を有し、最深部までの深さは0.30 mを測る。底面に人頭大の石が検出される。

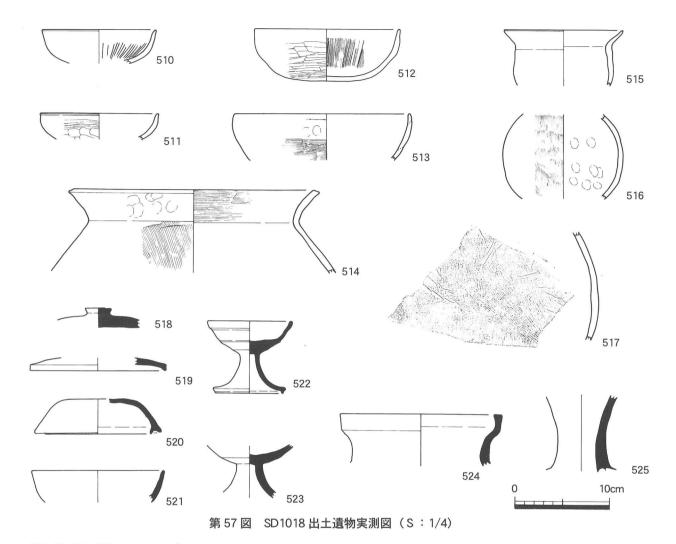
遺物は、土師器杯($510 \sim 512$)、同鉢(513)、同甕($514 \sim 517$)、須恵器杯蓋($518 \cdot 519$)、同杯身(520)、同杯(521)、同高杯($522 \cdot 523$)、同甕(524)、同壺(525)である。

510 は体部内面に放射状暗文が施され、511 は口縁端部がやや外反し、体部外面はヘラナデ・ヘラケズリが施される。512 は大形の杯で、口縁部は直立し、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。513 は体部下半に横方向のハケが施され、接合痕が残る。

514 は強い「く」の字形口縁部で、口縁部外面に指頭圧痕・ナデ、内面に横方向のハケ、体部外面に縦方向のハケが施される。515 は口縁部が大きく外反し、516 は球形の体部であり、外面に縦方向のハケ、内面に指頭圧痕が施される。

518 は扁平な宝珠形の摘みであり、519 は口縁端部を下方に短く屈曲させる。520 は口縁部内面に 短い返りが付き、底部外面はヘラナデが施される。

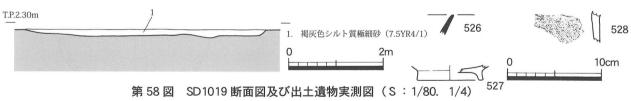
522 はほぼ完形の高杯であり、脚裾部が下方に短く屈曲し、杯部と脚部外面に釉がかかる。 525 は壺の頸部である。



SD1019 (第5·58 図)

調査区中央において検出した東西方向の溝である。溝の西端は S D 1009・1010 と合流し、東端は S D 1017・1020 と合流し、S D 1006・1014 と重複する。検出した標高は $2.15\sim2.25$ mである。溝の方位は N -90° -E である。幅は $0.80\sim1.95$ m、深さは $0.10\sim0.16$ mを測り、溝の平面は不規則である。埋土は単一層である。

遺物は, 須恵器杯(526), 土師器椀(527), 土師質土器甕(528) である。



SD1020 (第5·59 図)

調査区中央から南東隅において検出した溝であり、西端は S D 1019 と合流し、S D 1006、S K 1049 と重複する。検出した標高は $2.32\sim2.61$ mである。溝の方位は N -90° - E τ C τ S D 1006 と同方向である。幅は 1.10 m以上、深さは $0.10\sim0.25$ mを測る。底面のレベルは東から西に緩やかに下がる。

遺物は,須恵器杯(529),同皿(530),土師質土器羽釜(531),平瓦(532)である。 529 は直線的な体部であり,530 は器高の低い杯で,内外面に火襷が見られる。 532 の凹面は布目,凸面はゴザ目が残される。

SD1021 (第5·59 図)

調査区中央において検出した溝であり、溝の南側をSD1006に切られている。検出した標高は2.15 m前後である。溝の方向は東西であり、幅は1.30 m以上、深さは0.15 mを測る。底面は平坦である。

遺物は、土師器杯(533)、須恵器ハソウ(534)、土師器甕(535)である。

533 は口縁部がやや直立し、体部外面にハケが施される。534 は口縁端部を欠損し、体部外面に沈線を巡らす。535 は口縁端部に平坦面をもち、体部外面はハケ、内面はナデが施される。

SD1022 (第5・59図)

調査区東側において検出した溝であり、北端で S D 1023、南端で S D 1017 と合流する。検出した標高は 2.47~ m前後である。溝の方位は N -2~ - W である。幅は 0.30~ 0.45~ m,深さは 0.07~ 0.14~ mを測る。底面のレベルは南から北に緩やかに下がる。

遺物は、土師器杯(536)、須恵器皿(537)である。

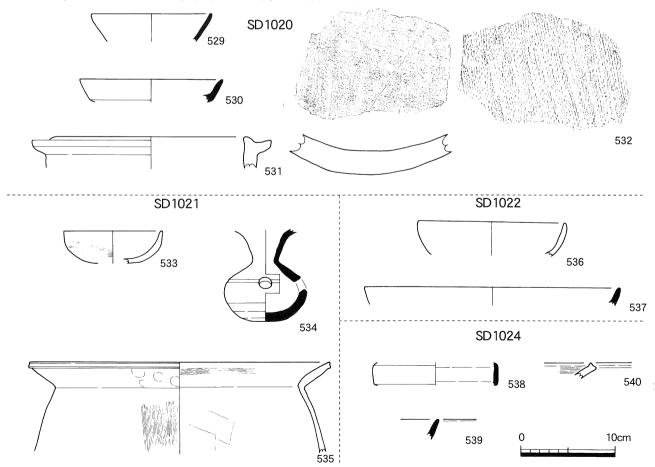
SD1023 (第5図)

調査区北東隅に検出した溝で、2 工区の8 D 2014 と同一遺構である。検出した標高は2.45 mである。溝の方位はN-98° -E である。幅は0.70 m、深さ0.10 mを測る。

SD1024(第5・59図)

調査区東端において検出した溝であり、2 工区のS D 2038 と同一遺構である。検出した標高は2.50 ~ 2.60 mである。溝の方位はN-90° -Wで、幅は $0.25 \sim 0.55$ m、深さは0.09 mを測る。底面は東から西に緩やかに下がる。

遺物は, 須恵器蓋 (538), 同杯 (539), 土師器甕 (540) である。



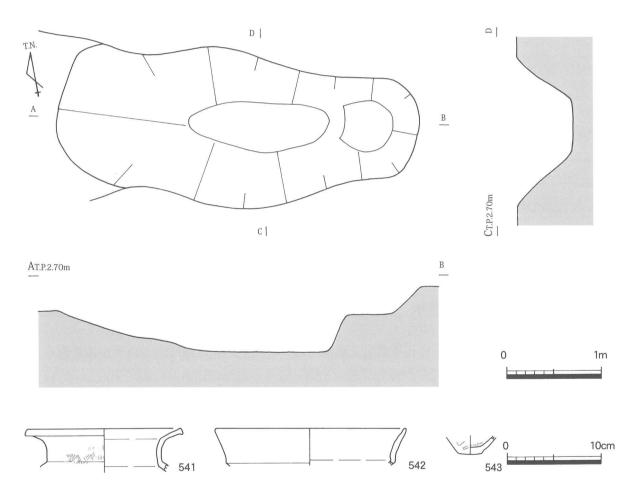
第 59 図 SD1020 ~ 1022 · 1024 出土遺物実測図(S: 1/4)

(3) 井戸

SE1002 (第60図)

調査区東側において検出した素掘りの井戸であり、SD 1017・1022 と重複する。検出した標高は $2.48 \sim 2.57$ mである。井戸の平面形は東西に細長い隅丸長方形を呈し、長軸の長さは 3.83 m、短軸は 1.65 mを測る。短軸方向の断面は逆台形を呈するが、東側の掘り方は段を有し、西側は底面から非常に緩やかな傾斜で立ち上がる。最深部までの深さは 0.60 mを測り、テラス部分の深さは 0.28 mである。SD 1017・1022 と本遺構は切り合い関係がなく、SD 1017・1022 は浅い流路であり、本遺構から派生していると考えられる。

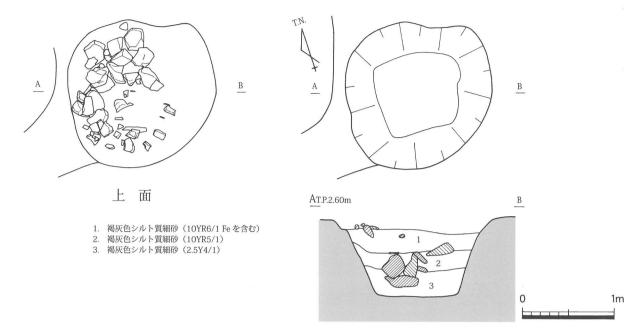
遺物は、弥生土器壺(541)、同高杯(542)、同鉢(543)であるが、図化できなかった土器の大部分は土師器と須恵器の小片である。弥生土器は混入したものである。



第 60 図 SE1002 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

SE1003 (第61·62 図)

調査区東側において検出した素掘りの井戸であり、SE 1002の南西に隣接する。SD 1017・1022と重複する。検出した標高は 2.40 mである。井戸の平面形は、南東側のあまり張らない不整な円形を呈し、直径は 1.55 m、深さは 0.80 mを測る。底面は不整な方形であり、平坦である。断面は逆台形を呈する。本遺構の埋土は 3 層であり、上面から底面近くの埋土中より多量の石が出土する。石は大小のものがあり、不規則な状態で出土する。SD 1017・1022と本遺構は切り合い関係がなく、SD 1017・1022は浅い流路であり、本遺構から派生していると考えられる。



第61図 SE1003平・断面図 (S:1/40)

遺物は、土師器皿(544・548)、同杯(545 \sim 547)、同鍋(549)、同甕(550)、蛸壺(551)、須恵器蓋(552)、同杯蓋(553・554)、同杯(555)、同壺(556)、同甕(557 \sim 560)、弥生土器壺(561)、刀子(562・563)である。

544 は器高の低い杯であり、外面下半はナデが施される。545 は大形の杯であり、口縁端部が僅かに外反する。546 は平底の杯であり、内外面ともにナデが施される。547 は高台付杯であり、高台の断面は四角である。底面の内外面はナデが施される。548 は大きな口径に対して器高の低い器形であり、口縁端部は外方向に屈曲する。

549 は口縁端部に平坦面を有し、口縁部外面はヨコナデ、内面と体部外面は粗いハケが施される。 550 は小形の甕である。

551 は口縁部直下の対角線上に孔を有し、外面に粗いハケ、内面に横方向のハケが施される。

552 は平坦な天井部から口縁部が直立する。553・554 の口縁部は下方に短く屈曲し、554 の天井部外面は回転ヘラキリが施される。

555 は低い高台が付き、底面は回転ヘラケズリが施される。

557 は大形の甕であり、口縁部は大きく外反し、体部外面は平行タタキ後にナデ、内面は当て具痕・ナデが施され、口縁部内面はヘラナデ・指頭圧痕が施される。558 は口縁部外面に沈線と波状文が施される。体部外面は平行タタキ後にヘラナデ、内面は当て具痕が残される。559・560 は外面に平行目のタタキ後にカキ目、内面に当て具痕が残される。

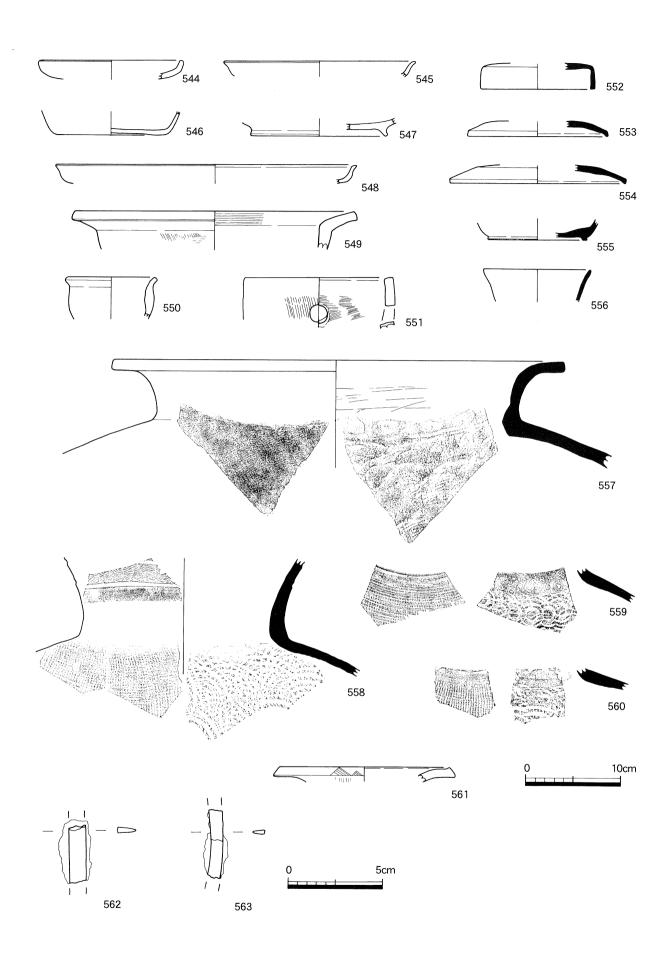
561 は口縁端部に鋸歯文が施され、混入品である。

(4) 土坑

SK1001 (第63図)

調査区南西側において検出した土坑であり, S D 1001 と重複する。検出した標高は 1.95 mである。 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 0.68 m, 短軸 0.55 m, 深さ 0.37 mを測る。土坑の断面は 逆台形である。

遺物は、土師器杯(564)、須恵器杯蓋(565)、同杯(566)である。



第 62 図 SE1003 出土遺物実測図 (S: 1/4. 1/2)

SK1002 (第64図)

調査区南西側において検出した土坑である。検出した標高は,2.01 mである。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し,規模は長軸0.70 m,短軸0.57 m,深さ0.36 mを測る。土坑の断面は逆台形である。底面直上に拳大の石が検出された。

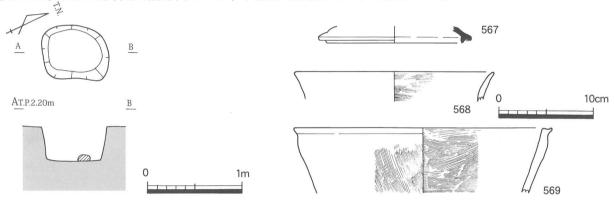
遺物は,須恵器杯蓋(567),土師器 甕(568),土師質土器鍋(569)である。 A B 564

AT.P.2.20m B 565

The state of the

第 63 図 SK1001 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

567 は口縁部内面に短い返りが付く。568 は甕の口縁部であり、内面に横方向のハケ後にナデが施される。569 は外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケが施される。



第 64 図 SK1002 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)

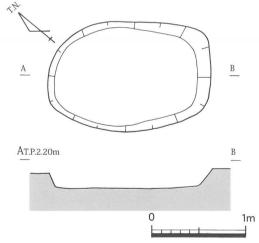
SK1003 (第65図)

調査区南西側において検出した土坑である。検出した標高は、2.05 mである。平面形は北側に丸みを持つ隅丸長方形を呈し、規模は南北方向の長軸1.70 m、東西方向の短軸1.20 m、深さ0.15 mを測る。土坑の断面は逆台形であり、北側の掘り方は急傾斜である。底面は平坦である。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図 化できるものはない。

SK1004 (第66 図)

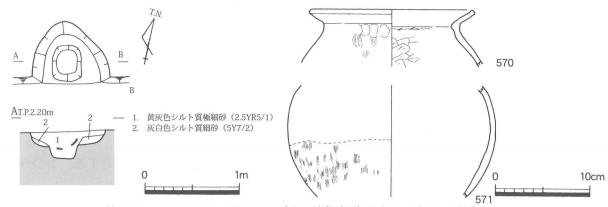
一調査区南西側において検出した土坑であり、遺構の 南半分は調査区外に広がっている。検出した標高は2.05



第65図 SK1003平・断面図(S:1/40)

mである。平面形は不整な円形を呈し、南北方向は 0.65 m以上、東西方向の直径は 0.80 mを測る。中央には隅丸方形の平面形で 1 段低くなる部分があり、最深部までの深さは 0.29 mを測る。埋土は 2 層であるが、下層は浅い部分直上のみに堆積する。

遺物は、土師器甕(570・571)である。570は「く」の字状口縁部であり、体部外面に指頭圧痕・ 縦方向のハケ、内面にヘラケズリが施される。571は球形の体部であり、外面に縦方向のハケ、内面 に板ナデが施され、外面には煤が付着する。



第 66図 SK1004 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/4 0. 1/4)

SK1005 (第67図)

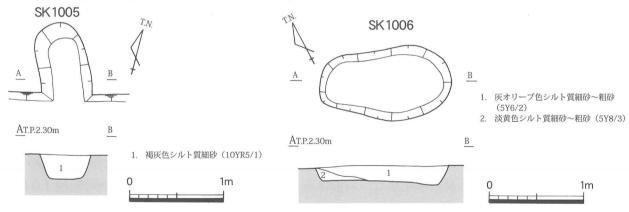
調査区南西側において検出した土坑であり、遺構の南半分は調査区外に広がっている。検出した標高は2.10 mである。平面形は楕円形を呈し、南北方向は0.85 m以上、東西方向の直径は0.55 mを測る。深さは0.25 mである。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1006 (第67図)

調査区南西側において検出した土坑である。検出した標高は $2.10~\rm{m}$ である。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸 $1.36~\rm{m}$ 、南北方向の短軸 $0.75~\rm{m}$ 、深さ $0.15 \sim 0.20~\rm{m}$ を測る。断面は逆台形を呈し、底面は東に向かって緩やかに下がる。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。



第 67 図 SK1005・1006 平・断面図 (S: 1/40)

SK1007 (第5図)

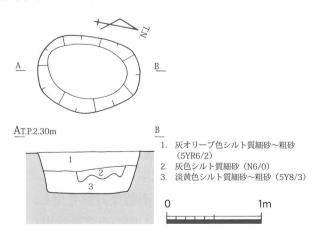
調査区南西側において検出した土坑である。検出した標高は $2.06~\mathrm{m}$ である。平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 $0.54 \times 0.68~\mathrm{m}$ 、深さ $0.18~\mathrm{m}$ を測る。断面は逆台形を呈す。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみである。

SK1008 (第68図)

調査区南西側に検出した土坑である。検出した標高は 2.05~mである。平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 $0.81 \times 1.10~\text{m}$ 、深さ 0.43~mを測る。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみである。



第68図 SK1008平・断面図(S:1/40)

SK1009 (第5図)

調査区中央の南端において検出した土坑であり、遺構の南半分は調査区外に広がっている。検出した標高は 2.18 mである。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸 1.36 m、南北方向の短軸 0.63 m以上、深さ 0.21 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1010 (第69図)

調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり、SD 1006の上面に位置する。SD 1003は本遺構から派生する。検出した標高は 2.16 mである。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、規模は南北方向の長軸 2.25 m、東西方向の短軸 1.80 m、深さ 0.35 mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は 3層である。

遺物は, 土師器杯 (572 ~ 575·577·579), 同椀 (576·578), 土師質土器羽釜 (580), 須恵器杯 (581 ~ 583), 平瓦 (584·585), 土馬 (586) である。

573・574 の底面は回転ヘラキリが施され, 574 は台状気味の底部である。576・578 は黒色土器 A 類である。

580 は口縁端部外面に鍔が水平方向に付き、体部外面に粗いハケが施される。

581 は底面に回転ヘラキリ後にナデ,内面に指ナデが施され,582 の底面は回転板ナデが施される。 583 は低い高台が付き、底面に回転ヘラナデが施される。

584・585 は凹面に布目、凸面にゴザ目が残される。

586 は丁寧な調整が施され、土馬の足と考えられる。

SK1011 (第69図)

調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり、SD1006の上面に位置する。検出した標高は 2.16 mである。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸 1.17 m、南北方向の短軸 0.69 mを測る。土坑の西側は深くなっており、その深さは 0.14 mである。

遺物は, 須恵器杯 (587), 同甕 (588) である。

SK1012 (第70図)

調査区北西側において検出した土坑であり、SB1004 と重複する。検出した標高は $1.95\sim2.00$ mである。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北方向の長軸 1.45 m、東西方向の短軸 1.04 m、深さ 0.10 mを測る。底面は平坦である。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1013 (第70図)

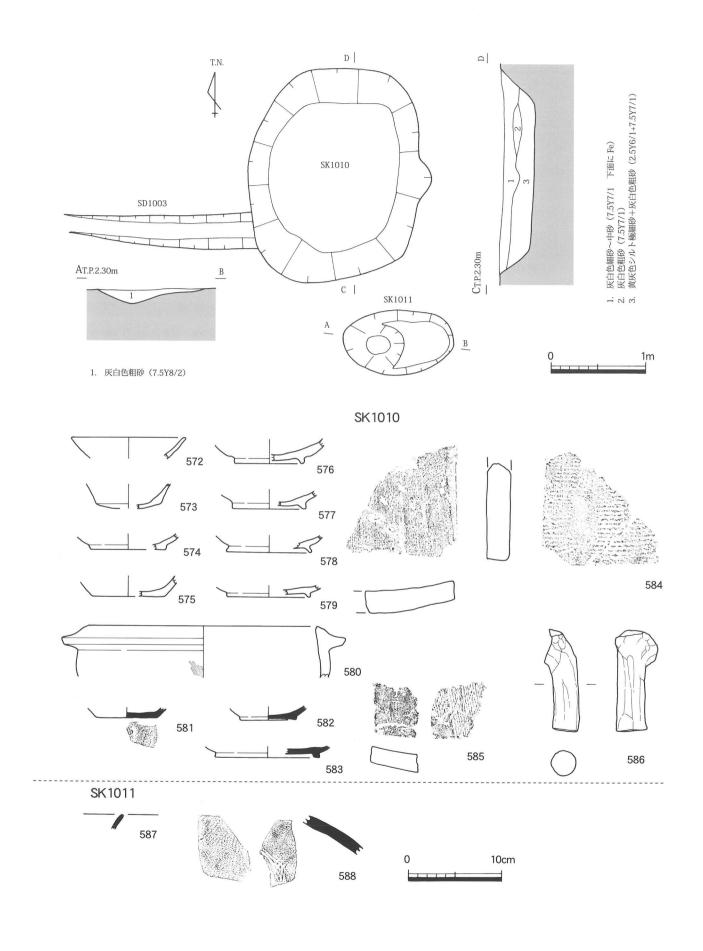
調査区北西側において検出した土坑であり, S B 1004, S D 1007と重複する。検出した標高は 1.95 mである。平面形は北側と南側に抉りのある不整な楕円形を呈する。規模は, 東西方向の長軸 2.20 m, 南北方向の短軸 1.33 m, 深さ 0.10 mを測る。底面は平坦であり、数個の小穴を検出した。

遺物は, 須恵器蓋 (589), 飯蛸壺 (590) である。

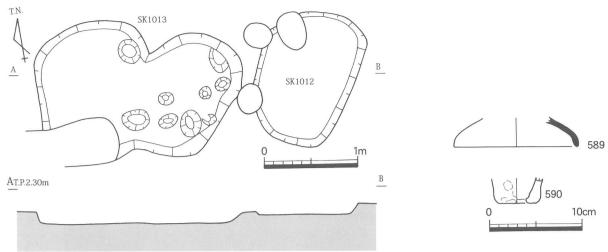
SK1014 (第 71 図)

調査区北西側の北端において検出した土坑であり、SB1005と重複する。検出した標高は 2.05 mである。平面形は不整な方形を呈し、規模は 0.86×0.98 m、深さは 0.27 mを測る。断面は逆台形を呈する。底面に 1 個の小穴を検出した。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。



第69図 SD 1003, SK1010・1011 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)



第70図 SK1012・1013 平・断面図及び出土遺物実測図(S:1/40.1/4)

SK1016 (第71 図)

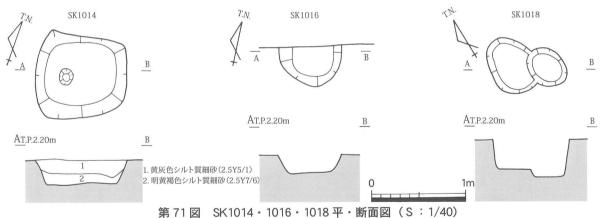
調査区北西側の北端において検出した土坑であり、遺構の北半分は調査区外に広がっている。検出した標高は 2.05 mである。平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 0.67 m、深さは 0.19 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1018 (第71 図)

調査区北西側において検出した土坑であり、 $SB1002 \cdot 1005$ と重複する。検出した標高は 2.06 mである。平面形は二つの円が合体したような不整な円形であり、規模は長軸 0.90、短軸 0.53 m、深さ 0.40 mを測る。掘り方はほぼ垂直に近い角度で掘り込まれ、底面は段を有する。

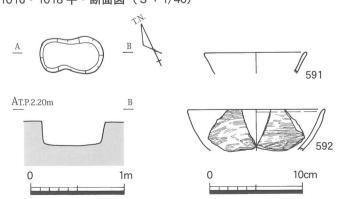
遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。



SK1019 (第72図)

調査区北西側において検出した土坑であり、SB1002・1005と重複する。検出した標高は2.06 mである。平面形は抉りのある楕円形であり、規模は長軸0.68 m、短軸0.39 m、深さ0.25 mを測る。

遺物は,土師器杯 (591), 瓦器椀 (592) である。592 は内外面に丁寧なヘラミガキが施される。



第72図 SK1019 平・断面図及び出土遺物実測図(S:1/40.1/4)

SK1020 (第73図)

調査区中央の北側において検出した土坑であり、SB 1003・1006 と重複する。検出した標高は 2.15 mである。平面形は不整な円形を呈し、規模は 0.58×0.79 m、深さは 0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1022 (第73 図)

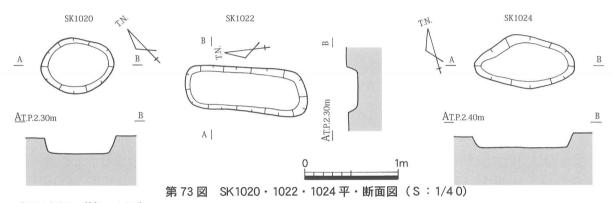
調査区中央の北側において検出した土坑であり、SB 1003、SD 1011と重複する。検出した標高は 2.15 mである。平面形は南北方向に長い長方形を呈し、規模は長軸 1.31 m、短軸 0.46 m、深さ 0.10 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1024 (第73 図)

調査区中央やや東寄りにおいて検出した土坑である。検出した標高は 2.26 mである。平面形は東西方向に長い不整な楕円形を呈し、規模は長軸 1.06 m、短軸 0.56 m、深さ 0.12 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。



SK1025 (第74図)

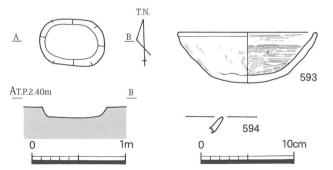
調査区北東側において検出した土坑である。検出した標高は2.30 mである。 平面形は東西方向に長い楕円形を呈し、 規模は長軸0.70 m、短軸0.48 m、深さ 0.10 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師質土器鉢(593)、土師器皿(594)である。593は体部外面にハケ後にナデ、内面に粗いハケが施され、底面は指頭圧痕・ナデが施される。

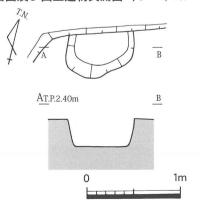
SK1028 (第75図)

調査区北東隅において検出した土坑であり、SD 1019 と 重複する。検出した標高は 2.25 mである。平面形は不整な 円形を呈し、規模は東西方向 0.72 m、南北方向 0.46 m以上、 深さ 0.30 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみである。



第74図 SK1025 平・断面図及び出土遺物実測図(S:1/40.1/4)



第75図 SK1028平・断面図(S:1/40)

SK1029 (第76図)

調査区北東側において検出した土 坑である。検出した標高は 2.30 mで ある。平面形は北東一南西方向に長 い楕円形を呈し,規模は長軸 0.97 m, 短軸 0.68 m, 深さ 0.42 mを測る。 掘り方は北東側に段を有し,最深の 底面直上に石が検出された。

遺物は, 須恵器蓋 (595) である。

AT.P.2.40m B AT.P.2.40m B 10cm

第76図 SK1029・1030平・断面図及び出土遺物実測図(S:1/40.1/4)

SK1030 (第76図)

調査区北東側において検出した土坑である。検出した標高は 2.30 mである。平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 0.60 m、深さ 0.30 mを測る。掘り方は急傾斜であり、北側に三日月形の段を有する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1031 (第77図)

調査区北東側において検出した土坑であり、SK1025 & SK1032 の間に位置する。検出した標高は 2.30 mである。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し、規模は長軸 0.87 m、短軸 0.30 m、深さ 0.06 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1032 (第77 図)

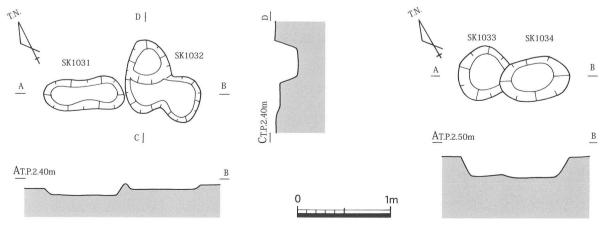
調査区北東側において検出した土坑であり、SK1031の東に接する。検出した標高は2.34 mである。平面形は南側に抉りを有し北側に大きく膨らみ、3 個の土坑が重なったような形である。規模は長軸0.84 m、短軸0.77 mを測る。北側の最深部の深さは0.24 mである。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1033 (第77図)

調査区東側中央において検出した土坑であり、SB 1007・1008、SK 1034と重複する。検出した標高は 2.37 mである。平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 0.58 m、深さ 0.24 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。



第77図 SK1031~1034平·断面図(S:1/40)

SK1034 (第77図)

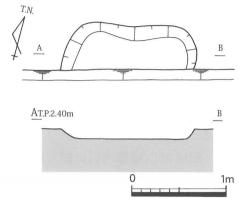
調査区東側中央において検出した土坑であり、SB1007・1008、SK1033と重複する。検出した標高は2.37 mである。平面形は東西方向に長い不整な楕円形を呈し、規模は長軸0.76 m、短軸0.44 m、深さ0.26 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1036 (第78 図)

調査区中央部の南端において検出した土坑であり、 遺構の南半分は調査区外に広がっている。検出した標 高は 2.29 mである。現況の平面形は東西方向に長い不 整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸 1.42 m、短軸 0.45 m以上、深さ 0.09 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図 化できるものはない。



第78図 SK1036 平・断面図 (S:1/40)

SK1037 (第79図)

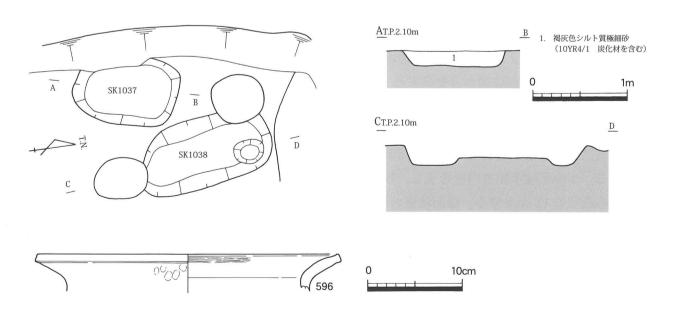
調査区北西端において検出した土坑であり、遺構の一部は調査区外に広がっている。検出した標高は 1.95 mである。平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸 1.11 m, 短軸 0.73 m, 深さ 0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1038 (第79 図)

調査区北西端において検出した土坑であり、SK 1037 の北東に位置する。検出した標高は 1.95 mである。平面形は南北方向に長い不整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸 1.46 m、短軸 0.74 m、深さ 0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。底面北端に直径 0.32 mで深さ 0.21 mを測る小穴が検出される。

遺物は、土師器甕(596)と土師器・須恵器の小片数点である。596は口縁端部に平坦面を持ち、 外面に若干の指頭圧痕、内面に粗い横方向のハケとナデが施される。



第79図 SK1037・1038 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)

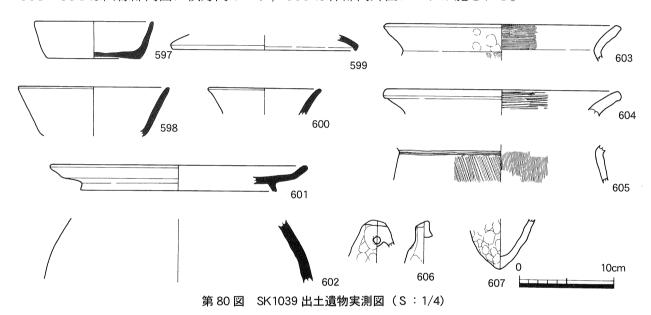
SK1039 (第 18·80 図)

調査区北西隅において検出した土坑であり、遺構の西半分は調査区外に広がっている。検出した標高は $1.89 \sim 1.95$ mである。東方に延びる S D $1004 \cdot 1007$ は本遺構に向かって低くなっており、本遺構より派生した溝である。検出できた平面図は不整な円形を呈し、規模は南北方向の直径 2.24 m、東西方向 0.88 m以上、検出面からの深さ 0.90 mを測る。断面は船底形を呈する。調査時には底面に僅かな湧水が認められ、井戸である可能性も考えられる。

遺物は, 須恵器杯 (597·598), 同杯蓋 (599), 同壺 (600·602), 同皿 (601), 土師器甕 (603 ~ 605), 飯蛸壺 (606), 製塩土器 (607) である。

597 は底面に回転へラキリ後に回転へラナデ,内面にナデが施される。598 は器高の高い杯であり, 内外面にナデが施される。599 は口縁端部を下方に短く屈曲する。601 は口径が大きく,器高が低い 器形であり、高い高台が付く。

603・604 は口縁部内面に横方向のハケ、605 は体部内外面にハケが施される。



SK1048 (第81図)

調査区東端中央において検出した土坑である。検出した標高は 2.54 mである。平面形は東西に長い不整な楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸 1.30 m、南北方向の短軸 0.90 m、検出面からの深さ 0.33 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1049 (第81図)

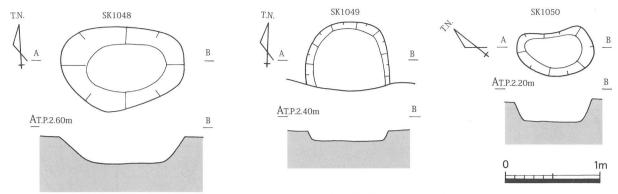
調査区東側において検出した土坑であり、SD 1006・1020 に切られる。検出した標高は 2.25 m である。平面形は不整な円形を呈し、規模は東西方向の直径 0.89 m、南北方向 0.73 m以上、検出面からの深さ 0.11 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。

SK1050 (第81図)

調査区北東側において検出した土坑である。検出した標高は 2.09 mである。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸 0.81 m、短軸 0.46 m、検出面からの深さ 0.20 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の小片数点のみであり、図化できるものはない。



第81図 SK1048~1050平·断面図(S:1/40)

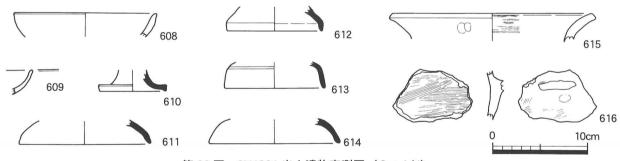
(5) 性格不明遺構

SX1001 (第5·82 図)

調査区南西隅において検出した性格不明遺構であり、SB1001に切られる。検出した標高は1.90mである。遺構の北部のみの検出であり、全容は不明である。検出した遺構は溝状を呈するが、溝の南側は北側より0.06m低く、溝の埋土と同じ土が南方に広がっている。

遺物は、土師器杯($608 \cdot 609$)、須恵器高杯(610)、同杯蓋($611 \sim 614$)、土師器甕($615 \cdot 616$)である。

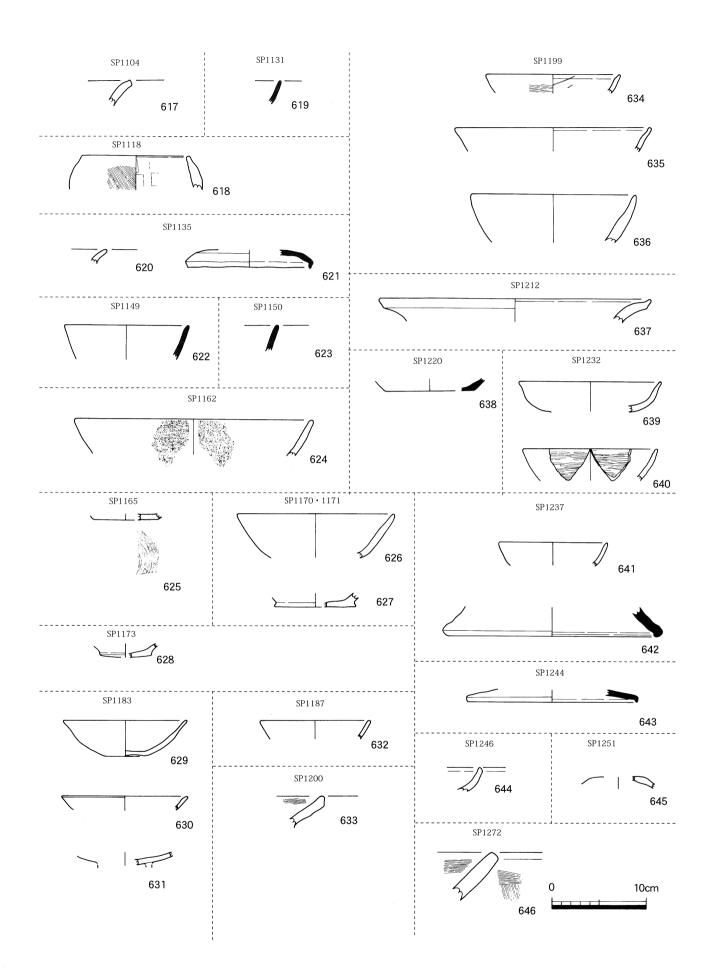
610 は脚裾部が短く下方に屈曲する。611・612 は口縁端部が短く下方に屈曲し、外面に僅かな稜を有する。613 は口縁部と天井部の境に沈線を巡らし、口縁部は直立する。



第82図 SX1001 出土遺物実測図(S:1/4)

(6) 柱穴(第83図)

617 は S P 1104 出土の土師器甕で、618 は S P 1118 出土の土師質土器鉢である。619 は S P 1131 出土の須恵器杯である。620・621 は S P 1135 出土で、620 は土師器甕、621 は須恵器杯蓋である。622 は S P 1149 出土、623 は S P 1150 出土の須恵器杯である。624 は S P 1162 出土の縄文土器浅鉢である。625 は S P 1165 出土の土師器杯であり、回転ヘラキリが施される。626・627 は S P 1170・1171 出土の土師器杯で、627 は回転ヘラキリが施される。628 は S P 1173 出土の土師器杯である。629~631 は S P 1183 出土で、629・630 は土師器杯、631 は黒色土器 A 類である。632 は S P 1187 出土の土師器杯、633 は S P 1200 出土の土師質土器甕である。634~636 は S P 1199 出土で、634・635 は土師器杯、636 は同鉢である。637 は S P 1212 出土の土師器甕である。638 は S P 1220 出土の須恵器杯である。639・640 は S P 1232 出土で、639 は土師器杯、640 は瓦器椀である。641・642 は S P 1237 出土で、641 は土師器杯、642 は須恵器高杯である。643 は S P 1244 出土の須恵器杯蓋、644 は S P 1246 出土の土師器杯、645 は S P 1251 出土の土師器蓋、646 は S P 1272 出土の土師質土器鍋である。



第83図 1 工区 SP 出土遺物実測図(S:1/4)

(7) 第4面出土遺物(第84~87図)

第4面の上面より出土した遺物は、土師器杯(647~657·661)、同皿(658~660)、同鉢(662)、同甕(663~672)、同甑(673·674)、須恵器杯蓋(675~685)、同杯(686~691)、同高杯(692)、同壺(693~699)、同甕(700・701)、緑釉陶器碗(702~711)、灰釉陶器碗(712~717)、青磁碗(718)、縄文土器浅鉢(719・720)、平瓦(721・722)、土馬(723・724)、土錘(725~730)、石鏃(731)である。

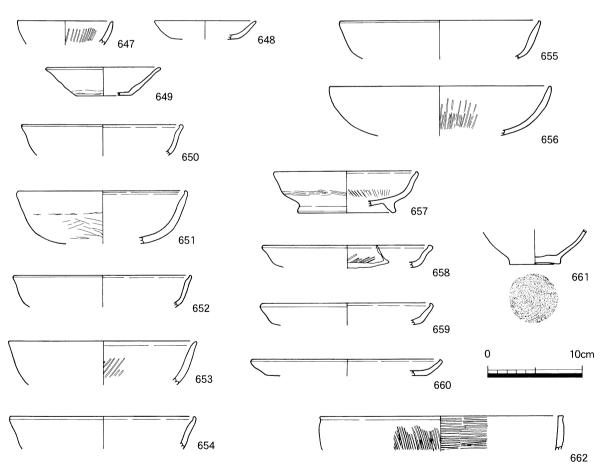
 $647 \sim 649$ は小形の杯であり、647 の内面は放射状暗文が施される。 $650 \sim 654$ は口縁端部内面に沈線状の凹みをめぐらす杯である。650 は内面にヘラミガキ、651 は体部下半にヘラケズリ、653 は内面に放射状暗文が施される。656 は内面に放射状暗文とヘラミガキが施される。657 は高台を持ち、内面に放射状暗文が施される。661 の底面は回転糸切りである。

658~660は口縁端部内面に沈線状の凹みをめぐらし、658の内面は放射状暗文が施される。

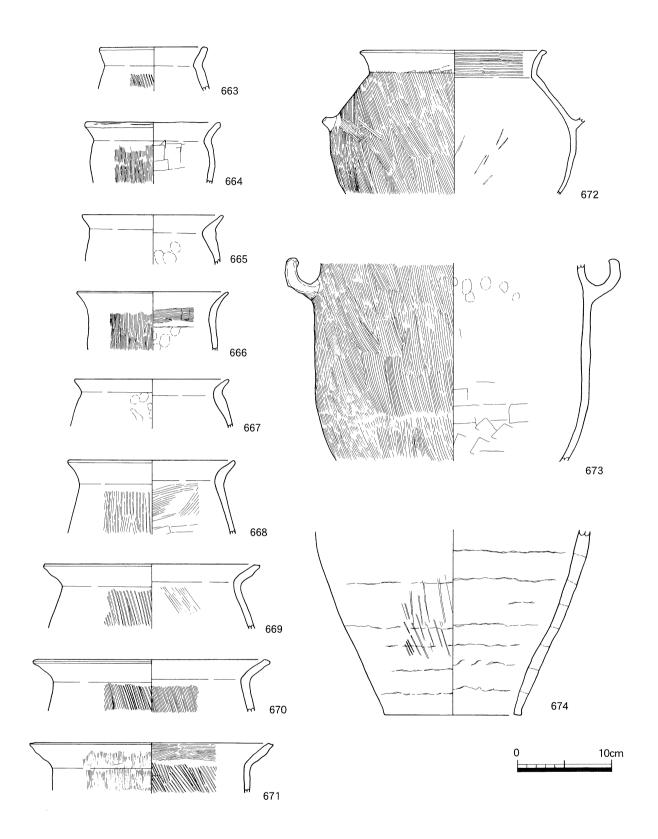
663~~671 は体部内外面にハケが施されるものが多い。672 は球形の体部で、口縁部内面に横方向のハケ、体部外面に縦方向のハケを施し、一対の扁平な把手を有する。673 は体部外面に縦方向のハケを施し、一対の扁平な把手を有する。

 $675 \sim 677$ は宝珠形の摘み, $679 \cdot 680 \cdot 683 \sim 685$ は口縁端部を短く下方に屈曲させ, $681 \cdot 682$ は口縁部内面に僅かな返りを持つ。689 の底面は回転ヘラキリが施され, $690 \cdot 691$ は低い高台が付き,691 の底面は回転ヘラキリ後に回転ヘラナデが施される。

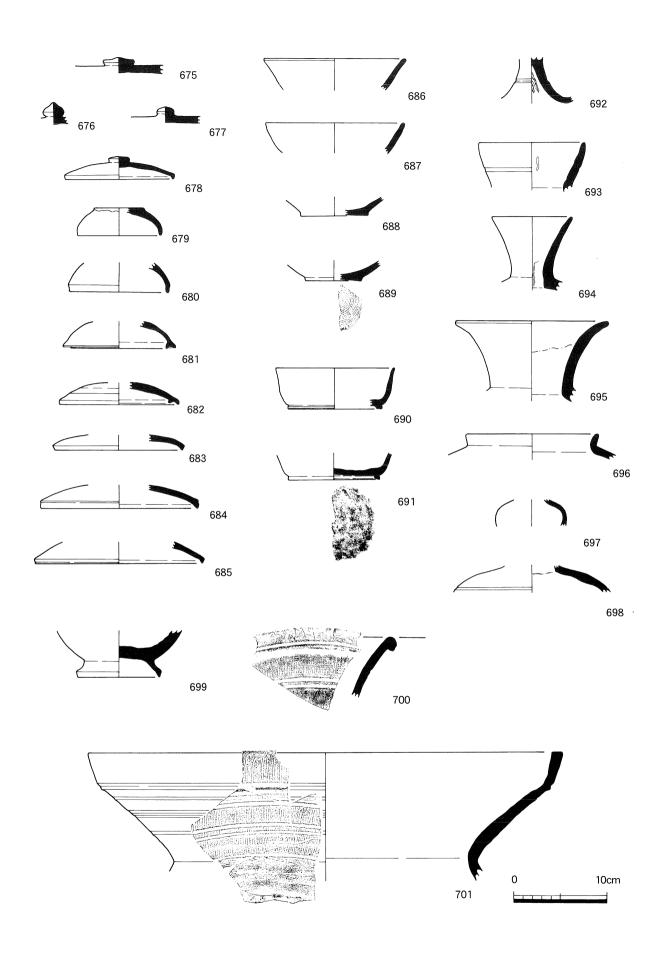
693 は外面に浅い沈線がめぐり, 内面にヘラによる窯記号が残る。696 は短頸壺, 697 は小形の壺, 699 は高台を有する。



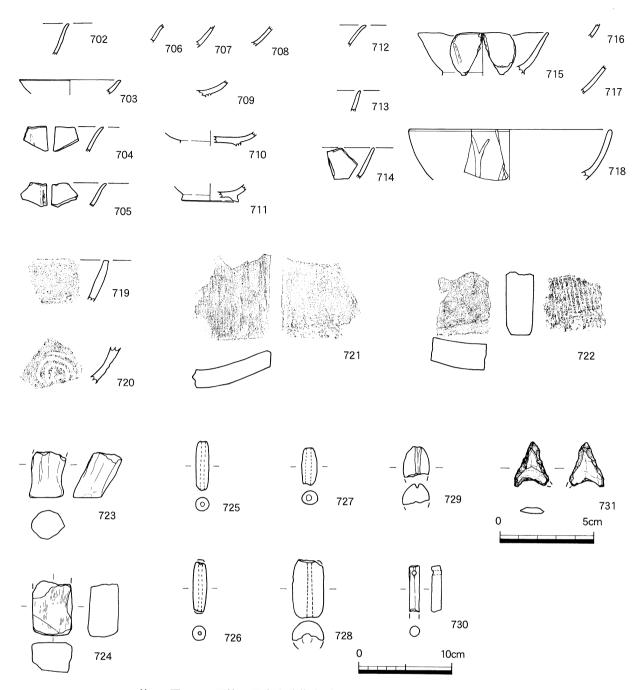
第84図 1 工区第4面出土遺物実測図(1)(S:1/4)



第85図 1工区第4面出土遺物実測図(2)(S:1/4)



第86図 1 工区第4面出土遺物実測図(3)(S:1/4)



第87図 1 工区第4面出土遺物実測図(4)(S:1/4・1/2)

702 は口縁部が若干外反し、704・705 の口縁部は稜花で、外面に蓮弁文が施される。706 \sim 708 は体部、709 \sim 711 は高台を有する底部である。

712 は口縁端部が僅かに外反する。714・715 の口縁部は稜花で、外面に蓮弁文が施される。 718 は外面に蓮弁文が施される。

719・720 は縄文土器で、720 は外面に輪状の沈線が施される。

721 は凹面に布目・ヘラナデ、凸面にゴザ目、722 は凹面にナデ、凸面にゴザ目が残される。

723・724 は土馬の足の一部である。

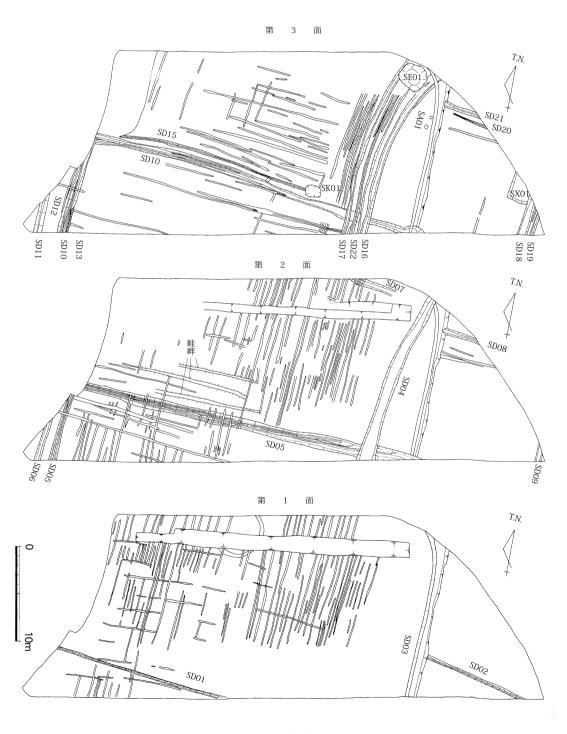
 $725 \sim 728$ は管状の土錘であり、 $725 \sim 727$ は小形、728 はやや大形である。729 は有溝の土錘、730 は端部に孔のある棒状の土錘である。

731 はサヌカイト製の凹基式石鏃で、先端部から基部にかけての縁辺を両面から加工する。

2 江戸時代

平安時代の遺構面より上層において第1面~第3面の合計3面の江戸時代の遺構面を検出した。遺構面の土層は、近世条里型水田の土壌層である灰白色シルト質細砂~中砂と非土壌層である黄灰色シルト質細砂が交互に堆積する。第3面は標高2.40 m前後、第2面は2.45 m前後、第1面は2.50 m前後である。第3面の遺構は、井戸・土坑・溝・犂跡が調査区全域に検出され、第2面は溝・犂跡・畦畔が調査区全域に検出され、第1面は犂跡が検出される。その出土遺物から、これらの遺構面にはほとんど時期差はないと考えられる。

本編では下層の第3面より記述する。



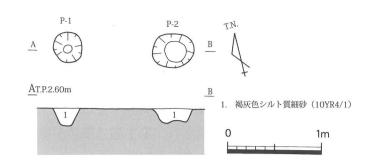
第88図 第1~3面遺構平面図(S:1/400)

1)第3面

(1) 柱列

SA01 (第89図)

調査区北東側において検出した。2個の柱穴のみの検出であり根拠としてはやや弱いが、柱列とする。検出した標高は2.32 mである。柱列の方位はN-70°-Wである。柱穴間の距離は0.75 mを測



第89図 SA01平·断面図(S:1/40)

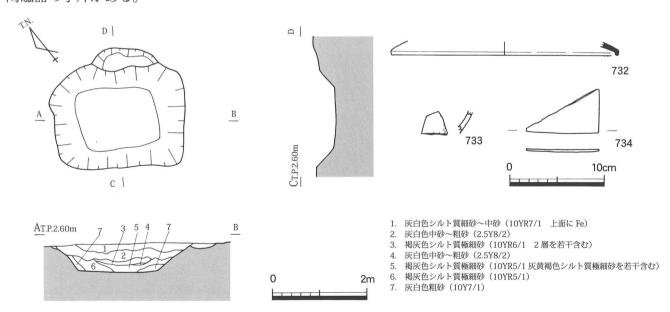
る。P-1 の平面形は円形を呈し、直径 0.30~m、深さ 0.18~mである。P-2 は楕円形を呈し、直径 $0.37\times0.44~m$ 、深さ 0.15~mである。

(2) 井戸

SE01 (第90図)

調査区北東隅において検出した井戸であり、SD16・17を切っている。検出した標高は2.37 m 前後である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東西方向2.75 m、南北方向2.55 m、検出面からの深さは0.50 mを測る。北側の上端が膨らみ、段を持つ。断面は逆台形を呈する。底面は上端同様に隅丸長方形を呈し、ほぼ平坦である。埋土は7層である。

図化した遺物は、須恵器杯蓋(732)、青磁碗(733)、加工板(734)であるが、その他の遺物に 陶磁器の小片がある。



第90図 SE01平・断面図及び出土遺物実測図(S:1/80.1/4)

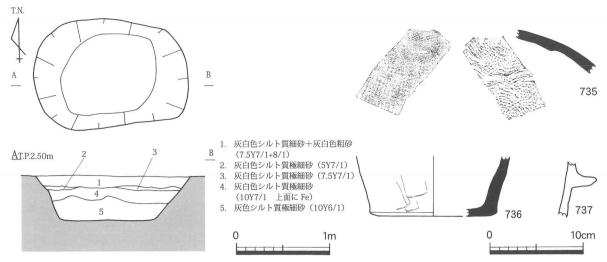
(3) 土坑

SK01 (第91図)

調査区中央において検出した土坑であり、SD15を切っている。検出した標高は2.30 m前後である。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸1.65 m、南北方向の短軸1.13 m、検出面からの深さ0.47 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は5層である。

図化できた遺物は、須恵器甕(735・736)、土師質土器鍋(737)であるが、その他に陶磁器や染付等の破片が出土した。

735 は外面に平行目のタタキ・カキ目、内面に当て具痕が残される。



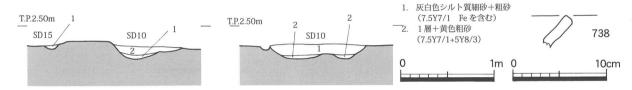
第91図 SK01平・断面図及び出土遺物実測図(S:1/40.1/4)

(4) 溝

SD10 (第88·92図)

調査区中央において検出した溝であり、 $SD16 \cdot 17 \cdot 22$ に切られる。検出した標高は $2.28 \sim 2.50$ mである。溝の方位は $N-98^\circ-E$ であり、ほぼ直線状に東西方向に延び、西端で南方向に直角に曲がる。溝の東側は 1 本の溝であるが、西側は 2 本ないし 3 本に分流する。幅は $0.50 \sim 0.90$ m、深さは $0.10 \sim 0.17$ mを測る。断面は船底形を呈する。底面のレベルは南から北に緩やかに下がり、東から西に向かって緩やかに下がる。

遺物は、土師質土器鍋(738)、陶磁器の破片である。



第92図 SD10・15 断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)

SD11 (第88·93 図)

調査区南西隅において検出した溝である。検出した標高は 2.33 m前後である。溝の方位はN-0°-Eである。溝の幅は 0.78 m,深さは 0.24 mを測る。断面は船底形を呈する。底面のレベルは平坦である。

遺物は、陶磁器の破片数点のみである。

T.P.2.50m 2 1. 灰白色シルト質細砂+粗砂 (7.5Y6/1) 2. 灰白色細砂~粗砂 (7.5Y7/2) 0 1m

第93図 SD11断面図(S:1/40)

SD12 (第88図)

調査区南西隅において検出した溝であり、SD10に切られる。検出した標高は 2.30 mである。 溝の方位はN-0° -Eであり、SD10と同方向である。幅は 0.15 m、深さは 0.03 mを測る。断面は船底形を呈する。

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

SD13 (第88図)

調査区南西隅において検出した溝であり、SD10に切られる。検出した標高は 2.35 mである。 溝の方位はN-0° -Eである。幅は 0.19 m、深さは 0.08 mを測る。

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

SD15 (第88図)

調査区中央において検出した溝であり、東端を S K 01 に切られる。検出した標高は 2.38 mである。溝の方位は N - 98° - E であり、西端付近で少し湾曲する。幅は $0.13 \sim 0.38$ m、深さは $0.03 \sim 0.08$ mを測る。断面は船底形を呈し、底面は東から西に向かって低くなる。

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

SD16 (第88·94 図)

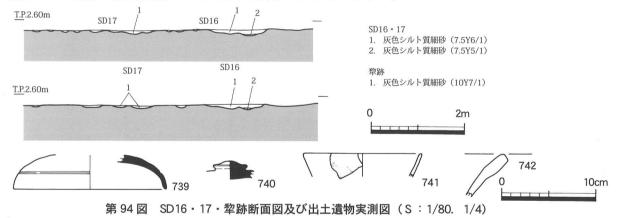
調査区東側において検出した溝であり、SD10を切り、SE01に切られる。検出した標高は 2.45 m前後である。溝の方向は南北であり、北東方向に湾曲する。溝底面の西側は浅い段となっており、東側で深くなる。幅は $1.00\sim1.50$ m、深さは $0.06\sim0.10$ mを測る。底面のレベルは南から北に向かって僅かに低くなる。

遺物は、須恵器蓋(739・740)、磁器碗(741)、土師質土器鍋(742)である。

SD17 (第88·94 図)

調査区東側において検出した溝であり、SD10を切り、SE01に切られる。検出した標高は 2.42 m前後である。溝の方向は SD16 と平行で南北方向に延び、北東方向に湾曲する。北側では 1 本の溝であり、底面の西側は浅い段、東側で深くなるが、南側では 2 本の溝に分流する。幅は 0.90 m、深さは 0.06 mを測る。底面のレベルは南から北に僅かに低くなる。

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。



SD18 (第88·95 図)

調査区南東隅において検出した溝であり、SX01を切っている。検出した標高は 2.77 m前後である。溝の方位は $N-10^{\circ}-E$ であり、SD19 と平行に延びる。幅は 0.92 m、深さは 0.09 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

SD19 (第88·95図)

調査区南東隅において検出した溝である。検出した標高は $2.77~\mathrm{m}$ 前後である。溝の方位は $\mathrm{N}-10^\circ$ $-\mathrm{E}$ である。幅は $0.43~\mathrm{m}$,深さは $0.05~\mathrm{m}$ を測る。断面は船底形を呈する。

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。



SD20 (第88図)

調査区北東隅において検出した溝である。検出した標高は 2.73 mである。溝の方位は $N-102^\circ$ -E である。幅は 0.25 m、深さは 0.05 mを測る。断面は船底形を呈する。

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

SD21 (第88図)

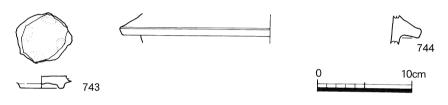
調査区北東隅において検出した溝である。検出した標高は 2.73 mである。溝の方位は $N-102^\circ$ -E であり,S D 20 と平行に延びる。幅は 0.54 m,深さは 0.14 mを測る。断面は船底形を呈する。遺物は,陶磁器の破片数点のみであり,図化できるものはない。

SD22 (第88図)

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

(5) 性格不明遺構

SX01 (第88・96 図) 調査区南東隅において 検出した落ち込みであり, SD 18 に切られ,北側は 調査区外に広がる。検出



第 96 図 SX01 出土遺物実測図 (S:1/4)

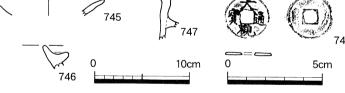
した標高は 2.75 mである。検出した範囲の平面形は方形であり,規模は南北 2.82 m以上,東西 2.25 m以上,深さ 0.15 mを測る。底面は平坦である。

遺物は、磁器碗(743)、土師質土器鍋(744)である。743は見込みに砂目がある。

(6) 犂跡

犂跡 (第88・97図)

調査区全域にわたって検出したが, SD17より西側に集中する。検出し た標高は2.35~2.40 mである。犂跡



第 97 図 犂跡出土遺物実測図 (S: 1/4. 1/2)

の方向は、SD 17の西側では南北方向に延びるが、調査区中央では東西方向に延びる。つまり、南北方向の犂はSD 16・17・22 と平行しており、東西方向の犂はSD 10・15 と平行している。犂の幅は $10\sim30$ cm、深さは 2cm を測る。埋土は灰白色シルト質細砂である。

遺物は、磁器皿 (745)、土師質土器足釜 (746)、瓦質土器鍋 (747)、大観通宝 (748) である。 748 は 1107 年に鋳造された北宋銭である

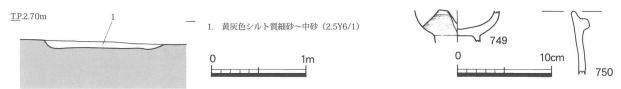
2) 第2面

(1) 溝

SD04 (第88·98 図)

調査区東側において検出した溝であり、SD05を切り、SD03に切られる。検出した標高は 2.57 mである。溝の方位は $N-10^{\circ}-E$ であり、幅は $1.00\sim1.80$ m、深さは 0.10 mを測る。断面は 逆台形を呈する。底面のレベルは平坦である。

遺物は、磁器碗(749)、土師質土器足釜(750)である。

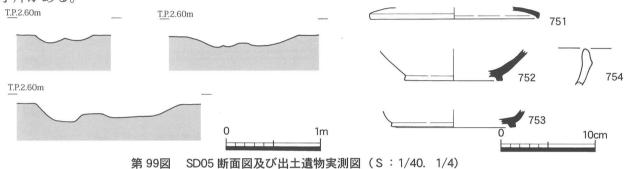


第 98 図 SD04 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/4 0. 1/4)

SD05 (第88·99 図)

調査区中央において検出した溝であり、SD04に切られる。溝の位置は第3面で検出したSD10とほぼ同位置である。検出した標高は $2.35\sim2.50$ mである。溝の方位は $N-90^\circ-E$ である。溝は直線状に東西方向に延び,西端で南方向に直角に曲がる。幅は $0.40\sim1.95$ mを測り, $2\sim4$ 本の落ち込みがある。最深部の深さは $0.04\sim0.12$ mを測る。底面のレベルは南から北に緩やかに下がり、東から西に向かって緩やかに下がる。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

遺物は, 須恵器杯蓋 (751), 同杯 (752・753), 土師質土器足釜 (754) だが, その他に陶磁器の小片がある。



第 99因 SD03 断固因及05山土退彻关则因(S

SD06 (第88·100 図)

調査区南西隅において検出した溝である。検出した標高は 2.43~mである。溝の方位はN-8~- E であり、第 3~m S D 11~と同位置である。溝の幅は 0.57~m、深さは 0.04~mを測る。

遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

SD07 (第88·100 図)

調査区北東隅において検出した溝である。検出した標高は $2.50~\mathrm{m}$ である。溝の方位は $\mathrm{N}-9~8~\mathrm{e}$ $-\mathrm{E}$ である。溝の幅は $0.75~\mathrm{m}$ 、深さは $0.05~\mathrm{e}$ $0.10~\mathrm{m}$ を測る。断面は逆台形である。

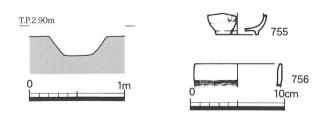
遺物は、陶磁器の破片数点のみであり、図化できるものはない。



第 100 図 SD06・07・09 断面図 (S:1/40)

SD08 (第88·101図)

調査区北東隅において検出した溝である。検出した標高は $2.80~\rm{m}$ である。溝の方位は $N-95^\circ$ -Eであり,第 $3~\rm{m}$ の S D 21 とほぼ同位置である。幅は $0.34\sim0.60~\rm{m}$,深さは $0.20~\rm{m}$ を測る。断面は逆台形を呈する。



遺物は磁器銚子 (755), 同碗 (756) である。 第 101 図 SD08 断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)

SD09 (第88·100図)

調査区南東隅において検出した溝である。検出した標高は 2.83~mである。溝の方位は $N-0^\circ-E$ であり、第 3~m S~D~19 とほぼ同位置である。幅は 0.63~m、深さは 0.05~mを測る。

(2) 犂跡

犂跡 (第88図)

SD04より西側の調査区において検出した。検出した標高は $2.40 \sim 2.55$ mである。犂跡は南北方向に延びるものが大部分であるが,SD05の両側では東西方向に延びる犂もある。また,SD05の北側には幅 0.40 mの畦畔が 2 本検出された。犂の幅は $10 \sim 30$ cm,深さは 2cm を測る。埋土は灰白色シルト質細砂である。

3) 第1面

(1) 犂跡

犂跡(第88図)

調査区の東側を除いた範囲において検出した。検出した標高は $2.43 \sim 2.53$ mである。大部分の犂跡は南北方向に延びるが、東西方向に等間隔で検出される犂跡もある。犂の幅は $10 \sim 30$ cm、深さは 2cm を測る。埋土は灰白色シルト質細砂である。調査区中央の北端に、褐鉄鉱が帯状で円形を描いている部分を検出した。褐鉄鉱の幅は 0.40 mで、円の直径は約 5.00 mを測る。帯状の褐鉄鉱には偶蹄目の動物の足跡が多量に検出された。

3 近代

(1) 溝

SD01 (第88図)

調査区南西側において検出した溝であり、東西方向で直線状に延びる。溝の中には長さ 0.80 mの 土管が埋設されている。

SD02 (第88 図)

調査区南東側において検出した溝であり、東西方向で直線状に延びる。溝の西端は S D 03 と合流する。溝の中には長さ 0.80 mの土管が埋設されている。

SD03 (第 88・102 図)

調査区東側において検出した溝であり、南北方向に延びる。溝は直線であるが、北端は僅かに西方に曲がる。幅は 0.30 m、深さは 0.20 mを測り、溝の中には多量の石・土器・瓦が充填されている。調査は中央部 1.20 mの範囲のみ実施する。

図化した遺物は、磁器碗 $(757 \sim 761)$ 、同皿 $(762 \cdot 763)$ 、同鉢 (764)、同急須 (767)、陶器擂鉢 (765)、同火鉢 (766)、同瓶掛 (768) であるが、その他にも多量の陶磁器がある。

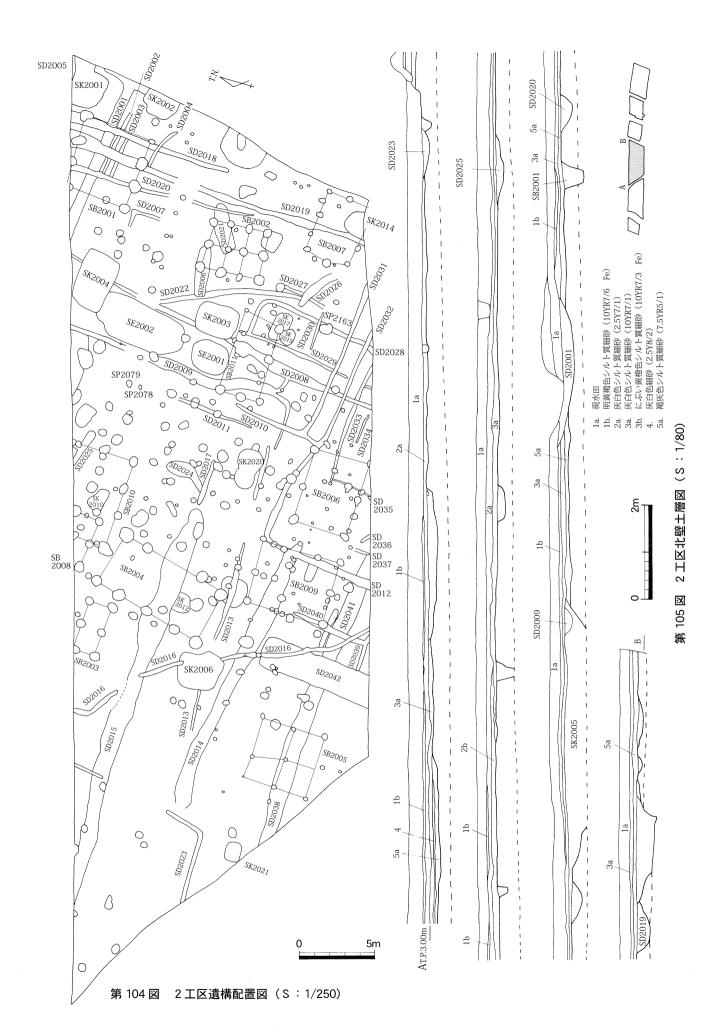
757 は外面に染色体文様が書かれる。758 は膠による補修が行われる。759・762 は型紙刷による染付である。763 は蛇の目凹型高台である。764 は内面に草花文を描く。765 は備前焼で内面前面に擂り目がある。767 は屋島焼である。768 は瀬戸・美濃系である。

4 第1~3面出土遺物(第103図)

第3面出土の遺物は, 須恵器杯蓋 (769), 同杯 (770), 同壺 (771), 青磁碗 (773), 砥石 (774), 第1・2面の遺物は, 須恵器高杯 (772), 泥面子 (775・776), 鉄鍬 (777) である。



第 103 図 第 1 ~ 3 面出土遺物実測図 (S: 1/4)



-75-

2.2工区

2工区は本遺跡の中央から西側に位置し、1工区と5工区の間である。調査区の平面形は逆台形を呈し、北側の長さは約64.00 m、南側は約38.00 m、幅は約21.00 mである。調査区中央の南北軸座標値はX=146.780、東西軸座標値はY=55.750 である。西端は細い農道に、東端は細い農道と水路に区画される。遺構面は1面である。遺構の時期は弥生時代と古代と江戸時代に比定され、掘立柱建物跡や溝・土坑等の多数の遺構が調査区全域に検出された。

調査区全体の土層は、上層から現水田耕作土・ $1\sim3$ 枚の近世条里型水田・遺構検出面の地山が堆積する。遺構検出面のレベルは、南東から北西に向かって緩やかに低くなっており、東端の標高は 3.05 m、西端では 2.50 mである。地表面から遺構面までの深さは、0.50 mである。

1 弥生時代

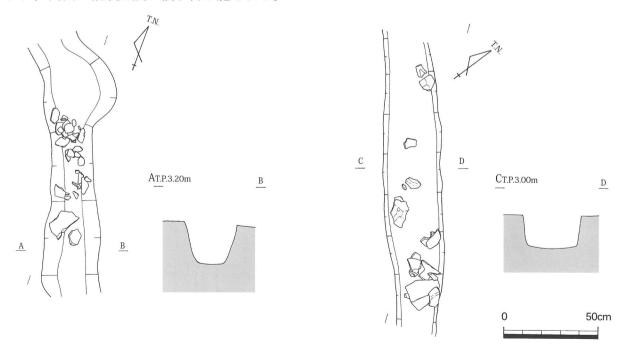
(1) 溝

SD2016 (第 104 · 106 · 107 図)

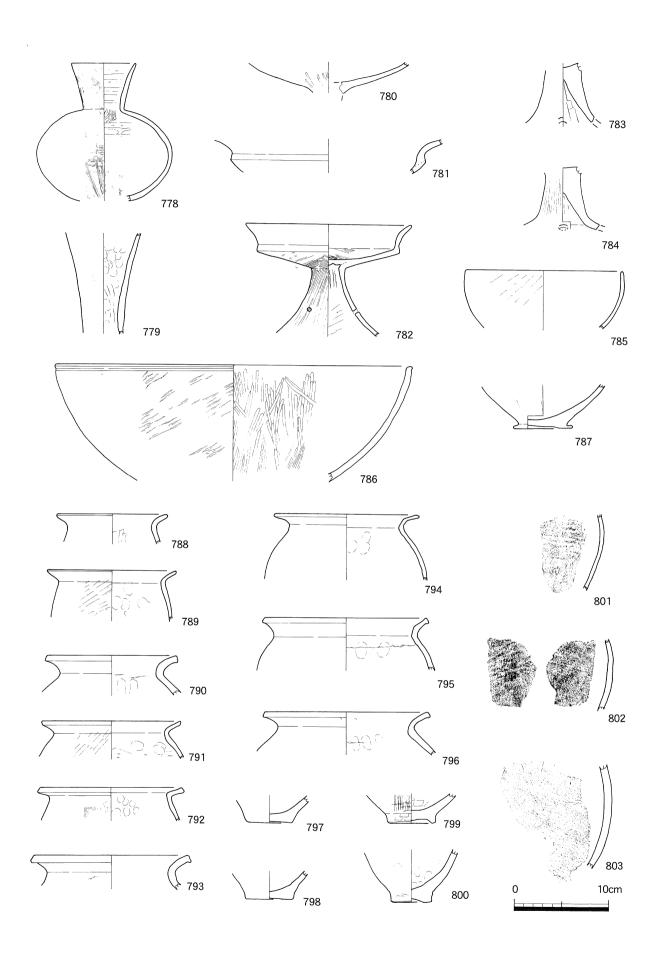
調査区中央の西寄りにおいて検出した溝であり、 $SD2014 \cdot 2015 \cdot 2038 \sim 2042$ 、SK2006 に切られる。検出した標高は $2.80 \sim 2.98$ mである。溝の方位は $N-32^\circ-W$ であり、僅かに蛇行する。溝の幅は $0.25 \sim 0.35$ m、深さは $0.11 \sim 0.27$ mを測る。溝の断面は逆台形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに下がる。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂である。SD2015 の北側と SD2042 の東側の 2 カ所では土器が集中して出土する。

遺物は,弥生土器壺(778・793),同細頸壺(779),同高杯(780 \sim 784),同鉢(785 \sim 787),同甕(788 \sim 792・794 \sim 803)である。

778 は扁平な円形の体部に外反する口縁部が付く。口縁部外面はハケ後にヘラミガキ,内面に横方向のヘラナデが施される。体部外面上半はハケ後にナデ,中央は横方向のヘラミガキ,下半は縦方向のヘラミガキが施され、内面上位は絞り目・ヘラケズリ,下位はハケが施される。779 は外面にハケ・ナデ,内面に指頭圧痕・絞り目が施される。



第 106 図 SD2016 平・断面図 (S: 1/20)



第 107 図 SD2016 出土遺物実測図 (S: 1/4)

780 は杯部下半であり外面にヘラミガキが部分的に残存し、円盤充塡に伴う接合痕がある。781 は口縁部と体部の境に明瞭な稜を持つ。782 は口縁部と体部の境に明瞭な稜を持ち、体部内外面に分割ヘラミガキ、脚部外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリが施され、脚部に3個の小孔を有する。783・784 は脚部で孔を有する。

785 は半球状の器形で、外面上位に間隔の広い平行目のタタキが施される。786 は大形の鉢で、外面に平行目のタタキ、内面にヘラミガキが施される。

 $788 \sim 792 \cdot 794 \sim 796$ は「く」の字状口縁部であり、788 は内面にヘラケズリ、 $789 \cdot 791$ は体部外面に平行タタキ、内面に指頭圧痕、 $790 \cdot 794 \sim 796$ は体部内面に指頭圧痕、792 は外面にハケ、内面に指頭圧痕、793 は外面にハケが施される。 $797 \cdot 798$ は平底、799 は外面に平行タタキ後にヘラミガキ、内面にヘラケズリ、底面に指頭圧痕が施される。800 は外面に板ナデ・指頭圧痕、内面に指ナデが施され、底面中央がやや凹む。 $801 \cdot 802$ は外面に平行目のタタキが施される。

2 古代

(1) 掘立柱建物跡

SB2001 (第 108 図)

調査区北東側において検出した掘立柱建物跡であり、SD 2001~2003 に切られ、2018~2020を切っている。検出した標高は 3.05~3.11 mである。規模は、東西 3 間×南北 1 間(5.24×5.20 m)である。柱穴は 8 個であり、 $P-1 \cdot P-2$ は調査区外にかかる。東西の芯芯間距離は 1.65 m、南北は 4.30~4.50 mを測る。建物の主軸方位は $N-83^\circ$ - Wである。柱穴の平面形は不整な円形および不整な楕円形を呈し、P-4 は括れのある円形である。P-5 の直径は 0.46 mで規模が小さいが、その他の柱穴は大きく直径 0.70~0.85 mを測る。南側の柱穴は浅く、深さ 0.20~0.30 mを測るが、北側柱穴は深さ 0.28~0.68 mである。P-3 に柱材(810)の基部が残存する。大部分の柱穴は断面逆台形を呈する。柱穴の埋土は 5 層に分けられ、P-5~7 は柱痕の存在を示す堆積状態である。

遺物は、須恵器杯(804)、土師器甕(805~808)、カマド(809)、柱材(810)である。

804 は直線的な体部である。810 は現存長 48.8 cm, 直径 13.2 cmを測り, 基部を加工する。側面には枝払いの加工がある。

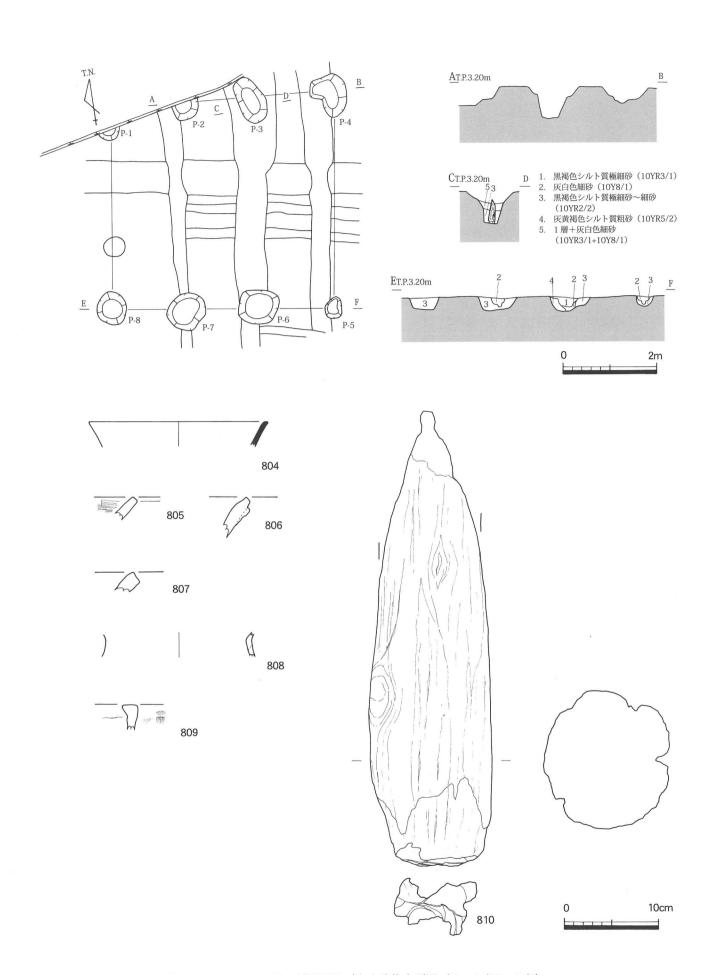
SB2002 (第 109 図)

調査区東側において検出した総柱の掘立柱建物跡であり、 $SD2006 \cdot 2021$, SK2013 を切っている。検出した標高は 3.07 mである。規模は、東西 2 間×南北 3 間(3.85×4.40 m)である。柱穴は 12 個であり、東西の芯芯間距離は 1.60 m、南北は 1.30 mを測る。建物の主軸方位はN-5 $^{\circ}$ $^{\circ$

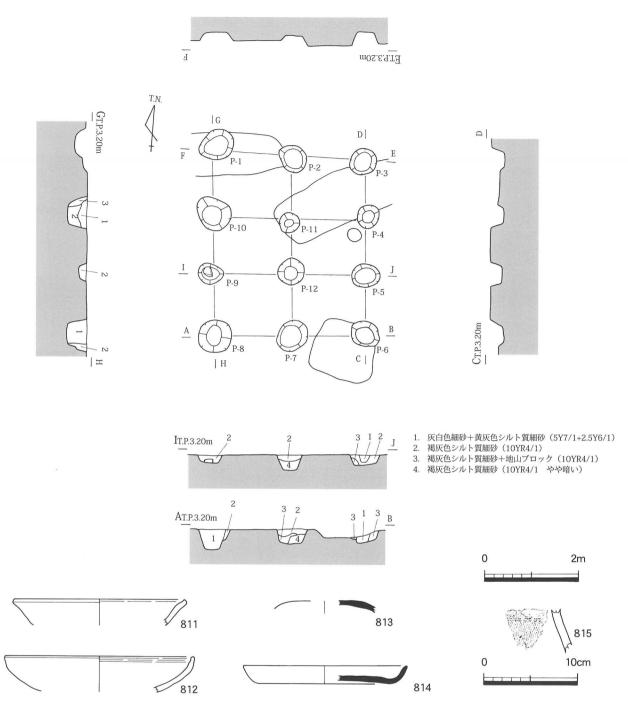
遺物は、土師器杯(811・812)、須恵器杯蓋(813)、同皿(814)、土師器甕(815)である。

811 は口縁端部内面に非常に僅かな沈線状の凹みを持つ。812 は口縁部と体部の境に僅かな稜を持ち、口縁端部内面に非常に僅かな沈線を廻らす。体部外面はヘラケズリが施される。

814 は器高が低く、上底の底部から緩やかな傾斜で体部が立ち上がる。底面は回転ヘラキリ後にナデ、体部は僅かなヘラケズリが施される。



第 108 図 SB2001 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/80.1/4)



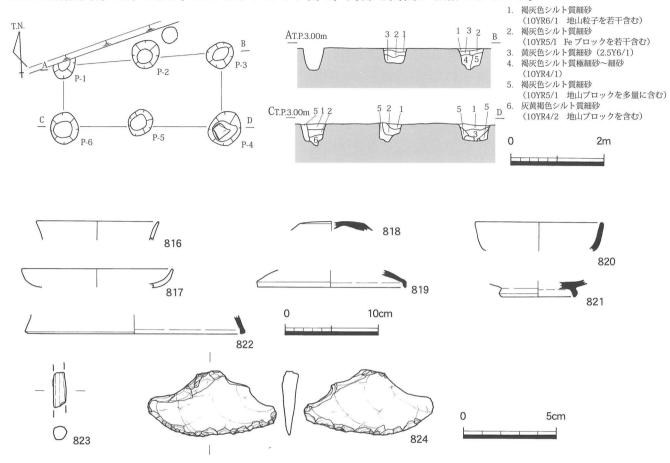
第 109 図 SB2002 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80. 1/4)

SB2003 (第110図)

調査区中央西寄りの北端において検出した掘立柱建物跡であり,遺構の北側は調査区外に広がる。検出した標高は $2.90~\rm{m}$ 前後である。検出した範囲の規模は,東西 $2~\rm{ll} \times$ 南北 $1~\rm{ll}$ ($4.07 \times 2.18~\rm{m}$) であるが,北方向に延びると考えられる。検出した柱穴は $6~\rm{ll}$ 個であり,P-1 は調査区外にかかる。東西の芯芯間距離は $1.70~\rm{m}$,南北は $1.50 \sim 1.65~\rm{m}$ を測る。建物の主軸方位は $N-5~\rm{oll}$ -E である。柱穴の平面形は不整な円形を呈し,直径は $0.55 \sim 0.75~\rm{m}$,深さ $0.34 \sim 0.48~\rm{m}$ を測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。 $P-3~\rm{oll}$ -E のは底面に小穴を検出し,-E は底面直上に根石を残存する。柱穴の埋土は -E の埋土は -E を開た分けられる。

遺物は, 土師器杯 (816), 同皿 (817), 須恵器杯蓋 (818·819), 同杯 (820·821), 同高杯 (822), 鉄釘 (823), ナイフ形石器 (824) である。 816 は直線的な体部であり、内外面にナデが施される。817 は器高の低い器形であり、底部からなだらかな傾斜で立ち上がる。

- 819 は口縁端部を短く下方に屈曲し、口縁部と天井部の境に明瞭な稜を持つ。
- 820 は急傾斜で立ち上がる体部である。821 はやや高い高台を有する。
- 823 は断面方形の釘である。824 はサヌカイト製で、刃部を両面から加工している。

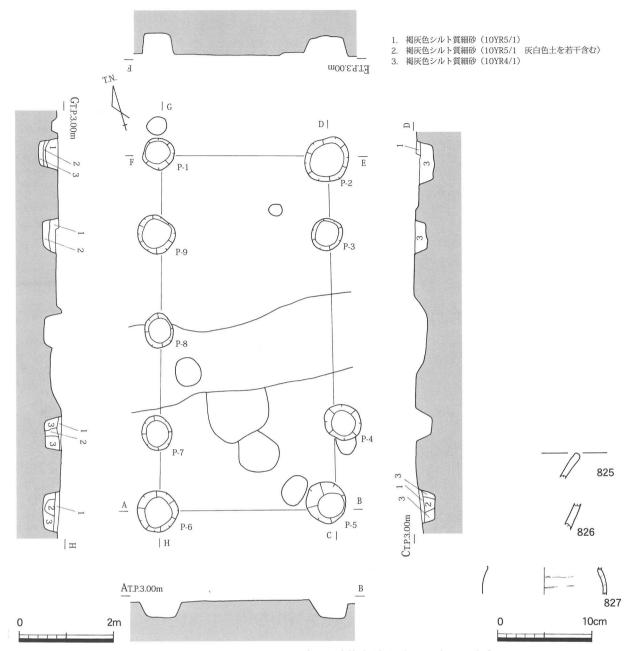


第 110 図 SB2003 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80. 1/4. 1/2)

SB2004 (第111 図)

調査区中央において検出した掘立柱建物跡であり、SK2008を切り、SD2015に切られ、SK2012と重複する。検出した標高は $2.85\sim2.95$ mである。規模は、東西 1 間×南北 4 間(4.47×8.25 m) である。柱穴は 9 個検出するが、P-3 と P-4 の間に柱穴が存在していた可能性があり、本来は 10 個であったと考えられる。東西の芯芯間距離は 3.75 m、南北の芯芯間距離は 1.60 mと 2.20 mを 測る。南北方向の柱穴の配置は、中央の 2 間が 2.20 mと広く、両端の 2 間は 1.60 mで狭くなる。建物の主軸方位は N-15° -E である。柱穴の平面形は円形を呈し、直径 $0.65\sim1.04$ mを測る。検出面からの深さは $0.25\sim0.57$ mを測る。大部分の柱穴は断面逆台形を呈する。柱穴の埋土は 3 層に分けられ、 $P-5\sim7$ は中央に柱痕の存在を示す堆積状態である。 $P-1\cdot9$ は 2 ないし 3 層堆積し、 $P-2\cdot3$ は単一層である。

遺物は、土師器甕 (825)、土師質土器甕 (826)、弥生土器甕 (827) である。 825 は内面に若干の凹みがあり、ヘラナデが施される。826 は外面にヘラナデが施される。 827 は内面に接合痕が明瞭に残り、混入品である。



第 111 図 SB2004 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80. 1/4)

SB2008 (第112図)

調査区中央の北端において検出した掘立柱建物跡であり、遺構北側の大部分は調査区外にかかるため柱穴 4 個のみ検出した。検出した標高は $2.85\sim2.88$ mである。検出できた規模は東西 2 間、南北 1 間 $(3.87\times2.05~\mathrm{m})$ である。東西の芯芯間距離は $1.65~\mathrm{m}$,南北の芯芯距離は $1.70~\mathrm{m}$ を測る。建物の主軸方位は N-6°-E である。柱穴の平面形は円形を呈し,直径 $0.57\sim0.74~\mathrm{m}$,深さは $0.25\sim0.57~\mathrm{m}$ を測る。大部分の柱穴は断面逆台形を呈する。

遺物は、土師器甕(828)である。

SB2009 (第113図)

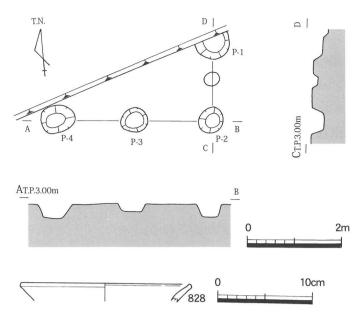
調査区中央の南側において検出した掘立柱建物跡であり,SD 2012・2040 に切られ,SD 2014 と重複する。検出した標高は $2.95\sim3.01$ mである。規模は東西 2 間,南北 2 間と 3 間(1.70×5.85 m)である。東西の芯芯間距離は 2.20 m,南北の芯芯間距離は $1.55\sim3.10$ mを測る。建物の主軸

方位はN-3° -Eである。柱穴は9個である。東列側柱は4個で3間であり,両端の柱間は狭く,中央は広い。西列側柱は3個で2間である。柱穴の平面形は円形・楕円形を呈し,直径 $0.35\sim0.64$ mを測る。検出面からの深さは0.15 mのP-9を除いて0.50 m前後である。柱穴の断面は逆台形を呈する。

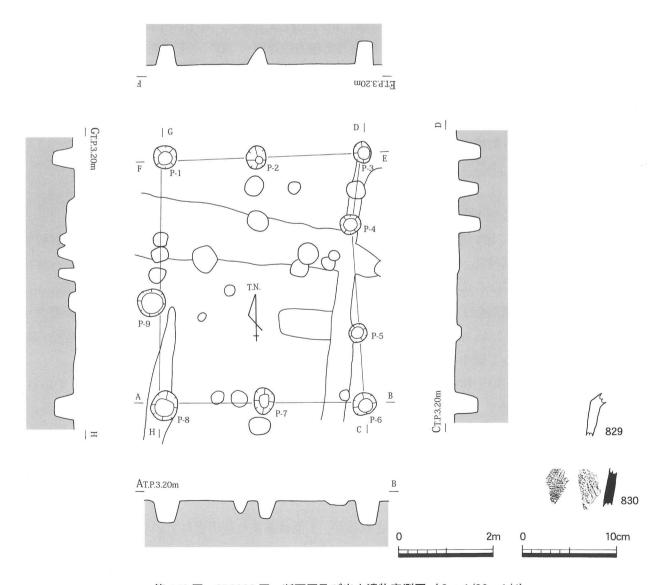
遺物は, 土師器鍋 (829), 須恵器甕 (830) である。

829 は体部上位の破片である。

830 は外面に格子目のタタキ・カキ目,内面に当て具痕が残される。



第 112 図 SB2008 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/8 0. 1/4)



第 113 図 SB2009 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80. 1/4)

SB2010 (第 114 図)

調査区中央の北端において検出した掘立柱建物跡であり、遺構北側は調査区外にかかるため柱穴7個のみ検出した。検出した標高は $2.85\sim2.95\,\mathrm{m}$ である。検出できた規模は東西 $3\,\mathrm{ll}$,南北 $2\,\mathrm{ll}$ ($6.85\times4.43\,\mathrm{m}$) である。東西の芯芯間距離は $1.80\sim2.20\,\mathrm{m}$,南北の芯芯間距離は $2.00\,\mathrm{m}$ を測る。建物の主軸方位は $N-3^\circ-E$ である。柱穴の平面形は円形・楕円形を呈し,P-6 は不整な円形である。直径 $0.57\sim0.85\,\mathrm{m}$,深さは $0.25\sim0.40\,\mathrm{m}$ を測る。大部分の柱穴は断面逆台形を呈する。埋土は $5\,\mathrm{ll}$ 層に分けられる。

遺物は土師器甕(831), 土師器足釜(832), 須恵器杯(833), 同ハソウ(834)である。

831 は体部から鋭角に短く外反する口縁部である。832 は口縁端部外面に短い鍔が付き、外面に指頭圧痕、内面にナデが施される。

833 は直線的に延びる体部である。

SB2011 (第 115 図)

調査区中央の東側において検出した掘立柱建物跡であり、SD 2008・2009・2028・2029、SK 2027 に切られる。検出した標高は $2.99 \sim 3.10$ mである。規模は東西 2 間、南北 1 間と 2 間(6.10×3.35 m)である。南列側柱はやや短く、中央の P-5 が内側に位置するため、建物の平面形は乱れている。東西の芯芯間距離は 2.20 と 3.35 m,東列側柱は 1 間で,芯芯間距離は 2.55 m,西列側柱は 2 間で,芯芯間距離は 1.50 mを測る。建物の主軸方位は 2 同である。柱穴の平面形は円形と不整な円形を呈し、直径は 2 0.33 2 0.65 m,深さは 2 0.14 2 0.56 mを測る。 2 0.56 mを加る。 2

遺物は、土師器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

(2) 溝

SD2014(第104·116図)

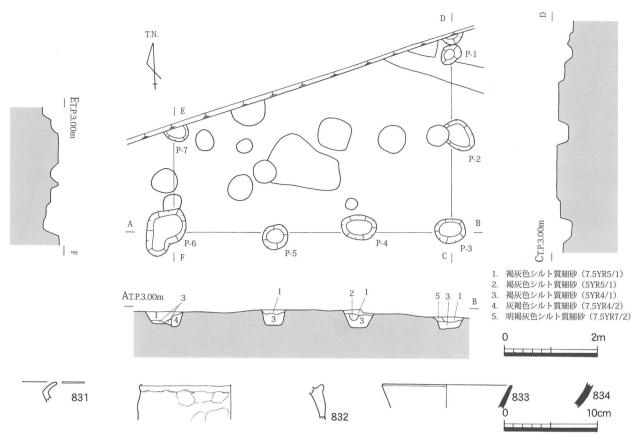
調査区中央から西側において検出した溝であり、SD2016を切り、SB2006、SD2012に切られ、SB2009と重複する。検出した標高は $2.77 \sim 2.96$ mである。溝の方位は $N-78^\circ-W$ である。溝の東端はSB2009の東側に検出され、直線的に西方向に延びる。溝の西端はSD2023付近で自然消滅するが、延長線上には西接する1 工区のSD1023 があり、同一遺構の可能性が考えられる。溝の幅は $0.72 \sim 1.35$ m、深さは $0.05 \sim 0.17$ mを測る。断面は浅い船底形を呈し、底面のレベルは東から西に向かって緩やかに低くなる。埋土は4 層である。

遺物は、須恵器杯蓋(835・836)、同杯(837~840)、土師器甕(841・842)、砥石(843)である。 835 は器高が高い器形で、口縁部内面に短い返りが付く。 836 は口縁端部を短く下方に屈曲する。

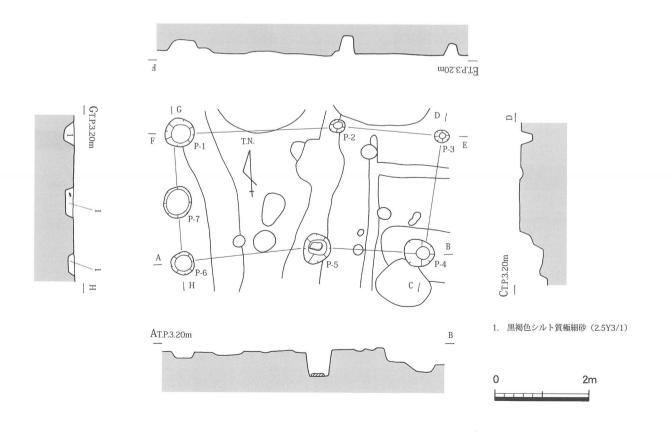
837・839・840 は断面方形の高台が付く杯で,837・840 の体部と底部の境に明確な稜を有する。 839 の底面は回転ヘラナデが施される。838 は直線的な体部で外面に自然釉がかかる。

841・842 は緩やかに口縁部が外反し、841 の口縁端部は上方に若干摘み上げられる。842 の口縁部内面・体部外面はハケが施される。

843 は砂岩製であり、側面の全てが使用されるが、1 面はあまり使用されていない。



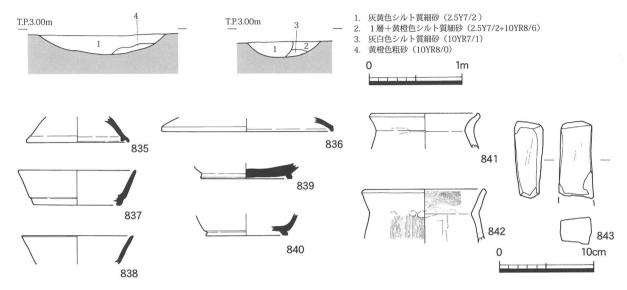
第 114 図 SB2010 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80. 1/4)



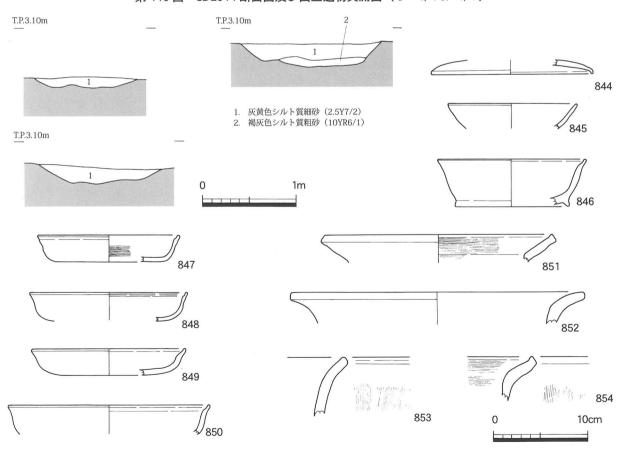
第 115 図 SB2011 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80)

SD2015 (第 104・117・118 図)

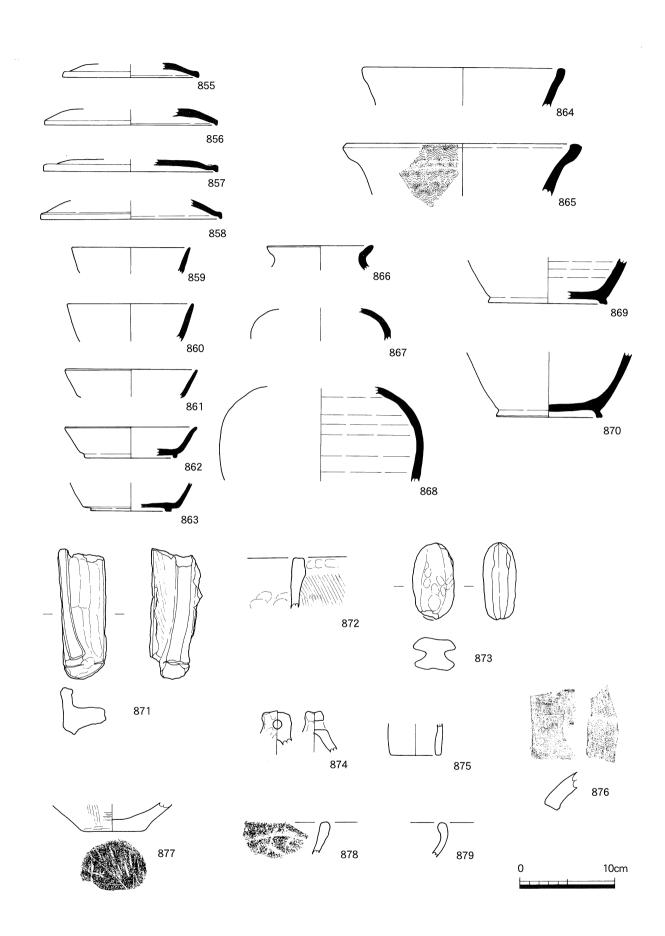
調査区中央から北西隅において検出した溝であり、SD2016を切り、SD2023に切られ、SB2004と重複する。検出した標高は $2.54 \sim 2.95$ mである。溝の方位は $N-83^\circ-W$ であり、SD2038と芯芯間距離 11.70 mの間隔で平行に延びる。溝の東端は SB2004 の東側に検出され、直線的に西方向へ延び調査区外に到る。溝の幅は $0.84 \sim 1.70$ m、検出面からの深さは $0.10 \sim 0.30$ mを 測る。断面は浅い船底形を呈し、底面のレベルは東から西に向かって比高差 0.30 mで緩やかに低くなる。埋土は 2 層であるが、灰黄色シルト質細砂が厚く堆積する。



第 116 図 SD2014 断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)



第 117 図 SD2015 断面図及び出土遺物実測図 (1) (S: 1/40. 1/4)



第 118 図 SD2015 出土遺物実測図 (2) (S: 1/4)

遺物は、土師器杯蓋(844)、同杯(845~850)、同甕(851・852)、土師質土器鍋(853・854)、須恵器杯蓋(855~858)、同杯(859~863)、同甕(864・865)、同壺(866~870)、カマド(871・872)、土錘(873)、飯蛸壺(874・875)、丸瓦(876)、弥生土器甕(877)、縄文土器浅鉢(878・879)である。

844 は低い器高で口縁端部を非常に短く下方に屈曲させる。

846 は口縁端部が急に薄くなり、内面に沈線状の凹みを巡らし、高台を有する。847 \sim 850 は口縁端部を内方に屈曲させ、内面に沈線状の凹みを巡らす。847 は内面に横方向のヘラミガキが施され、底面は回転糸切り後にナデが施される。848・849 の底面はナデが施される。

851の口縁部内面は横方向のハケが施される。

855~858は低い器高で口縁端部を非常に短く下方に屈曲させる。856の天井部外面は回転ヘラケズリ、857の天井部外面は回転ヘラキリ後にナデ、内面ヘラナデが施される。

859~863 は直線的な体部の杯で、862・863 は低い高台を有する。863 の底面は回転ヘラキリ後のナデが施される。

865 は外面に波状文を施す。

866 は小形の壺, 867 は体部上位で外面に自然釉がかかる。868 は内面にロクロ成形痕を明瞭に残す。869 は内面にロクロ成形痕を明瞭に残し、底面に回転ヘラケズリが施される。

873 は側面に溝を有する土錘である。

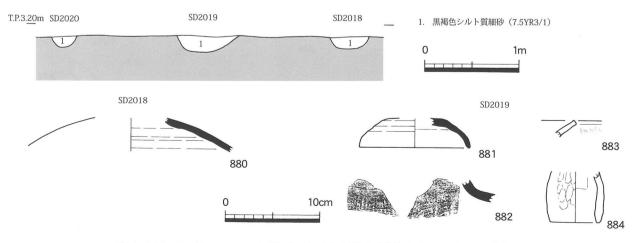
876 は凹面に布目が残り、凸面にヘラナデが施される。

877 は外面に平行目のタタキ・ヘラナデが施され、底面に木葉痕が残る。878 は山形口縁で外面に 沈線が施され、879 は大きく内湾する。

SD2018 (第 104·119 図)

調査区東側において検出した溝であり、 $SD2001 \sim 2004$ に切られ、SB2001 と重複する。検出した標高は $3.06 \sim 3.11$ mである。溝の方位はN-3° -E であり、 $SD2019 \cdot 2020$ と平行に延びる。溝の南端は SX2001 の西側に検出され、ほぼ直線的に北方向に延びる。溝の幅は $0.28 \sim 0.74$ mを測り北になるにしたがい太くなる。深さは $0.10 \sim 0.26$ mを測る。断面は浅い船底形を呈し、底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなる。溝の規模と平面形から判断すると、溝は本来南方に延びていたと考えられる。

遺物は、須恵器壺(880)であり、内面にロクロ成形痕を明瞭に残す。



第 119 図 SD2018 ~ 2020 断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)

SD2019 (第 104 · 119 図)

調査区東側において検出した溝であり、SD 2001~2004 に切られ、SB 2001 と重複する。検 出した標高は $3.04 \sim 3.11$ mである。溝の方位はN-3° -Eであり、SD 2018 と <math>SD 2020 の中 間に位置し、2本の溝と平行に延びる。溝の幅は 0.28 ~ 1.16 mを測り北になるにしたがい太くなる。 深さは 0.02 ~ 0.25 mを測る。断面は浅い船底形を呈し、底面のレベルは南から北に向かって緩やか に低くなる。

遺物は、須恵器蓋(881)、同甕 882)、土師器甕(883)、飯蛸壺(884)である。

881 は口縁部と体部の境に稜を持ち、天井部内面に黄緑色の釉がかかる。

SD2020 (第 104 · 119 図)

調査区東側において検出した溝であり、SD 2001~2003 に切られ、SB 2001 と重複する。検 出した標高は 3.06 mである。溝の方位はN-3°-Eであり、SD 2018・2019 の西側に位置し、 2本の溝と平行に延びる。溝の幅は $0.08 \sim 0.42 \text{ mを測り北になるにしたがい太くなる。深さは } 0.03$ ~ 0.19 mを測る。断面は浅い船底形を呈し、底面のレベルは南から北に緩やかに低くなる。溝の規 模と平面形から判断すると、溝は本来南方に延びていたと考えられる。

遺物は、土師器・須恵器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

SD2021 (第 104 · 120 図)

調査区東側において検出した溝であ り, SD 2020, SB 2002 と重複する。 検出した標高は 3.02 ~ 3.09 mである。 溝の方位はN-62°-Eであり、溝の 幅は 1.10 m, 深さは 0.23 mを測る。断 面は浅い逆台形を呈する。底面のレベル はほぼ平坦である。

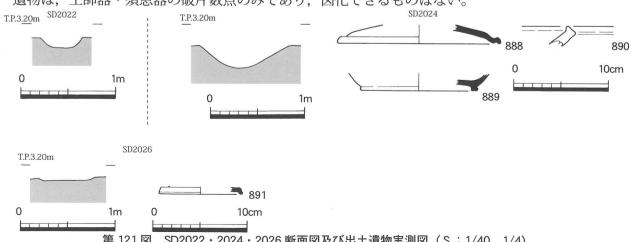
遺物は, 土師器杯 (885), カマド (886), 砥石(887)である。

SD2022 (第 104 · 121 図)

T.P.3.20m 887 886 10cm 5cm 第 120 図 SD2021 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4. 1/2)

調査区東側において検出した溝であり、SD2006に切られ、SD2026と重複する。検出した標 高は $3.02 \sim 3.11$ mである。溝の方位は $N-20^{\circ}-W$ であり、若干湾曲する。溝の幅は $0.24 \sim 0.44$ m, 深さは 0.05 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、土師器・須恵器の破片数点のみであり、図化できるものはない。



第 121 図 SD2022・2024・2026 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

SD2024 (第 104·121 図)

調査区中央において検出した溝である。検出した標高は $2.97~\mathrm{m}$ である。溝は逆「く」の字形に屈曲し、方向は南北である。溝の全長は約 $2.90~\mathrm{m}$ 、幅は $0.36\sim0.93~\mathrm{m}$ 、深さは $0.05\sim0.24~\mathrm{m}$ を測る。断面は船底形を呈する。底面は北側に向かって深くなる。

遺物は、須恵器杯蓋(888)、同杯(889)、土師質土器鍋(890)である。

888は低い器高で、口縁部はS字形に屈曲する。

SD2025 (第 104 図)

調査区中央北端において検出した溝であり、SB2010と重複する。検出した標高は 2.86 mである。 溝の方位は $N-70^\circ-W$ である。溝の幅は 0.50 m、深さは 0.11 mを測る。断面は逆台形を呈する。 遺物は、土師器・須恵器の破片数点のみであり、図化できるものはない。

SD2026 (第 104·121 図)

調査区東側において検出した溝であり、SD2027に切られ、SD2022と重複する。検出した標高は $3.03 \sim 3.11$ mである。溝の方向は南東一北西であり、若干湾曲する。溝の幅は0.62 m、深さは0.04 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、須恵器高杯(891)である。

SD2038 (第 104・122 図)

調査区中央南端から西側中央において検出した溝であり、SD2016を切り、SB2005、 $SD2012 \cdot 2040 \cdot 2042$ に切られる。検出した標高は $2.71 \sim 3.02$ mである。溝の方位は $N-83^\circ-W$ であり、SD2015 と芯芯間距離 11.70 mの間隔で平行に延びる。溝の延長線上には西接する 1 工区の SD1023 があり、同一遺構の可能性が考えられる。溝の幅は $0.82 \sim 1.32$ m、検出面からの深さは $0.10 \sim 0.18$ mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、底面のレベルは東から西に向かって比高差0.34 mで緩やかに低くなる。埋土は灰黄色シルト質細砂の単一層である。

遺物は、土師器杯(892)、同皿(893 \sim 898)、同甕(899 \sim 903)、須恵器杯蓋(904 \sim 906)、同杯(907 \sim 915)、同壺(916)、同甕(917)である。

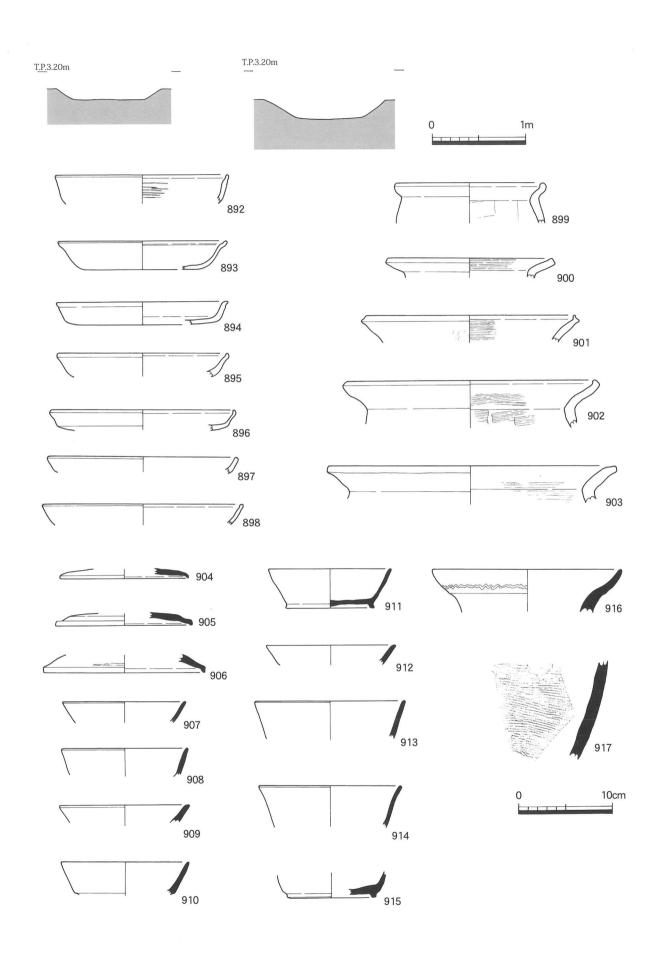
892 は口縁端部を外反し、底面にナデが施される。893 \sim 896 は口縁端部を内方に屈曲させ、内面に沈線状の凹みを巡らす。893・895・896 は内外面にナデが施され、894 は外面にナデ、内面にヘラミガキが施される。897 は内湾気味の体部から口縁部に到る。898 は口縁端部内面に僅かな凹みを巡らす。

899 は口縁端部を丸くおさめ上方に若干拡張し、体部内面に板ナデが施される。900 は口縁端部を角張らせ、口縁部内面に横方向のハケが施される。901 は口縁端部を細く摘み上げ、口縁部外面に縦方向のハケ後にヨコナデ、内面に横方向のハケが施される。902 は口縁端部を上方に拡張し、口縁部内面にヨコナデ・粗いハケ、体部内面に横方向の粗いハケが施される。903 は口縁部にナデ、体部内面に横方向のハケが施される。

904~906 は低い器高で口縁端部を非常に短く下方に屈曲させる。905 は口縁部と天井部の境が不明瞭であり、天井部外面にナデが施される。904・906 は口縁部と天井部の境に明瞭な稜を持ち、906 は外面に溶着痕がある。

 $907 \sim 914$ は直線的な体部であり、911 の底面は回転ヘラキリ後にナデが施される。915 の底面はナデが施される。

916 は外面に波状文1条. 917 の外面は平行目のタタキ,内面は当て具痕が残される。



第 122 図 SD2038 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

SD2040 (第 104 · 123 図)

調査区南西側において検出した溝であり、SD2016を切り、SD2038と重複する。検出した標高は 3.00 mである。溝の方位はN-7° -Eである。幅は 0.40 m、深さは 0.07 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は, 須恵器壺 (918), 同杯 (919) である。

T.P.3.20m - 918 0 1m 0 10cm

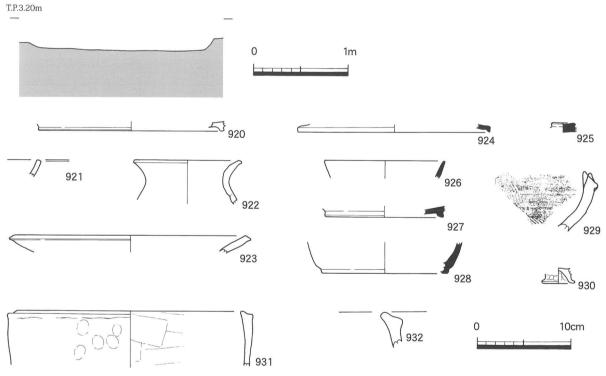
第 123 図 SD2040 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

SD2042 (第 104·124 図)

調査区南西側において検出した溝であり、SD2016を切り、SD2038と重複する。検出した標高は 2.95 mである。溝の方位はN-5° -Eである。幅は 1.00 m、深さは 0.10 mを測る。断面は 逆台形を呈する。

遺物は, 土師器皿 (920), 同杯 (921), 同甕 (922·923), 須恵器杯蓋 (924·925), 同杯 (926·927), 同甕 (928), 陶器擂鉢 (929), 製塩土器 (930), 土師質土器足釜 (931·932) である。 920 は低い高台が付く。922 は小形の甕で, 口縁部は外反する。

924 は口縁端部を非常に短く下方に屈曲させる。929 は備前焼である。



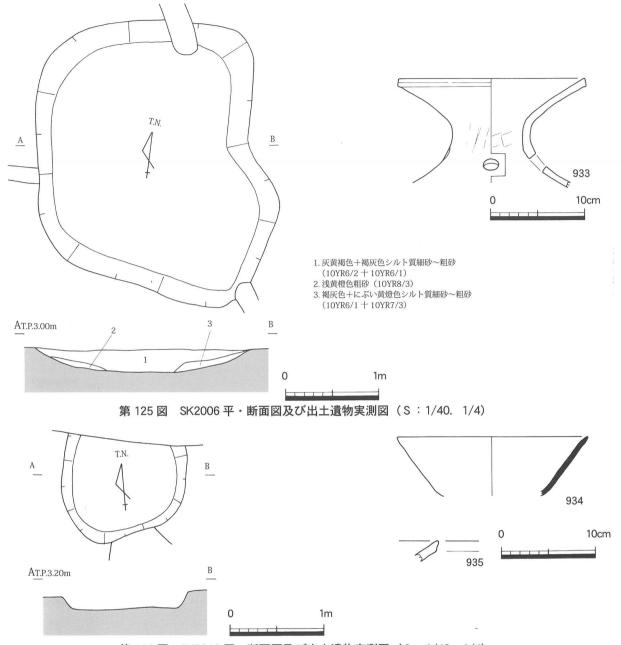
第 124 図 SD2042 断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)

(3) 土坑

SK2006 (第 125 図)

調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり、SD2016を切っている。検出した標高は2.86 mである。平面形は不整な隅丸方形を呈し、南東隅が大きく拡張する。規模は南北方向の長軸2.85 m、東西方向の短軸2.27 m、検出面からの深さ0.26 mを測る。断面は船底形を呈し、底面は平坦である。埋土は3層である。

図化できた遺物は、弥生土器器台(933)のみであるが、土師器・須恵器の小片が出土している。 933 は脚部に4個の円孔を有する。



第 126 図 SK2012 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40.1/4)

SK2012 (第 126 図)

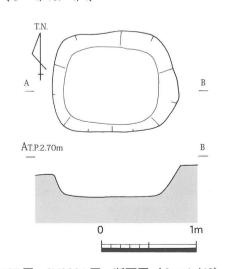
調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり、SD 2015 に切られ、SB 2004 と重複する。検出した標高は 2.94 mである。平面形は不整な円形を呈し、規模は東西方向の直径 1.32 m、深さ 0.17 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は, 須恵器鉢 (934), 土師質土器鍋 (935) である。

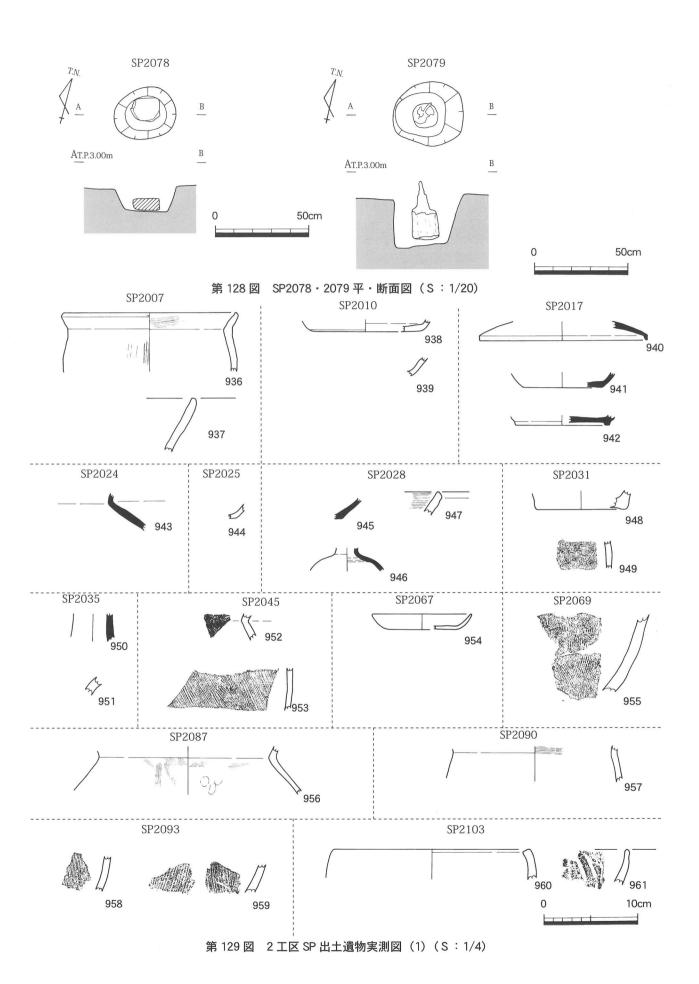
SK2021 (第127図)

調査区西端中央において検出した土坑である。検出した標高は 2.53 mである。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西方向の長軸 1.33 m、南北方向の短軸 1.04 m、検出面からの深さ 0.25 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、須恵器・土師質土器の小片数点のみである。



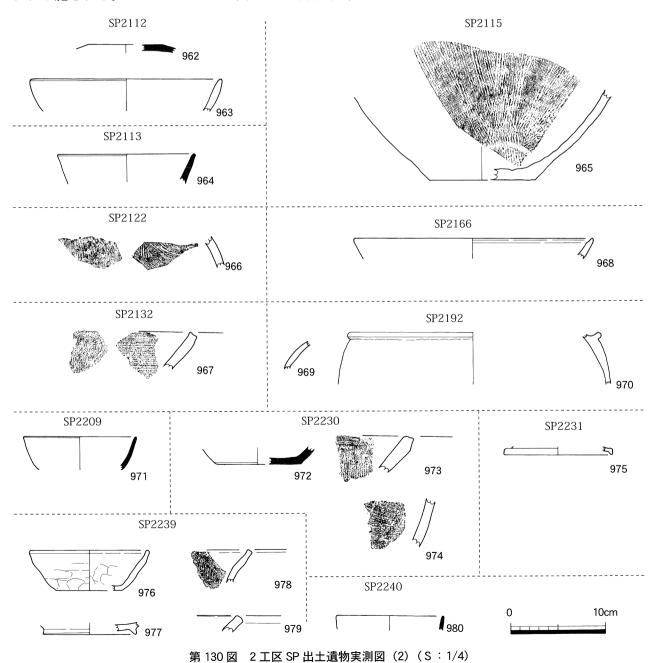
第 127 図 SK2021 平・断面図 (S:1/40)



- 94 -

(4) 柱穴(第128~132図)

936・937 は S P 2007 出土である。936 は土師器甕で体部外面に縦方向のハケ、口縁部内面に横方向のハケが施される。937 は縄文土器深鉢である。938・939 は S P 2010 出土の土師器杯である。940~942 は S P 2017 出土で、940 は須恵器杯蓋であり、口縁端部を下方に短く屈曲する。941・942 は須恵器杯である。943 は S P 2024 出土の須恵器壺で、外面に自然釉がかかる。944 は S P 2025 出土の土師器杯である。945~947 は S P 2028 出土で、945 は須恵器杯、946 は須恵器の小形壺で内面にロクロ成形痕を残し、947 は土師器甕で内面に横方向のハケが施される。948・949 は S P 2031 出土で、948 は弥生土器甕、949 は土師器甕で外面にハケが施される。950・951・982 は S P 2035 出土で、950 は須恵器高杯、951 は土師器甕、982 は断面四角形の鉄釘である。952・953 は S P 2045 出土の土師器甕で、外面に斜め方向のハケが施される。954 は S P 2067 出土の土師器で、外面にハケが施される。957 は S P 2090 出土の土が施される。956 は S P 2087 出土の土師器甕で、外面にハケが施される。957 は S P 2090 出



土の土師器甕である。958・959・984 は S P 2093 出土で、958・959 は土師器甕であり、984 は サヌカイト製の楔形石器で両面から丁寧な加工が行われる。960・961 は S P 2103 出土で、960 は 土師質土器鉢、961 は縄文土器浅鉢で外面に沈線による模様がある。

962・963 は S P 2112 出土で、962 は須恵器杯蓋、963 は土師器杯である。964 は S P 2113 出土の須恵器杯である。965 は S P 2115 出土の備前焼である。966 は S P 2122 出土の土師器甕で、内外面にハケが施される。967 は S P 2132 出土の土師質土器鍋で、口縁部外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケが施される。968 は S P 2166 出土の土師器甕である。969・970 は S P 2192 出土で、969 は土師器甕の口縁部片、970 は土師質土器足釜で、上向き気味の鍔が付く。971 は S P 2209 出土の須恵器杯である。972~974 は S P 2230 出土で、972 は須恵器杯で底面にナデが施される。973 は土師質土器甕で、外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケが施される。974 は土師器甕で、外面に平行タタキ、内面に板ナデが施される。975・983 は S P 2231 出土で、975 は須恵器蓋で口縁端部を下方に短く屈曲する。983 は銭の破片で両面とも錆が著しい。976~979 は S P 2239 出土で、976 は土師器杯で体部内外面にヘラケズリが施される。977 は同杯、978 は同甕で外面に縦方向のハケが施される。979 は土師質土器鍋である。980 は S P 2240 出土の須恵器杯である。981 は S P 2079 出土の柱材であり、現存長 34.5 cmあるが上部の 16 cmは芯のみである。柱材の基

第 131 図 2 工区 SP 出土遺物実測図 (3) (S: 1/40. 1/4)

SP2163 (第 132 図)

調査区南東側において検出した柱穴であり、SD 2028に切られる。検出した標高は3.08 mである。柱穴の平面形は不整な楕円形を呈し、北東隅が角張る。規模は南北方向の長軸0.85 m、東西方向の短軸0.65 m、検出面からの深さ0.20 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。多量の土器が南北方向から流れ込んだような状態で出土した。

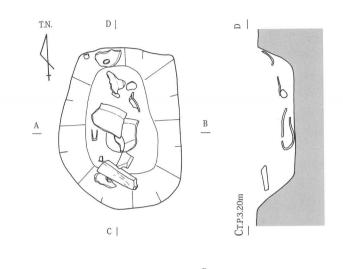
遺物は, 須恵器杯蓋 (985・986), 土師器杯 (987), 同甕 (988~990), 同鍋 (991・992) である。

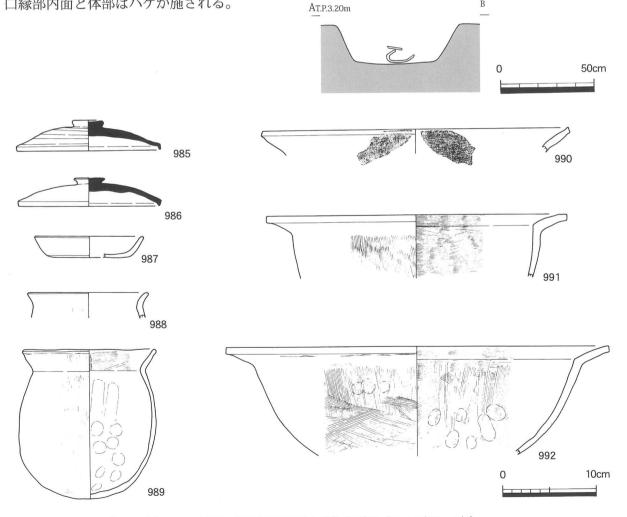
985・986 は宝珠形の摘みを持ち、口縁端部を下方に短く屈曲する。985 の天井部内外面は回転ヘラケズリが施される。986 は天井部外面に回転ヘラケズリ、内面にナデが施される。

987 は内外面にナデが施される。

989 は丸底で口縁部内外面と体部外面に 10本1単位のハケが施される。体部内面は指頭圧痕・ヘラナデが施される。990は口縁部内外面にハケが施される。

991・992 は内湾する体部から口縁部が屈曲し大きく外方に広がる。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面と体部はハケが施される。





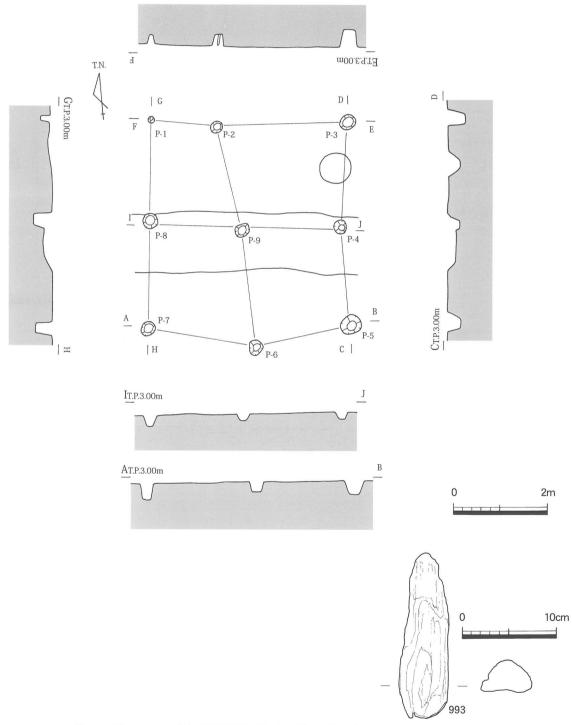
第 132 図 SP2163 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/20. 1/4)

3 江戸時代

(1) 掘立柱建物跡

SB2005 (第133図)

調査区南西隅において検出した総柱の掘立柱建物跡であり、SD 2038を切る。検出した標高は 2.80 \sim 2.92 mである。規模は東西 2間、南北 2間(4.68×4.70 m)であり、平面形は正方形である。しかし、北列側柱のP-2 は中央より西側に位置し、南列側柱のP-6 はP-5 とP-7 を結ぶ線より南側に位置する。 $P-1 \cdot 2$ の芯芯間距離は 1.45 m、 $P-2 \cdot 3$ の芯芯間距離は 2.80 mを測り、南列側柱の芯芯間距離は 2.10 \sim 2.30 mを測る。建物



第 133 図 SB2005 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80. 1/4)

の主軸方位はN-3°-Eである。柱穴の平面形は円形を呈し、直径 0.15 mのP-1を除いた他の柱穴の直径は $0.25 \sim 0.45 \text{ m}$ を測る。検出面からの深さは $0.20 \sim 0.40 \text{ m}$ を測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。P-2の底面直上に柱材(993)が直立した状態で出土した。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

遺物は、柱材(993)と数点の磁器片である。

SB2006 (第 134 図)

調査区中央南端において検出した掘立柱建物跡であり、SD 2012・2033・2035 と重複する。検出した標高は $2.96 \sim 3.01$ mである。規模は東西 2 間,南北 1 間(5.42×4.62 m)であり,南列側柱東端の P-4 は南側が調査区外にかかる。東西方向の芯芯間距離は 2.50 m,南北の芯芯間距離は 3.50 mを測るが,P-1・ 2 間は 2.05 mである。建物の主軸方位は $N-88^\circ$ - Wである。柱穴の平面形は不整な円形・楕円形を呈し,直径は $0.45 \sim 0.70$ mを測る。検出面からの深さは $0.28 \sim 0.60$ mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。 P-2・ 6 の底面直上に根石が検出され,P-1 には柱材(997)が直立した状態で出土した。

遺物は、土師器皿 (994)、磁器碗 (995)、同皿 (996)、柱材 (997) である。

994 は直線的な体部から口縁部にいたる。

995 は内外面に草花文の染付けがある。996 は肥前系であり、見込みに蛇ノ目釉ハギがあり、底部は蛇ノ目高台である。

997 は現存長 33.3 cmであり、基部を全方向から加工し、擦痕が明瞭に残る。側面には枝払いが行われている。

SB2007 (第 135 図)

調査区南東端において検出した掘立柱建物跡であり、SD2019を切り、SK2014と重複する。検出した標高は 3.06 mである。規模は東西 4 間、南北 2 間(4.46×3.28 m)であり、建物の南東側は調査区外にかかる。西列側柱のP-9 はP-1 とP-8を結ぶ線より西側に位置する。東西方向の芯芯間距離は $0.75 \sim 1.40$ m、南北の芯芯間距離は 1.45 mを測る。建物の主軸方位はN-84° - Wである。柱穴の平面形は不整な円形を呈し、直径は $0.30 \sim 0.55$ mを測る。検出面からの深さは $0.05 \sim 0.35$ mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

図化した遺物は、須恵器ハソウ(998)、同杯(999)であるが、数点の磁器破片も出土した。

(2) 溝

SD2001 (第 104・136 図)

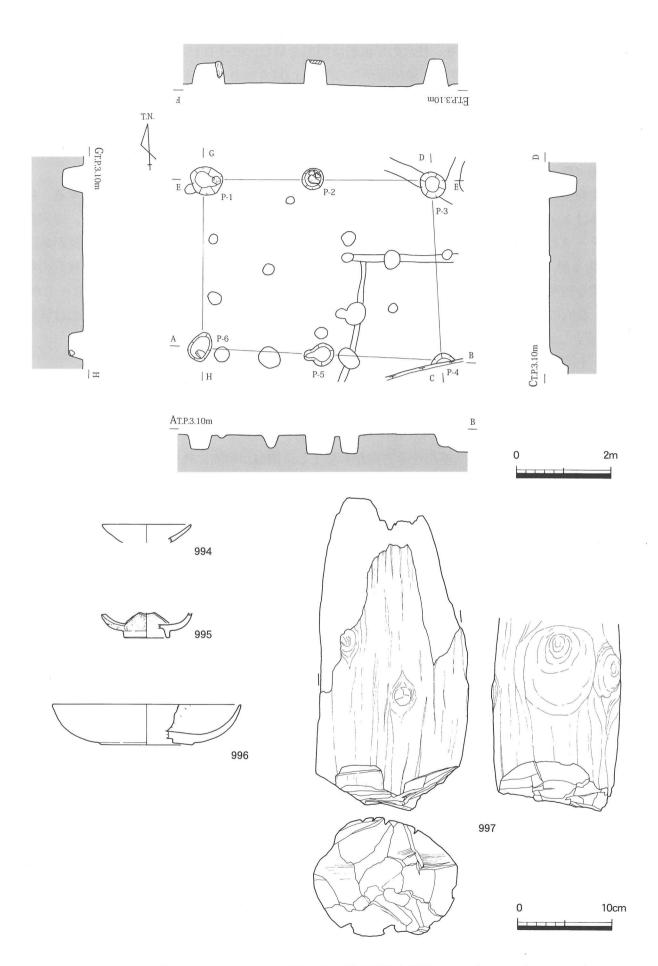
調査区北東隅において検出した溝であり、SB2001, $SD2018 \sim 2020$ を切る。検出した標高は $3.02 \sim 3.14$ mである。溝の方位はN-82° -Wであり、東接する 5 工区のSD5002 が本遺構の延長線上にあるが、出土遺物の時期が違うため別遺構とする。溝の幅は 0.70 m、検出面からの深さは $0.08 \sim 0.13$ mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、底面は東から西に低くなる。

遺物は, 陶器蓋(1000), 同灯明具(1001) である。1000 は屋島焼で内面に「屋島」「小」の刻印がある。1001 は京・信楽系である。

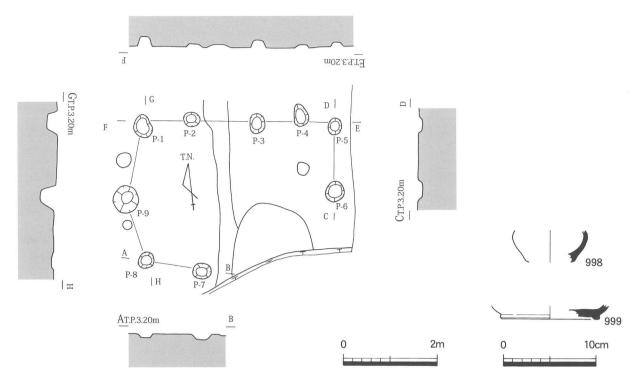
SD2002 (第 104・136 図)

調査区北東隅において検出した溝であり、SD2001の南側に平行する。検出した標高は $3.09 \sim 3.14$ mである。溝の方位は $N-82^\circ-W$ である。溝の幅は0.24 m、検出面からの深さは0.07 mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、底面は東から西に低くなる。

遺物は、数点の磁器小片のみである。



第 134 図 SB2006 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80. 1/4)



第 135 図 SB2007 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80. 1/4)

SD2003 (第 104 · 136 図)

調査区北東隅において検出した溝であり、 $SD2001 \cdot 2002$ の南側に平行する。検出した標高は 3.09 mである。溝の方位はN-82° -Wである。溝の幅は 0.20 m,検出面からの深さは 0.05 mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、底面は東から西に低くなる。

遺物は, 数点の磁器小片のみである。

SD2004 (第 104 図)

調査区北東側において検出した溝である。検出した標高は $3.05~\mathrm{m}$ である。溝の方位は $\mathrm{N}-60^\circ-60^\circ$ Wである。溝の幅は $0.17~\mathrm{m}$,深さは $0.04~\mathrm{m}$ を測る。遺物はない。

SD2005 (第 104 図)

調査区北東隅において検出した溝であるが、部分的な検出であり規模は不明である。検出した標高は 3.14 mである。遺物はない。

SD2006 (第 104·136 図)

調査区北側中央において検出した溝である。検出した標高は 3.05~mである。溝の方位は $N-97^\circ$ -Wである。溝の幅は 0.90~m , 検出面からの深さは 0.10~mを測る。

遺物は、数点の磁器小片のみである。

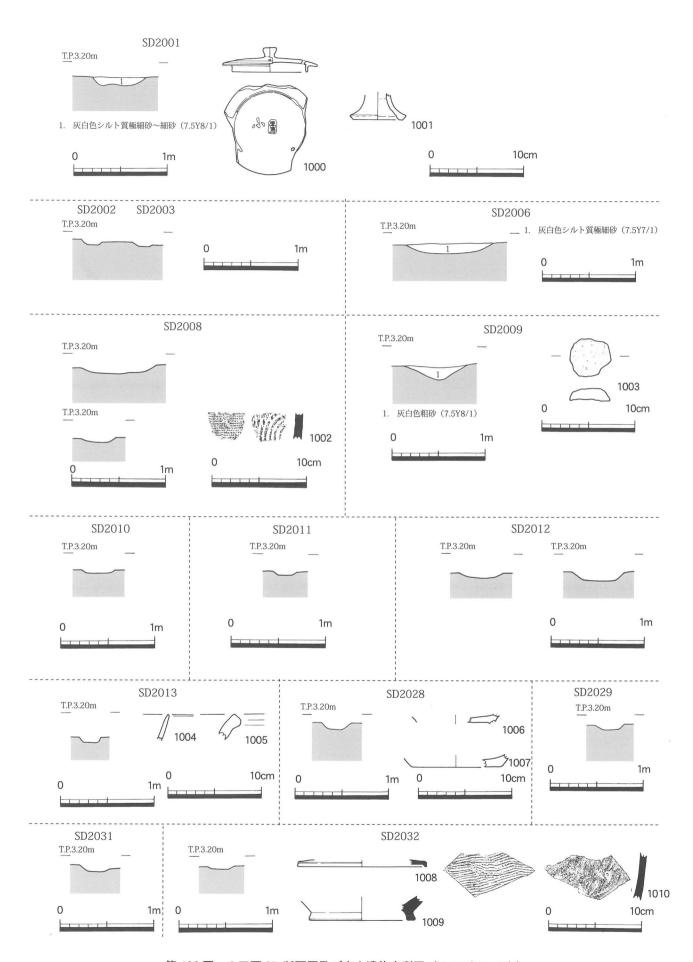
SD2007 (第 104 図)

調査区北東側において検出した溝である。検出した標高は $3.05~\mathrm{m}$ である。溝は「 L 」字形である。幅は $0.20~\mathrm{m}$,深さは $0.06~\mathrm{m}$ を測る。遺物はない。

SD2008 (第 104 · 136 図)

調査区中央東寄りにおいて検出した溝であり、 $SK2003 \cdot 2004$ に切られる。検出した標高は $3.00 \sim 3.07$ mである。溝の方位は $N-10^\circ-E$ である。溝の幅は $0.15 \sim 0.80$ m、深さは $0.05 \sim 0.09$ mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は、須恵器甕(1002)、数点の磁器小片である。



第 136 図 2 工区 SD 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

SD2009 (第 104 · 136 図)

調査区中央東寄りにおいて検出した溝であり、SB2011を切る。検出した標高は $2.90\sim3.01~\mathrm{m}$ である。溝の方位はN-6°-Eであり、北側は直線、南端は直角に曲がる。溝の幅は $0.14\sim0.72~\mathrm{m}$ 、深さは $0.10~\mathrm{m}$ を測る。断面は船底形を呈し、底面は北に向かって下がる。

遺物は、軽石(1003)と数点の磁器小片である。

SD2010(第104·136図)

調査区中央において検出した溝であり、南端は S D 2031・2032 と合流する。検出した標高は 3.01 mである。溝の方位は N - 8 $^{\circ}$ - E である。溝の幅は 0.30 m、深さは 0.03 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は、数点の磁器小片のみである。

SD2011 (第 104・136 図)

調査区中央において検出した溝である。検出した標高は 3.01~mである。溝の方位はN-5~-Eである。溝の幅は $0.12 \sim 0.30~\text{m}$, 深さは 0.03~mを測る。断面は逆台形を呈し,底面は平坦である。遺物は、数点の磁器小片のみである。

SD2012(第104·136 図)

調査区中央南側において検出した溝であり、南から北に延び、東方に直角に曲がる。東端は S D 2010・2032 と合流する。検出した標高は $3.01~\rm m$ である。溝の方位は N $-8~\rm e^{-1}$ E である。溝の幅は $0.28~\rm e^{-1}$ 0.05 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は、数点の磁器小片のみである。

SD2013 (第 104 · 136 図)

調査区中央において検出した溝であり、2ヶ所途切れる部分がある。検出した標高は $2.86\sim3.02$ mである。溝の方位は $N-90^\circ$ -Wである。溝の幅は $0.15\sim0.50$ m、深さは0.04 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は東から西に向かって緩やかに低くなる。

遺物は、京・信楽系陶器碗(1004)、土師質土器鍋(1005)である。

SD2017 (第 104 図)

調査区中央において検出した溝である。検出した標高は $2.97~\mathrm{m}$ である。溝の方位は $\mathrm{N}-87^{\circ}~\mathrm{-W}$ である。溝の幅は $0.32~\mathrm{m}$ 、深さは $0.04~\mathrm{m}$ を測る。断面は逆台形を呈する。遺物はない。

SD2023 (第 104 図)

調査区北西側において検出した溝であり、1 ヶ所途切れる部分がある。溝は西から東に延びほぼ直角に曲がり北方に延びる。検出した標高は $2.57 \sim 2.62$ mである。溝の幅は0.26 m、深さは0.05 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は西に向かって緩やかに低くなる。

遺物は出土していない。

SD2027 ~ **2037 · 2039 · 2041** (第 104 · 136 図)

調査区南東隅〜中央南端において検出した溝である。検出した標高は $2.95 \sim 3.10~\text{m}$ である。溝の方向は南北方向と東西方向であり,合流する溝が多い。溝の規模はほぼ同一であり,幅は $0.12 \sim 0.32~\text{m}$, 深さは $0.02 \sim 0.05~\text{m}$ を測る。断面は逆台形を呈する。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

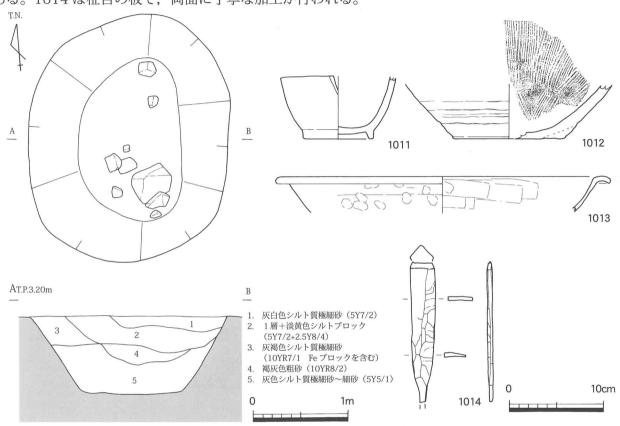
図化した遺物は、SD 2028の土師器杯(1006), 弥生土器甕(1007), SD 2032の須恵器杯蓋(1008), 同底部(1009), 同甕(1010)であるが, その他の遺物としては陶磁器の小片が出土している。

(3) 井戸

SE2001 (第 137 図)

調査区中央やや東寄りにおいて検出した井戸である。検出した標高は3.04 mである。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は南北方向の長軸2.64 m、東西方向の短軸2.10 m、検出面からの深さ0.82 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は5層であり、拳大~人頭大の石が多量に出土した。

遺物は、肥前系磁器瓶 (1011), 備前焼擂鉢 (1012), 土師質土器焙烙 (1013), 斎串 (1014) である。1014 は柾目の板で、両面に丁寧な加工が行われる。



第 137 図 SE2001 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/40. 1/4)

SE2002 (第 138 · 139 図)

調査区中央北東寄りにおいて検出した井戸であり、SK2004に切られる。検出した標高は2.96 mである。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は南北方向の長軸5.90 m、東西方向の短軸2.90 m、検出面からの深さ0.70 mを測る。東西方向の断面は船底形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は6層に分けられ、レンズ状堆積である。底面中央やや南寄りに基部を加工した杭(1020)が直立した状態で出土した。

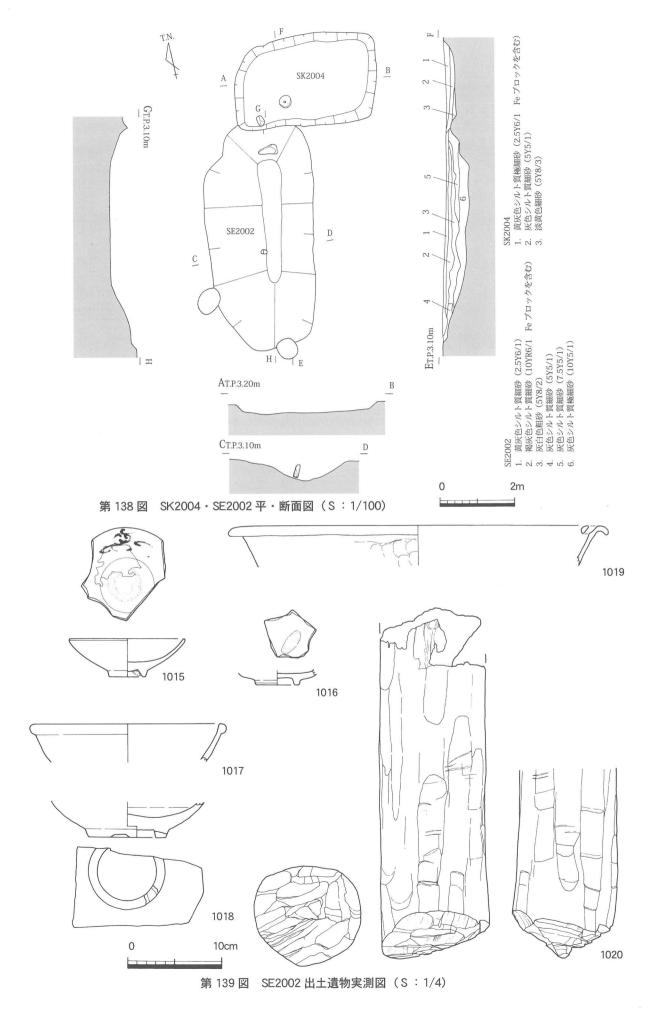
遺物は,肥前系磁器碗 (1015),同皿 (1016),陶器行平鍋 (1017),同皿 (1018),土師質土器 焙烙 (1019),杭 (1020)である。

1015 は見込みと高台に砂目,1016 は見込みに砂目がある。1018 は高台に切り込みがある。1020 は基部を3方向から加工し、側面にも加工痕が見られる。

(4) 土坑

SK2001 (第140図)

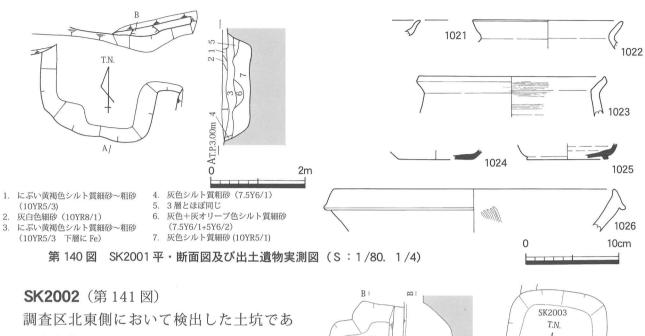
調査区北東隅において検出した土坑である。検出した標高は 3.10 mである。平面形は不整な隅丸



- 105 -

方形を呈し、規模は南北方向 2.02 m以上、東西方向 2.55 m、検出面からの深さ 0.60 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は 7 層である。

図化した遺物は、土師器皿(1021)、同甕(1022・1023)、須恵器杯(1024・1025)、備前焼擂鉢(1026)であるが、その他に遺物は陶磁器・染付の小片がある。



調査区北東側において検出した土坑であり、東半分は調査区外である。検出した標高は3.10 mである。平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は南北方向2.44 m、東西方向1.27 m以上、検出面からの深さ0.60 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は,数点の陶磁器小片のみである。

SK2003 (第 141 図)

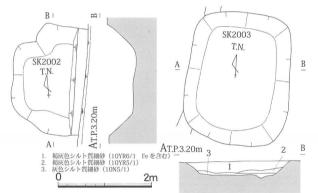
調査区中央東寄りにおいて検出した土坑であり、SE 2001の東側である。検出した標高は3.05 mである。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北方向の長軸2.82 m、東西方向の短軸1.20 m、検出面からの深さ0.30 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は, 数点の陶磁器小片のみである。

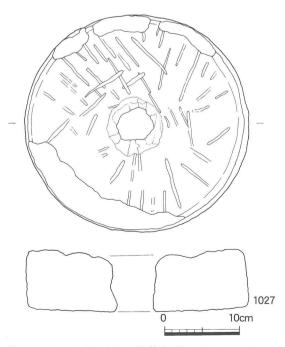
SK2004 (第 138·142 図)

調査区中央北端において検出した土坑であり、S E 2002を切る。検出した標高は3.00 mである。平 面形は長方形を呈し、規模は東西の長軸3.82 m、南 北の短軸2.44 m、深さ0.32 mを測る。断面は逆台 形を呈し、底面は平坦である。

遺物は,集塊凝灰岩製の石臼 (1027),数点の陶磁器小片である。



第 141 図 SK2002・2003 平・断面図 (S: 1/80)

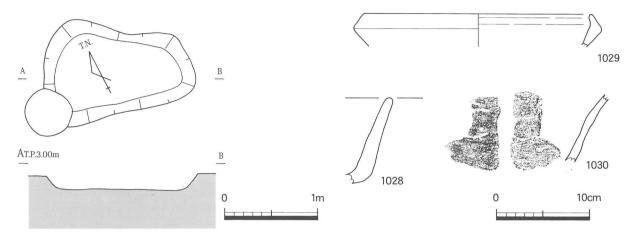


第 142 図 SK2004 出土遺物実測図(S:1/5)

SK2010 (第 143 図)

調査区中央北端において検出した土坑である。検出した標高は 2.90 mである。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸 1.63 m、南北方向の短軸 1.12 m、検出面からの深さ 0.19 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は, 瓦質土器鉢(1028), 縄文土器浅鉢(1029), 同深鉢(1030) である。



第 143 図 SK2010 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40. 1/4)

SK2014第144図)

調査区南東隅において検出した土坑であり、南半分は調査区域外である。検出した標高は 3.05 m である。平面形は不整な円形を呈し、規模は東西方向 1.80 m、南北方向 1.00 m以上、検出面からの深さ 0.39 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は、数点の陶磁器小片のみである。

SK2015 (第 144 図)

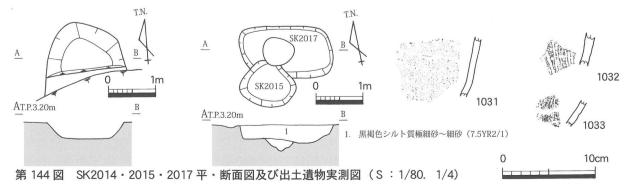
調査区南東側において検出した土坑であり、S K 2017 と重複する。検出した標高は 3.10 mである。 平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸 1.22 m、南北方向の短軸 0.98 m、検出面から の深さ 0.10 mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。

遺物は、数点の陶磁器小片のみである。

SK2017 (第 144 図)

調査区南東側において検出した土坑であり, S K 2015 と重複する。検出した標高は 3.10 mである。 平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は東西方向の長軸 2.03 m、南北方向の短軸 1.10 m、検出面からの深さ 0.40 mを測る。断面は逆台形を呈する。

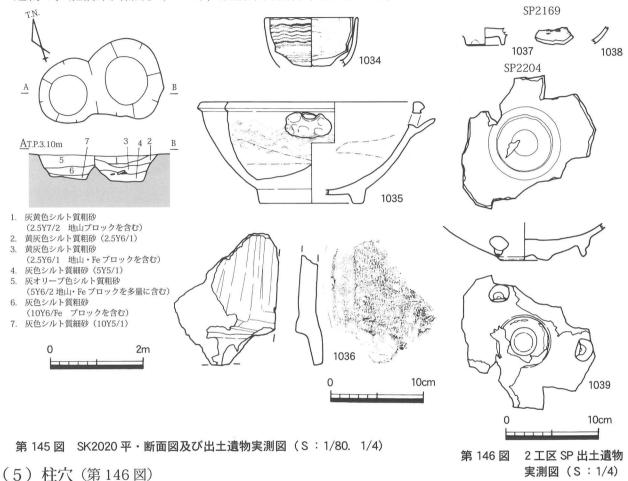
遺物は, 土師質土器甕 (1031), 備前焼擂鉢 (1032), 縄文土器浅鉢 (1033) である。1033 は外面に沈線による模様がある。



SK2020 (第 145 図)

調査区中央において検出した土坑であり、2個の土坑が重なる。土層観察によれば東側の土坑が西側の土坑を切っている。検出した標高は $2.99~\mathrm{m}$ である。平面形は円形を呈し、東側の土坑は直径 $1.77~\mathrm{m}$, 西側は $1.40~\mathrm{m}$ を測り、深さは共に $0.60~\mathrm{m}$ を測る。

遺物は、肥前系陶器碗(1034)、肥前系陶器行平鍋(1035)、丸瓦(1036)である。



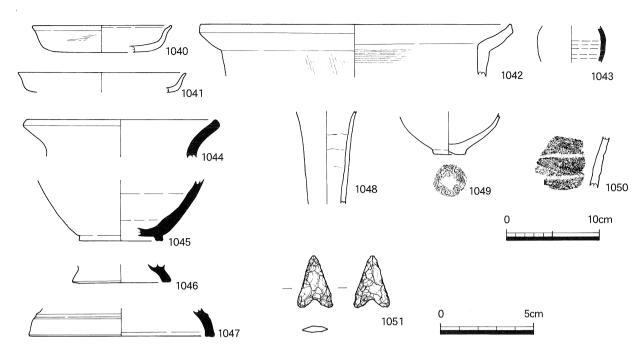
1037・1038 は S P 2196 より出土した肥前系磁器碗であり、1039 は S P 2204 より出土した肥前系磁器大皿であり、外面に形骸化した脚が付き、見込みに蛇ノ目釉ハギ・溶着痕がある。

4 2工区包含層出土遺物

1040・1041 は土師器皿であり、1040 は口縁部が外方に屈曲し体部外面にヘラミガキ・ナデが施される。1042 は土師質土器鍋で、体部にハケが施される。1043 は須恵器小形壺、1044 は同甕、1045・1046 は同壺である。1047 は同高杯であり、外面に沈線を巡らす。1048 は弥生土器細頸壺で、内面に接合痕が残る。1049 は同鉢で、底面に木葉痕がある。1050 は縄文土器深鉢で、沈線による模様が施される。1051 はサヌカイト製の凹基式石鏃である。

3.3工区

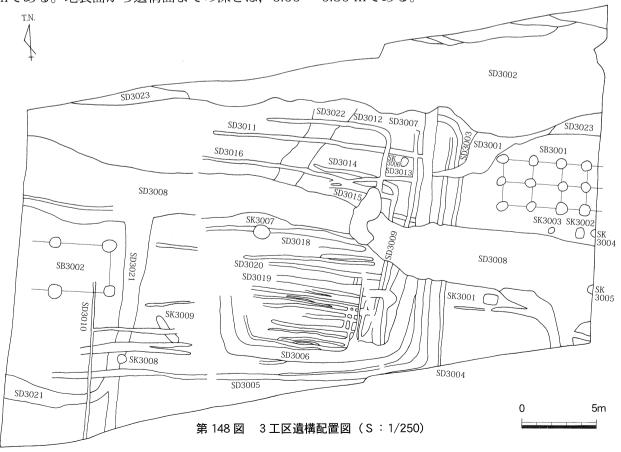
3工区は本遺跡の東端に位置し、(財)香川県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した小山・南谷遺跡と隣接する。調査区の平面形は長方形を呈し、東西方向の全長は約40.00 m、幅は約23.00 mである。調査区中央の南北軸座標値はX=146.810、東西軸座標値はY=55.870である。西端は宅



第 147 図 2 工区包含層出土遺物実測図 (S: 1/4. 1/2)

地への進入道路に,東端は主要地方道塩江屋島西線(通称,新田街道)に区画される。遺構面は1面であり,地山を検出面とする。遺構の時期は古代と江戸時代に比定され,掘立柱建物跡や溝・土坑等の多数の遺構が調査区全域に検出された。

調査区全体の土層は、上層から現水田耕作土・7枚の近世条里型水田・遺構検出面の地山が堆積する。 検出面のレベルは東から西に向かって緩やかに低くなっており、東端の標高は $4.70~\mathrm{m}$,西端では $4.00~\mathrm{m}$ である。地表面から遺構面までの深さは、 $0.60\sim0.80~\mathrm{m}$ である。



1 古代

(1) 掘立柱建物跡

SB3001 (第 150 · 151 図)

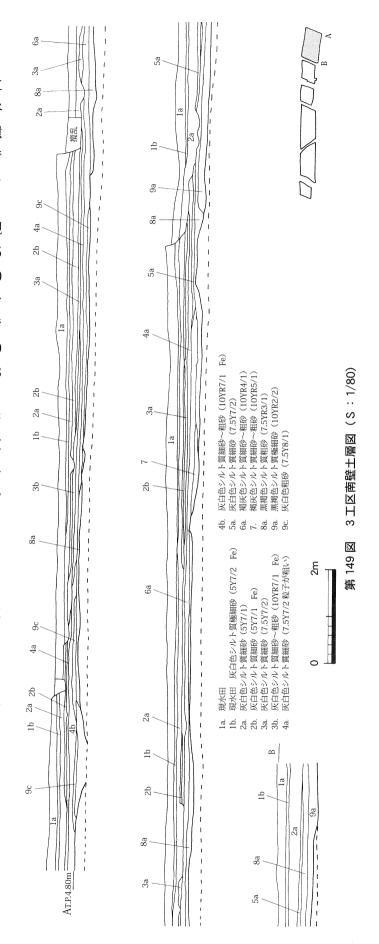
調査区東端において検出した総柱の掘立 柱建物跡である。本建物跡は、小山・南谷 遺跡のSB701と同一遺構であり、両遺 跡の平面図を合体させたのが第 151 図で ある。柱穴は18個検出し、P-1~4・ 10~17 は本遺跡で検出した柱穴である。 検出した標高は 4.70~ 4.80 mである。規 模は、東西5間×南北2間(9.80×3.75 m)である。東西方向の芯芯間距離は 1.50 ~ 2.00 m, 南北の芯芯間距離は 1.75 mを 測る。建物の主軸方位はN-94°-Wで ある。柱穴の平面形は円形を呈し,直径0.60 ~ 0.85 mを測る。検出面からの深さは 0.38 ~ 0.55 mを測る。 $P-1 \sim 4 \cdot 10 \cdot 12 \cdot$ 16・17の上面には粘土を多量に含む土層 が検出された。その位置は底面にある小穴 とほぼ同一である。底面の柱痕と考えられ る小穴はP-1・3~12・14~16・18 で検出された。

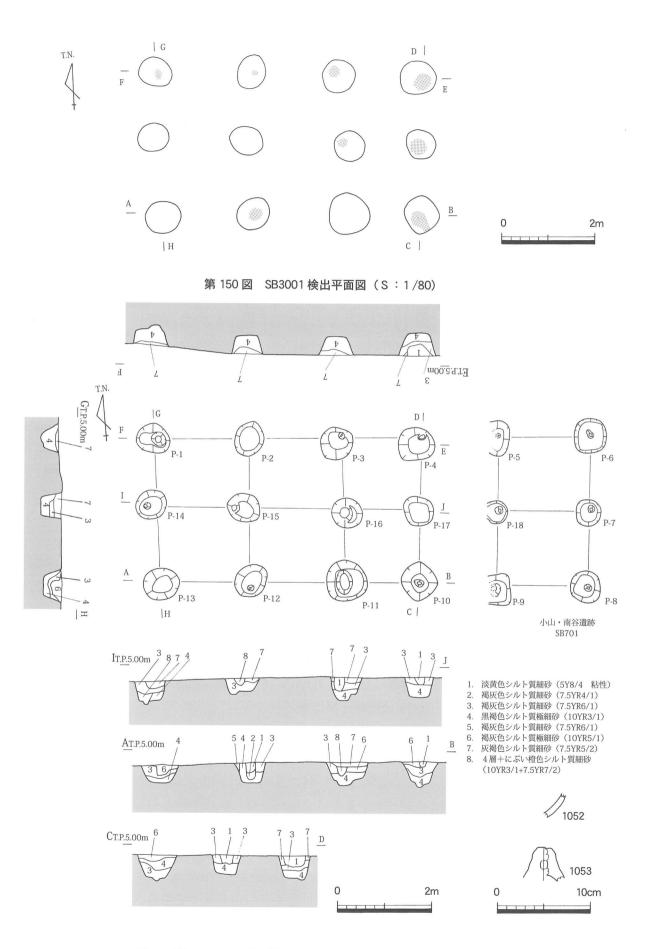
遺物は, 土師器杯 (1052), 飯蛸壺 (1053) である。

SB3002 (第 152 図)

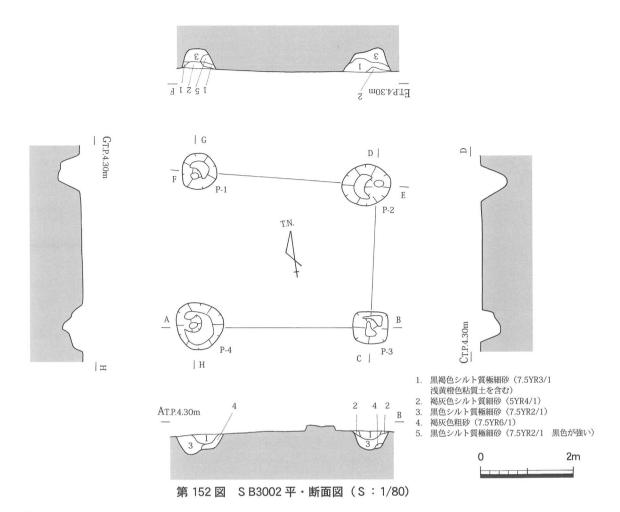
調査区西側中央において検出した掘立柱 建物跡であり、SD3008・3021とSD 6002により方形に区画された内側に位置 する。検出した標高は4.02~4.11 mであ る。西側は調査区外となるため、掘立柱建 物跡の全容は不明である。検出した規模は 東西1×南北1間(4.50×4.30 m)であ るが、西側に広がる可能性が高い。東西の 芯芯間距離は3.90 m、南北3.15 mを測 る。建物の主軸方位はN-84°-Wであ る。柱穴は円形を呈し、直径0.75~1.00 m、 深さ0.40~0.54 mを測る。全ての柱穴の 底面に柱痕の小穴が検出された。

遺物は出土していない。





第 151 図 SB3001 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/80. 1/4)



(2) 溝

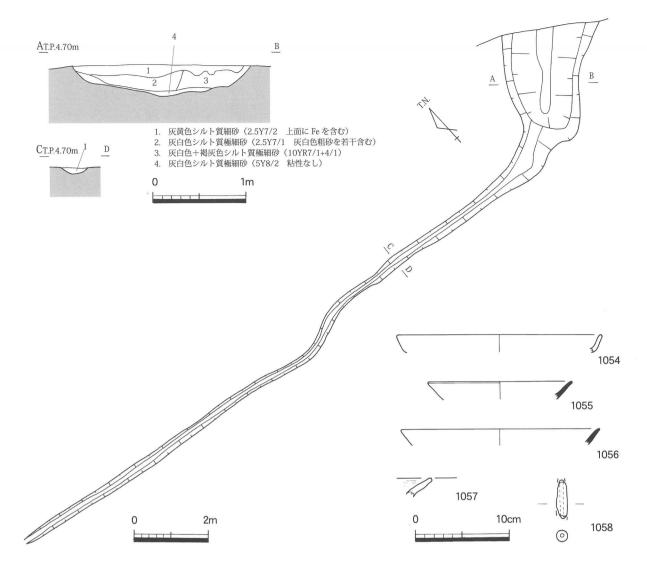
SD3001 (第 153 図)

調査区中央から東側中央において検出した溝であり、 $SD3003 \sim 3008 \cdot 3011 \sim 3016$ を切り、SD3002 と重複する。検出した標高は $4.40 \sim 4.55$ mである。溝の方位は $N-100^\circ-E$ であり、若干蛇行する。SD3002 と接する部分は土坑状になっている。溝の幅は 0.30 m、検出面からの深さは $0.05 \sim 0.14$ mを測り、土坑状部分は幅 2.24 m、深さ 0.40 mである。溝部の断面は浅い船底形を呈し、底面のレベルは土坑状部分に向かって緩やかに下がる。

遺物は, 土師器皿 (1054), 須恵器杯 (1055・1056), 土師器甕 (1057), 土錘 (1058) である。 1057 の内面はハケが施される。 1058 は管状土錘である。

SD3002 (第 154 ~ 158 図)

調査区中央北端から北東隅において検出した溝であり、SD3023を切る。本溝は小山・南谷遺跡のSD701と同一遺構である。検出した標高は $4.50\sim4.60$ mである。溝の方位は $N-92^\circ-E$ であり、SB3001の東西軸方向と一致する。このような溝と掘立柱建物跡との位置関係は小山・南谷遺跡においても同様であり、「流路方向はほぼ直線的に延びる建物南側部分でみると東西ラインから $4\sim5^\circ$ 北に振る程度で,ほぼ東西方向を取っている。この方向は掘立柱建物跡の東西軸方向とほぼ一致している。」溝の幅は $4.60\sim6.50$ m,検出面から最深部までの深さは1.30 mを測る。北側の掘り方は急角度で落ち込んで底面に到り,南側は幅広い段を有し中央部で急激に落ち込む。底面の幅は $0.25\sim0.50$ mであり,レベルは東から西に向かって緩やかに下がる。底面には数本の杭がほぼ等間隔に打ち込まれていた。埋土は基本的には砂層であり,上層には洪水に伴う砂層が厚く堆積し,その



第 153 図 SD3001 平・断面図及び出土遺物実測図 (S:1/100.1/40.1/4)

下はラミナ状堆積をなす灰白色細砂と弱グライ化した緑灰色ないしオリーブ灰色細砂が交互に堆積する。このような堆積状態から判断すると、丘陵部からの洪水砂層により短期間に堆積したことが解り、さらにこの堆積層には2~3回の堆積時期があると考えられる。

遺物は、土師器小皿 (1059)、同杯 (1060~1062)、同椀 (1063~1066)、瓦器椀 (1067)、土師器甕 (1068~1071)、同甑 (1072)、須恵器杯蓋 (1073~1075)、同杯 (1076・1077・1079~1088)、同皿 (1078)、同高杯 (1089)、同壺 (1090・1092・1093)、同甕 (1091・1094・1095)、弥生土器甕 (1096・1097)、縄文土器浅鉢 (1098~1101)、同底部 (1102・1103)、カマド (1104~1110)、土錘 (1111)、平瓦 (1112~1114)、加工木 (1115~1134)である。

1059 は底面に回転へラキリが施される。1063・1064 は口縁端部が若干外反する。1065・1066 は黒色土器 A 類で、1065 の内面に放射状の暗文、1066 は内面にヘラミガキ、底面に回転ヘラキリが施される。1067 は外面に指頭圧痕、内面にヘラミガキが施される。

1069 は体部外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケが施される。1071 は口縁端部を上方に若干拡張させ、体部外面に縦方向のハケ、口縁部・頸部の内面に横方向のハケが施される。1072 はバケッ形の器形に扁平な把手が付き、外面に粗いハケが施される。1073 の口縁部は明瞭な稜を境に下方

に屈曲する。1074・1075の口縁部は短く屈曲する。1078は器高が低い。1083~1088は低い高台が付く。1083・1084・1087は底面にナデ、1085は中央に回転ヘラキリ、周辺に回転ヘラナデ、1086は回転ヘラケズリ、1088は回転ヘラケズリ後に回転ヘラナデが施される。1089は脚裾部が大きく外にひろがり、脚端部は短く下方に屈曲する。1095は外面にカキ目が施される。

1098 は口縁端部・外面に沈線, 1099 は 外面に沈線が施される。1100・1101 は内面 に凸帯が付く。1102・1103 は高台状の底部 である。

SD3003 ~ 3007 · 3009 ~ 3020

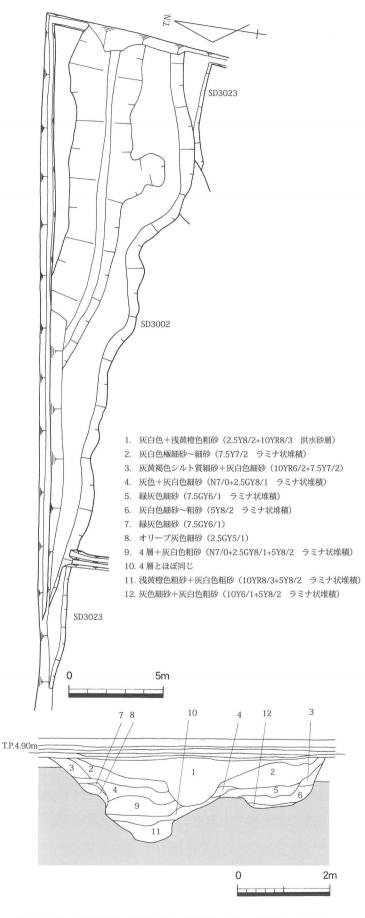
(第 159·160 図)

調査区中央にかけて検出した溝であり、SD3008・3021・3022を切る。これらの溝には切り合いがあり、SD3003はSD3006を切り、SD3010はSD3005を切る。検出した標高は4.21~4.60mである。大部分の溝の平面は西に開く「コ」の字型であるが、SD3006は南西端で北方向に屈曲しており方形に流路を取る可能性もある。溝の幅は0.30m前後であるが、SD3006は0.90m前後を測る広い溝である。検出面からの深さは0.05mであり、底面のレベルは東から西に向かって緩やかに下がる。

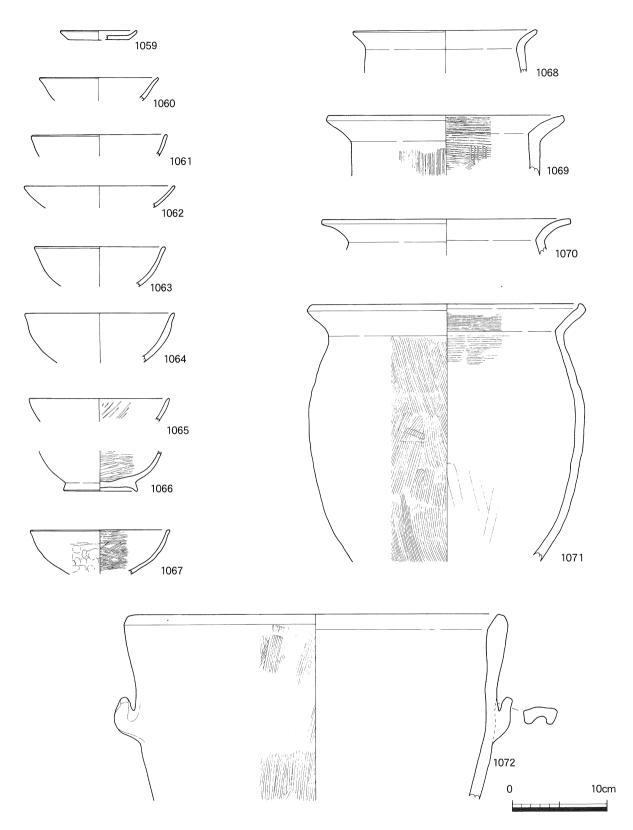
1135 は S D 3003 出土の須恵器杯であり、 底面に回転へラ削り後にナデが施される。

1136~1140 は S D 3005 出土で, 1136 は土師器杯で, 口縁端部内面に若干の凹みを巡らす。1137 は土師器甕である。1138 は TP4490m 須恵器杯蓋, 1139 は同杯で底面に回転ヘラケズリ後に静止ヘラナデが施される。1140 は須恵器壺である。

 $1141 \sim 1145$ は S D 3007 出土である。 1141 は土師器杯蓋,1142 は土師質土器甕, 1143 は平瓦,1144 は飯蛸壺,1145 は骨である。



第 154 図 SD3002・3023 平・断面図 (S:1/200. 1/80)

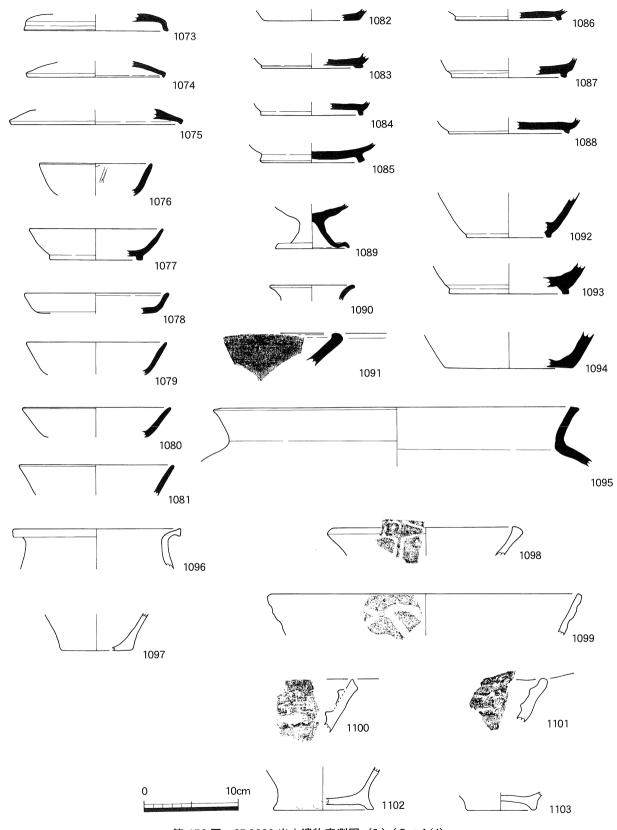


第 155 図 SD3002 出土遺物実測図(1)(S:1/4)

 $1146\sim1151$ は S D 3011 出土である。1146 は土師器杯, $1147\cdot1148$ は同甕, $1149\sim1151$ は須恵器杯である。

 $1152 \sim 1154$ は S D 3012 出土である。1152 は須恵器杯で内外面に釉がかかる。1153 は同杯で底面に回転ヘラキリ後にナデが施される。1154 は土師質土器甕である。

1155 ~ 1157 は S D 3014 出土である。1155 は土師器杯, 1156 は土師質土器甕, 1157 は須恵

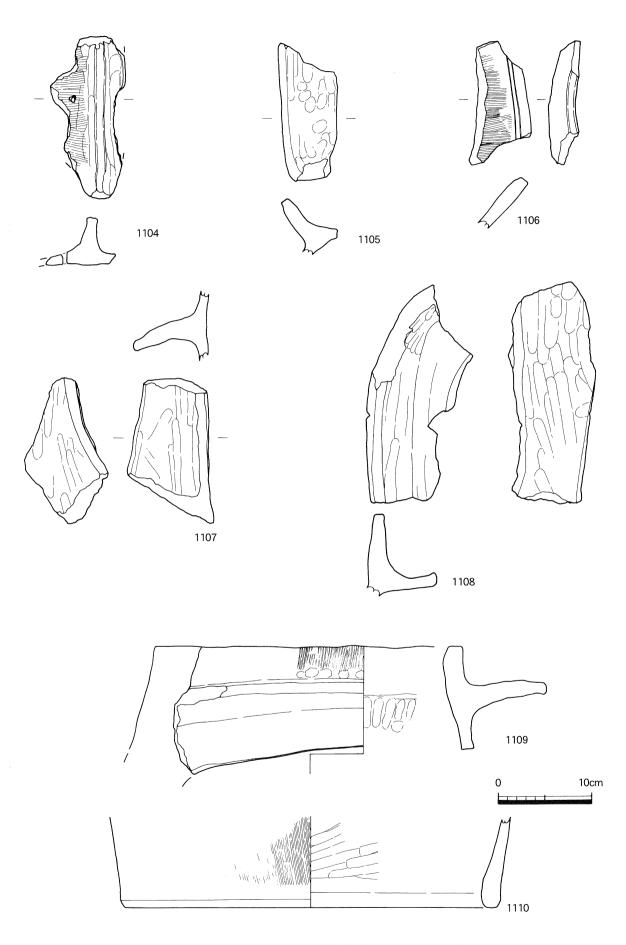


第 156 図 SD3002 出土遺物実測図(2)(S:1/4)

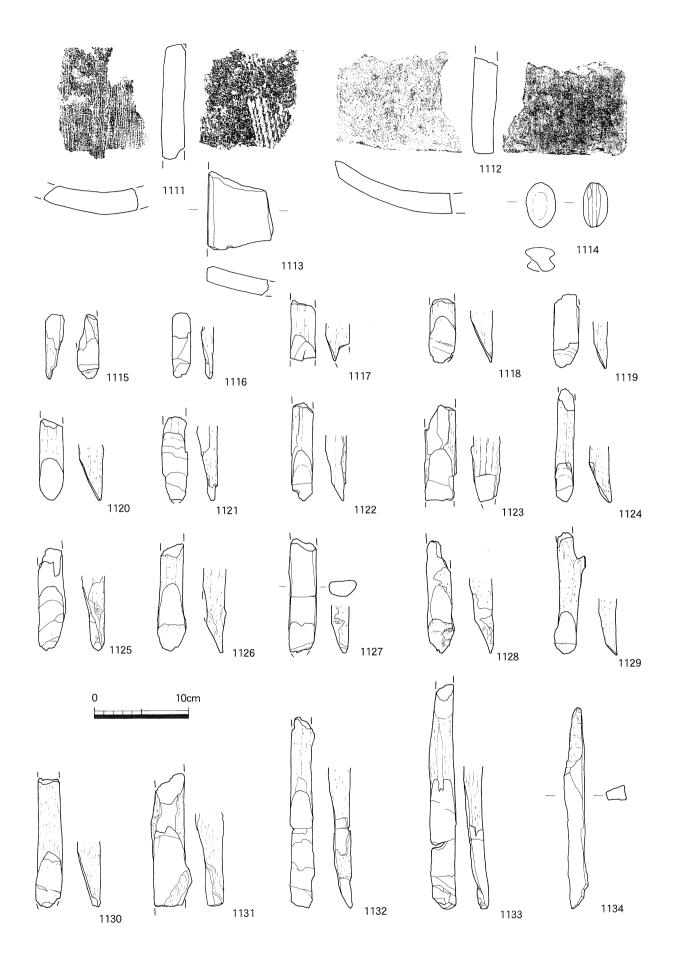
器蓋である。

1158 は S D 3016 出土の土師器甕である。1159・1160 は S D 3017 出土で,1159 は弥生土器甕,1160 は須恵器杯である。

1161 ~ 1163 は S D 3019 出土で、1161 は須恵器杯、1162・1163 は土師器甕である。



第 157 図 SD3002 出土遺物実測図 (3) (S: 1/4)



第 158 図 SD3002 出土遺物実測図 (4) (S: 1/4)



第 159 図 SD3003~3007·3009~3020平·断面図(S:1/1200.1/40)